

自ら学び、心豊かで、たくましく生きる、 実践力のある生徒の育成

学び合い、認め合い、高め合える場づくり・集団づくりを通して

小松市国府中学校 著
杉江修治 監修

一粒書房

本書は2010年10月14日に小松市教育委員会の「子どもたちの主体性、・自立性を育む教育研究推進校」指定を受けた成果を公開した研究発表会で配布した研究紀要に若干の調整を加えたものである。

はじめに

本校は、平成17年度から4年間に渡る学校研究テーマ「豊かな学びの実現を目指して～よく聴き、よく考え、よく表す生徒の育成～」の実践を通して、基礎基本の土台づくりを目指し、その成果を求めてきました。その上で、21年度は、新学習指導要領の先行実施が始まり、学校として新たな旅立ちの時という思いでスタートしました。

このような中で、平成21・22年度の2年間にわたり、小松市教育委員会から「子どもたちの主体性・自律性を育む教育研究推進校」の指定を受け、「自ら学び、心豊かで、たくましく生きる、実践力のある生徒の育成」の研究主題のもと、サブテーマを「学び合い、認め合い、高め合える場づくり・集団づくりを通して」として研究に取り組んできました。私たちは、本校の教育目標「気づき 考え 実行する生徒の育成」はこの生徒の主体性・自律性なくしては到達し得ないテーマであり、まさに満を持した学校研究テーマが与えられたと考え、「学び合い」をキーワードに生徒の主体性・自律性を育むことを目指し、授業改善や人間関係づくり、集団参加への意欲づくりの実践を積み重ねてきました。

私たちが育みたいのは、目の前にいる生徒一人一人の「生きる力」です。私たちは「生きる力」を「自ら課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決しようとする能力や資質」であると捉え、生徒たちが主体となって実際の授業や体験を通して、実際に役立つ、もしくは必要や感性に訴える中から学ぶことで学力を身につけ、仲間との関わりの中で人間関係を創り上げていくことで「生きる力」が身についていくと考えています。

本校では、生徒一人一人の「主体的な学び」を育むために「授業づくり」「人間関係づくり」「参加への意欲づくり」の3部会に分かれて取り組み、職員全体で共通理解を図ってきました。さらに、研究授業の整理会も工夫を重ね、教師が主体的に学べる形になるよう吟味してきました。特にこの2年間、中京大学教授の杉江修治先生をはじめ、指導主事の先生方に回数を重ねたご指導をいただいたことは大きな前進でありました。

子どもたちの学力の向上の鍵は、授業改善が握っています。生徒は素直で落ち着きがあり、教師も授業に打ち込める今こそが、教師自身の授業力を向上させる好機であると捉え、これを教師一人一人が自覚し、この研究発表会を目指し努力してきました。私たち教職員一同は、この国府中学校が生徒・保護者から「学びたい学校・学ばせたい学校・学んでよかった学校」だと思われることを目指してきました。

この研究紀要は、本校教職員が力を合わせて取り組んだささやかな実践の歩みです。本日の公開授業・生徒会活動の参観と併せて、忌憚のないご意見・ご指導を賜り、今後の研鑽の糧とさせていただきますと思います。

終わりにになりましたが、この2年間の研究で、丁寧且つ適切な指導を賜りました小松市教育委員会、小松教育事務所や石川県教育センターの指導主事各位に深く感謝申し上げます。今後はこの研究の成果をさらに進化させ、国府中学校の発展に繋げるよう努力していく所存であります。

平成22年10月

小松市立国府中学校
校長 中村 茂

目 次

I. 研究の概要	
1 主題設定の理由	3
2 研究の方針	4
3 研究の内容	5
4 研究の経過	7
II. 研究の実践	
1 授業づくり	9
(1) 授業づくりの方針	9
(2) 国語科の取り組み	12
(3) 社会科の取り組み	22
(4) 数学科の取り組み	28
(5) 理科の取り組み	40
(6) 英語科の取り組み	52
(7) 音楽科の取り組み	62
(8) 美術科の取り組み	70
(9) 保健体育科の取り組み	78
(10) 特別支援教育取り組み 知的障害特別支援学級	84
(11) 特別支援教育取り組み 自閉症・情緒障害特別支援学級	88
2 人間関係づくり	92
(1) 学級づくりの取り組み	92
(2) ライフスキルの実践	94
(3) 道徳を中心とした心の教育の推進	96
(4) 人権教育の取り組み	100
3 集団参加への意欲づくり	101
(1) 学校行事を通しての学び合いの実践	101
1) 運動会	101
2) 文化祭	103
(2) 生徒会活動の取り組み	104
1) 生徒会役員会	107
2) 生活委員会	108
3) 体育委員会	109
4) 文化委員会	110
5) 図書委員会	111
6) 保健委員会	112
7) 赤十字委員会	113
8) 放送委員会	114
9) 環境委員会	115
10) 給食委員会	116
4 その他	117
(1) 家庭・地域・社会との連携づくり	117
(2) 生徒・職員アンケートからの検証	121
III. 学校研究全体の成果と課題	123

論文 「本物の教育実践研究の追求」 中京大学教授 杉江 修治

あとがき

I 研究の概要

1. 主題設定の理由

(1) 研究主題

平成21・22年度「子どもたちの主体性・自律性を育む教育研究」推進校

自ら学び、心豊かで、たくましく生きる、実践力のある生徒の育成

～学び合い、認め合い、高め合える場づくり・集団づくりを通して～

(2) 主題設定の理由

社会の変容がますます拡大し、加速度的に進む時代においては、自分の意志によって行動を起こす主体的な人間が求められる。生徒が主体となる授業や体験等を通して、生徒自らが主体的に思考し、判断し、自ら学ぶことのできる生徒の育成を目指したいと考えた。これは、学校生活全般において、身に付けられるべきものである。

何を残すかといった目に見えるものではなく、どんな力をつけたいのか、どのような生徒を育てたいのか、それを中学校3年間の教育課程全体から考えた。その上で「学校研究」の目標をどこに位置づけるか、私たちの取り組みはこの視点から始まっている。

この教育実践は、より豊かな学力の育成を目指すものであり、本校の教育目標「気づき・考え・実行する生徒の育成」を最終ゴールとしている。

生徒の主体性・自律性を育みながら、よりよき人間関係を形成しつつ、学び合い・認め合い・高め合う「場づくり」と「集団づくり」を全教育活動の中で研究推進していきたいと考え、本主題を設定した。

(3) 本校における学び合い

本研究では、副題として「学び合い」を大きく掲げている。この「学び合い」は「協同学習」「教え合い学習」とも呼ばれるものである。その理念は、お互いに助け合うことで学力の向上と共に豊かな人間関係が育まれることをねらいとしている。

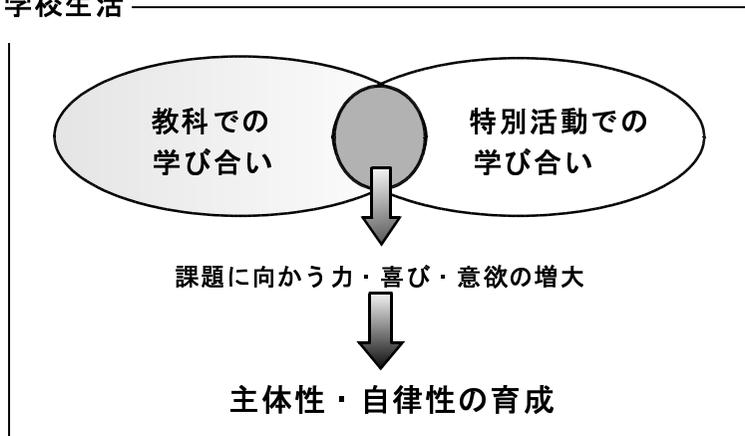
したがって、「学び合い」のゴールは「確かな学力をつけること」と共に「学級の中に望ましい人間関係を育てる」「一人一人の生徒が協力して、よりよい生活を築こうとする主体的、自律的な態度を育てる」ことである。

すべての生徒がお互いの人格を認め合いながら生活できる集団づくりを基盤として、互いに教え合ったり、学び合ったりできる実践を目指したいと考えた。

* 学び合いと主体性・自律性の育成との関連

- ①教科の学び合いが特別活動での学び合いに生かされたり、逆に特別活動での学び合いが教科の学び合いに生かされたりする。
- ②そして、学び合いの共通部分（課題に向かう力・喜び・意欲）が生じる。
- ③それは、学校生活全体の意欲化につながる。
- ④学校生活全体が高まることで、共通部分はさらに増大していく。

学校生活



(4) 生徒の現状と課題

一校区、一小学校一中学校なので、友人関係がともすれば固定化される傾向がある。それが学習集団の基礎である学級、学年の集団へ影響を及ぼす場面もあった。しかし、中学校時代は生徒一人一人が自己を確立していく時期であり、小学校時代の人間関係とは大きく異なってくるはずである。思春期での発達段階を踏まえ、生徒相互の関わり合いや信頼関係が築かれ、安心して学習活動が展開できるような「集団づくり」と「場づくり」を積極的につくっていかなければならない。

平成21年度から新しい学習指導要領に基づいたカリキュラムのもと、授業改善や指導方法の工夫をすすめた結果、生徒の授業への意欲は増した。生徒のアンケートや重要度意識調査から家庭学習時間の増加や規範意識の上昇も少しずつ見られた。全般的に安定した状況と言える。

また、学力調査結果の分析等から思考力、判断力、表現力に結びつくような言語活動の充実が課題として挙げられた。さらに、自分の意見を述べたり、人の意見を聞く活動、全体の前で発表する活動、グループや全体で話し合う活動の場面では本校の生徒は自信がなく、経験や機会も不足しているようである。これは国語科だけではなく、全教科及び学校生活全般において言語活動を指導計画に位置付け、充実させていく必要がある。

2. 研究の方針

研究の柱を以下の3点に据えて取り組み、全体会で共通理解、深化を図っていく。

「授業づくり」の視点から (授業づくり部会)

- ・興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫
- ・言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導の工夫
- ・「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

「人間関係づくり」の視点から (学級づくり部会)

- ・互いに認め合うことのできる人間関係が形成される学級経営のあり方
- ・Q-U分析の活用や構成的グループエンカウンター、思春期ライフスキル教育プログラム等の積極的な実践
- ・自主性や協力性の向上を図る学級・学年行事の創造、成果の共有と発表の場の設定
- ・道徳を中心とした心の教育の推進

「参加への意欲づくり」の視点から（生徒会部会）

- ・一人一人の生徒が主体的に取り組む専門委員会の活動のあり方
- ・生徒の主体性を育む学校行事の企画・運営のあり方
- ・達成感・充実感・自己有用感が味わえる生徒会活動のあり方

この他にも、「家庭・地域・社会との関わりづくり」や「学校評価の活用」の視点から本研究に取り組んだ。

3. 研究の内容

授業づくり部会

- ①学習環境を整え、授業規律や学びのルールが確立している授業の成立
- ②ねらいを明確にし、学ぶ意欲を喚起し、学習の見通しを持たせるシラバスの作成
- ③思考力・判断力・表現力をめあてにした言語活動の充実を図る授業改善
- ④「学び合い」を取り入れた、生徒相互のかかわり合いと考えを深め、高める授業改善
- ⑤授業の成就感から発展する家庭学習の習慣の定着と内容の充実
- ⑥授業評価と分析からの授業改善
- ⑦授業研究を主体とした校内研修会の充実

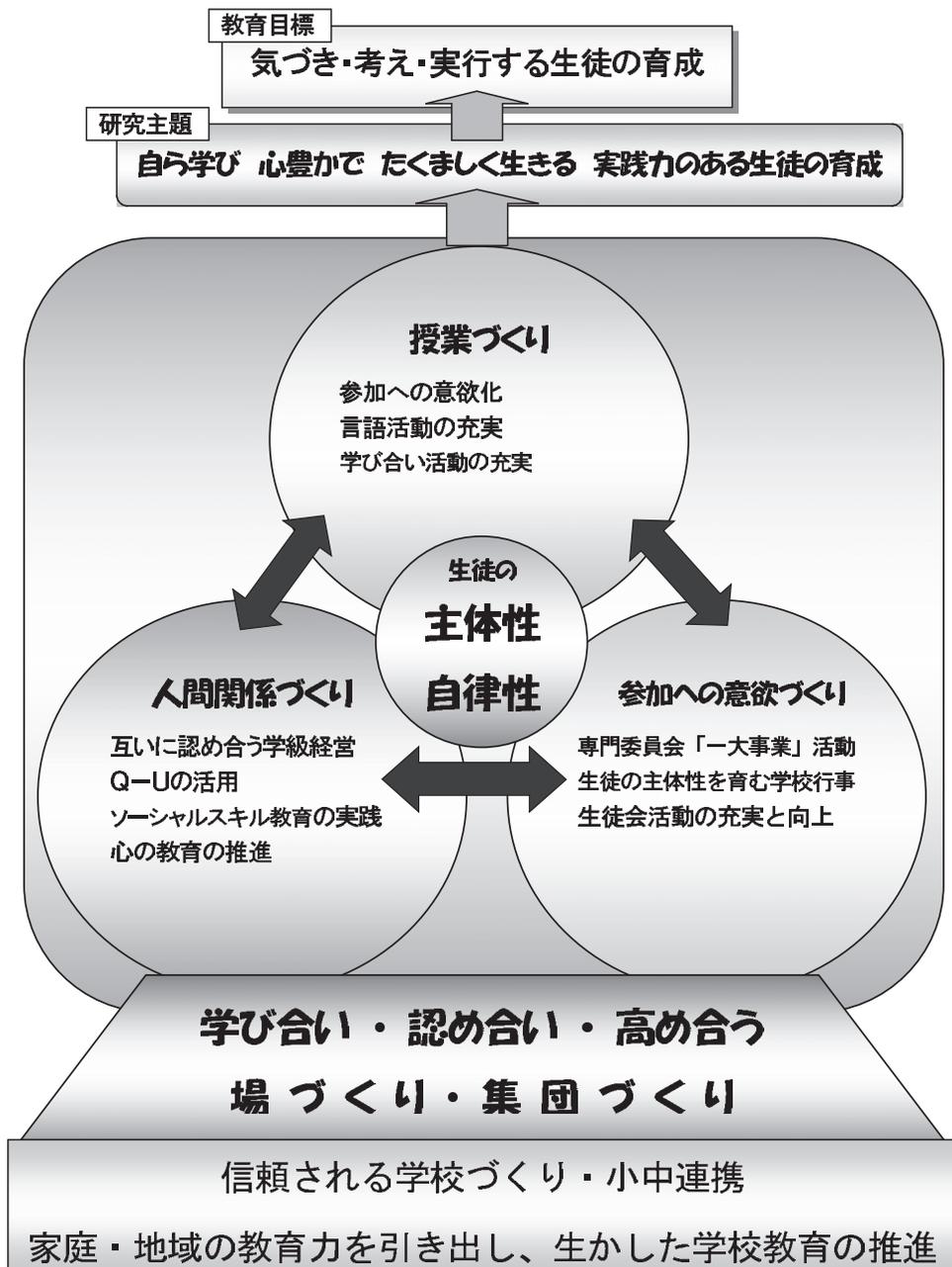
学級づくり部会

- ①人間関係づくりに関するアンケート調査、ふれあい週間などを通した生徒理解の実践
- ②Q-Uの分析結果からの学級集団の状態の把握と授業での構成、展開の実践
- ③構成的グループエンカウンター、思春期ライフスキルプログラムの活用によるソーシャルスキルの獲得
- ④喜びや楽しさにつながる学級活動から生まれる人間関係と集団づくり
- ⑤互いの思いや考えを語り合い、学び合うことを大切にする道徳の授業実践

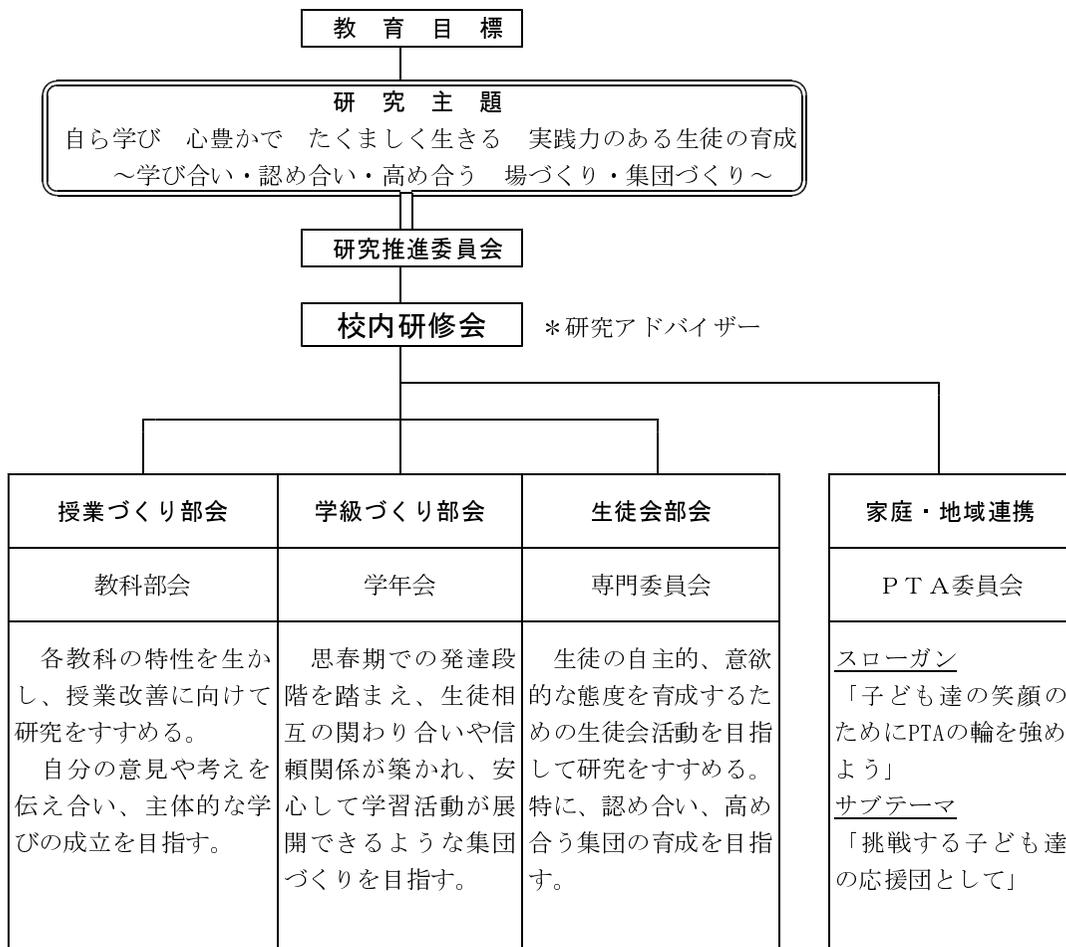
生徒会部会

- ①生徒が主体的に取り組む専門委員会「一大事業」活動
- ②学校行事において、一人一人がお互いの良いところを認め合い、支え合い、励まし合う集団づくり
- ③生徒会活動の充実による「気づき、考え、実行する生徒」の一人一人の主体性・協力性の向上

研究構想図



(4) 研究組織



4. 研究の経過

平成21年度

月	研究活動	内 容
4	第1回校内研修会 授業公開	校内研究の今年度の方針・計画について 全クラス 道徳・学活
5	第2回校内研修会	Q-Uの理解と分析について 授業改善プラン・学力向上プランについて
6	第3回校内研修会 第4回校内研修会	中京大学教授 杉江修治先生を迎えての公開授業と全体会 美術科、社会科指導案検討
7	中高連携取り組み 第5回校内研修会	小松商業高校来校 公開授業 分科会 中京大学教授 杉江修治先生を迎えての研究授業と全体会 美術科、社会科
8	第6回校内研修会 第7回校内研修会	Q-Uの分析と課題について 淑徳大学名誉教授 新宮弘識先生を迎えての研修
9	要請訪問 研究授業	特別支援、理科、体育科、国語科、音楽科、数学科の研究授業

10	第8回校内研修会 公開授業 研究発表大会参加 研究発表大会参加	研究授業をふり返る ライフスキル1年、2年、3年 神戸大学附属住吉中学校 国府小学校
11	学校評価訪問 第9回校内研修会 中高連携 先行授業 先行授業 研究発表大会参加	公開授業 道徳他 先進校視察報告 小松商業高校授業参観 全体会 道徳科 道徳科 小松市立安宅中学校
12	第10回校内研修会 第11回校内研修会	淑徳大学名誉教授 新宮弘識先生を迎えて道徳の研究授業研究紀要について
1	第12回校内研修会	研究授業実施について
2	指導案検討 指導案検討 先行授業 第13回校内研修会	数学科 国語科 数学科 中京大学教授 杉江修治先生を迎えての研究授業と全体会 数学科、国語科
3	第14回校内研修会	次年度の研究主題、計画の提示

平成22年度

月	研究活動	内 容
4	第1回校内研修会 授業公開 第2回校内研修会	研究の経過報告と計画 全クラス公開 道徳・学活・ライフスキル 平成22年度の研究主題、計画の決定
5	第3回校内研修会	今年度の研究内容について
6	第4回校内研修会	中京大学教授 杉江 修治先生を迎えての研究授業と全体会 数学科、理科、保健体育科、美術科、英語科、国語科
7	第5回校内研修会 第1回要請訪問 第6回校内研修会 学びアンケート	特別活動の研究の進め方について、国語科授業研究 全クラスにおいて研究授業を行う 校内研究紀要について 生徒の実態調査
8	第7回校内研修会 第2回要請訪問	指導案検討 英語科、数学科、理科
9	第8回校内研修会	公開授業準備
10	研究発表会	公開授業 研究概要 講演会 中京大学教授 杉江修治先生

Ⅱ 研究の実践

1 授業づくり部会

(1) 授業づくりの方針

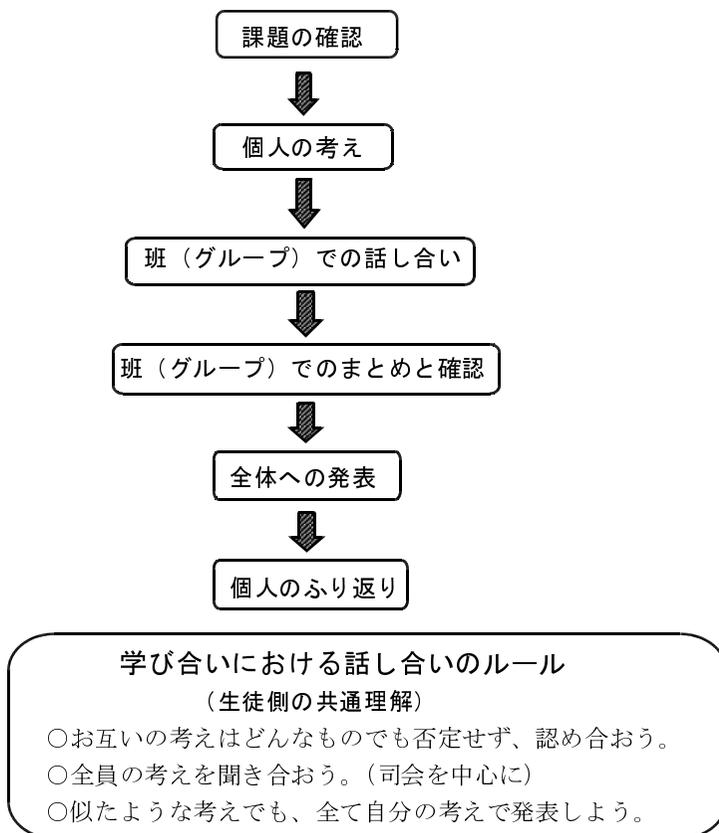
1) 目指す生徒の姿

生徒相互の関わり合いを築き、安心して学習活動が展開できるような場づくりを積極的につくり、言語活動や学び合い活動の充実を各教科で進めることで、自分の意見や考えを正確に伝え合う力を身に付けさせ、自分を表現する能力を高め、主体的に学ぶ生徒の育成を目指したいと考えた。

2) 授業づくりの方針

「授業改善」の方策の柱として、「協同学習」を導入し、「学び合い」の活動を授業に取り入れることにした。特に、学習指導においては、協同学習の理論による「学び合い」の場づくりを授業改善の視点として設けることにより、これまでの授業形態を大きく変革していこうと考えた。また、生徒の「学び合い」の場づくりと共に教師側の「学び合い」の場として、研究授業後の研究協議会を位置づけた。グループに分かれてK J法を用いた自由な意見交換や少数意見の尊重を大切に授業検討をし、授業力・指導力の向上を図った。

3) 学び合いの進め方



学び合いにおける教師の役割
(学び合いの学習場面をどう組み立てるか)

- 生徒に学習課題と目標をしっかりと説明する。
 - ・生徒にとって授業のゴールが明確になっている。
 - ・生徒に考える時間が十分にある。

- 班（グループ）の編成について方針をきちんと決める。
 - ・学び合いの手立てが用意されている。

- 班（グループ）による学び合いが有効であるかどうか観察し、課題に対する援助をしたり、学び合いが活発になるように指導したりする。

4) 授業改善の視点について

各教科共通で次の①～③の授業改善の視点を設定した。

- 視点① 興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫
- 視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫
- 視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

5) 授業づくりの重点

主体的・自律的に学ぶことが可能な仕掛けとして、次のことをねらいとした。

- ① 参加を促す課題設定や提示
主体的な学習になるような学習プロセスの工夫や学ぶ意欲を向上させるような課題の設定を工夫する。
- ② 協同による学習指導過程
学び合い活動の充実を図ることで、集団の学ぶ意欲を高め、一人一人に確かな学力を身につけさせる。
- ③ 主体的な生徒の参加や学びの姿
生徒が意欲的に活動するような生徒主導の学習過程を多く設定する。
- ④ 言語活動の充実
自分の考えや情報をもとに、書いたり話したりする機会を持つとともに、自分と異なる考えや新たな情報とふれあうことによって、学び合いの場づくりと学びを深める指導を工夫する。
- ⑤ 成就を確認できる評価活動（ふり返し）
学習内容と学習過程のふり返しをし、学びの手ごたえを通して学習意欲を高める。

6) 授業研究の工夫

授業を参観する際の共通の観点を設定した。

授業参観の観点	参観メモシート
①参加を促す課題設定や提示	・課題の明示と学習の見通しの提示＝ゴールとなっているか。
②協同による学習指導過程	・個人思考の場の設定（生徒に考えを持たせる手立て）ができているか ・学び合いの場の設定と班での個の役割ができているか。
③主体的な生徒の参加や学びの姿	・生徒の主体性を引き出す教師のかかわりができているか。 ・意欲的に活動するような教材・教具の工夫ができているか。
④言語活動の充実	・考えを根拠・比較等を伴って表現する場の設定ができているか。
⑤成就を確認できる評価活動（ふり返り）	・ねらいにあった学習活動とまとめになっているか。 ・自分たちの学びへのふり返りができているか。

指導案検討の段階から事前に授業者の意図を理解し、授業参観の観点を確認し、授業検討をした。

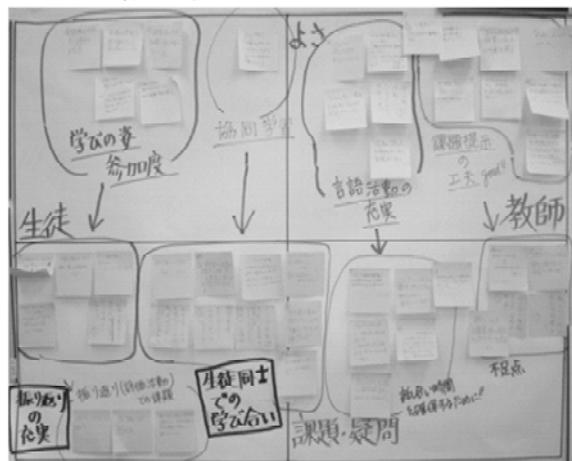
授業検討 <付箋の書き方>例

- ・太めのペン、大きめの字で書く
- ・上の【授業参観の観点】に沿ってコメントを書く。
- ・1枚には1つの事柄を書く
- ・まずは、起きていたこと、感じたこと、考えたことを「指摘」することが第一
- ・改善案を示すのは協議の場で

※授業参観の観点をもとに、多くの意見を集約し、全員参加による授業研究を進めることをねらいとした。生徒の活動や動き、発表など客観的な事実を積み上げて、グループで協議し、その後全体報告会で話し合われたことを共有した。



教師のグループによる授業研究会



ボードを使ったグループの発表

(2) 国語科の取り組み

1) 国語科授業改善プラン

◆目指す授業の姿

自分の考えたことや感じたことを進んで表現する授業

◆授業改善の3つの視点における重点目標

視点①：シラバスを利用したり、授業の目標や学習の流れを明確にすることで、生徒の参加への意欲づけを行う。また、生徒が興味を持ち、意欲的に取り組めるような課題の設定を行う。

視点②：自分の考えを持ち、それをグループ等で表現し合う場を設定する。

視点③：話し合いの論点を明確にした「学び合い」の場を作る。

◆重点目標達成への具体的な方策

視点① ・単元の初めにシラバスを活用し、単元のねらいを把握するとともに、学習内容の見通しを持たせる。

・生徒が、授業の目標や学習の流れを把握できるような板書計画を立てる。

・生徒が興味関心を持てるよう、課題の内容や発問の工夫を行う。

視点② ・自分の考えを持つ時間を確保し、どの生徒も意見を持てるようにする。

・自分の考えを書いたり、発表したり、相手の意見を聞く場を各領域で設けていく。

・上記の活動を通して、自分の考えが深められたか、話し合った効果があったかを振り返る。

視点③ ・学び合いの場面を学習活動の中に設定していく。

・学び合いの場面では係分担を明確にし、どの生徒もいろいろな役割ができるようにする。

・学び合いの手順や話し方のモデルを生徒に示し、学習活動を進める。

◎教科において考えられる基盤となる言語活動の場

・日常生活や社会生活の話題について、報告や紹介をしたり、対話や討論を行う。(話す・聞く)

・調べてわかったことを説明したり発表したりする。(話す・聞く)

・社会生活の話題について、相手を説得するために意見を述べる。(話す・聞く)

・関心のある文学作品の鑑賞文を書いたり、詩歌や物語を作ったり、手紙を書いたりする。(書く)

・図や表を用いた説明や記録の文章を書く。(書く)

・自分の立場を決めて、意見文を書く。(書く)

・関心のある事柄について批評文を書く。(書く)

・様々な種類の文章を読んだり、感想を交流したりする。(読む)

・説明や評論の文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを持つ。(読む)

・自分が得た情報を比較したり、批評したりする。(読む)

・自分の読書生活を振り返る。(読む)

◆重点目標の評価

視点① ・意欲的に学習に参加しようとしている。

視点② ・自分の考えを持ち、それを表現しようとしている。

視点③ ・「学び合い」では、それぞれの役割を意識しながら学習活動を進めている。

視点① 興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

2) 国語科における授業づくりの重点

新しい中学校学習指導要領では、生徒に思考力・判断力・表現力等を育むために、あらゆる教科で「言語活動を充実させる」ことが重視されている。国語科は、言語活動の中核を担う教科である。国語科で身に付ける言語能力をきちんと押さえ、その能力が他の教科等で生かせるようにするため、「言語活動の充実」を授業づくりの大きな柱として、次の3つの視点で授業改善に取り組んできた。

① 意欲化を図る導入の工夫

新しい単元に入る際にシラバスを活用し、単元全体の学習内容を示す。この単元や教材でどんな力をつけるのかなどを説明し、見通しを持って授業に取り組みせるようにする。毎時間の授業でも、本時の課題や授業のゴールラインを明確に示すことで意欲化を図る。また、国語科で培った言語能力が、他の教科で生かされる具体的な場面を伝えることで、興味・関心を高める。

② 言語活動の充実

言語活動の基盤ともいえる「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域の教材を、学年の発達段階に応じて丁寧に指導する。これらの領域で培った「伝え合う力」が、さまざまな言語活動の下地になるようにする。また、これと並行し、「読むこと」の領域での言語活動を洗い出し、これを取り入れた授業づくりを行う。

③ 生徒の声が響く授業

これまでは、教師が発問し、数人の生徒が答える授業が多かった。こうした一問一答式の授業ではなく、学校研究の副題にある「学び合い 認め合い 高め合う」授業、生徒の声が響く授業づくりを行う。そのために、「個の考えをまとめる→グループで話し合う→クラス全体で深める」というパターンを意識して取り入れる。また、授業を振り返る場面では、自己評価や肯定的な相互評価などを行い、お互いの良さを指摘したり、自分の成長を実感できる授業を行う。

3) 国語科における授業づくりの実践

授業改善の3つの視点に沿って、授業実践を振り返りたい。

① 意欲化を図る導入の工夫

シラバスの活用は2年目になる。単元の見通しを持たせることで、生徒の授業への集中力が上がってきたように思われる。例えば、3年生の「俳句の可能性」の単元では、「俳句の約束事を知る」→「俳句の鑑賞の仕方を学ぶ」→「俳句を選んで自分の考えを持つ」→「自分で俳句を作る」といった一連の学習の流れを説明した。これにより、今学習していることが次時の土台になることを把握しながら授業に臨むことができた。また、授業の導入で、本時の課題と1時間の学習の流れを板書で示すことで、時間毎に何をすればよいかが明確になり、授業への参加度も上がってきた。

② 言語活動の充実

言語活動を取り入れた授業では、「言語活動を行う目的」「それを達成ための学習活動」を、学年の発達段階に応じて生徒に説明するようにした。これは、言語活動を行うことが目的ではなく、それを通してどのような言語能力をつけるかを自覚させるためである。例えば、1年生の「発見したことを伝えよう スピーチの会」では、次のように説明した。「これから4時間で、自分の気持ちが相手に伝わるように話すことができる能力をつけます。同時に、話し手の意図を考えながら話を聞く能力もつけます(目的)。そのために、中学生になって新しく発見したことの中から一つ話題を選び、スピーチメモを書いた上で、スピーチの会を開きます(学習活動)。」

「話すこと・聞くこと」の学習で培った言語能力は、授業だけではなく、日常生活ですぐに生かされるものである。特に3年生は、委員会活動・部活動・全校集会など、多くの人を前に

して話す機会が多い。こうした学習のあと、いろいろな場面で、相手を意識して分かりやすく話そう、メモを見ずに話そうなどの姿勢が出てきた。

「書くこと」の言語活動では、1年「小学校の恩師への近況報告の手紙」、2年「視点を変えて書く」、3年「新聞の特徴を生かして書く」等を行ってきた。こうした学習が、「総合的な学習の時間」のまとめである「お礼状・レポート作成・修学旅行の新聞づくり」といった学習につなげることができた。

「読むこと」の言語活動は、文学作品の詳細な読解から一歩進み、「朗読会」「感想の交流」「情報の比較」等を行ってきた。特に古典分野で、和歌について読み取ったことを物語や絵にして感想を交流した学習は意欲的に取り組んでいた。

③ 生徒の声が響く授業

「学び合いのできる場づくり」のため、国語科として、グループ学習の利点と欠点、グループ学習の約束事、グループ内での役割分担等を指導した。また、話し合いでは、結論を述べてからその根拠を述べることやナンバリングの手法などを指導してきた。

学び合い学習をする際大切にしていたことは、「個人思考の時間を充分与え、自分の考えを持たせる」「何についてグループで話し合うかを明確にする」の2点である。

2年生の「文章の推敲」の学び合い学習では、役割分担をきちんと指示していたため、全員が話し合いに関わっていた。また、グループ内から「なるほど」「あっ、そうか」といった声を聞くこともできた。3年生の「俳句のイメージを広げる」学習でも、自分の思いを笑顔でグループ内の友達に伝えるなど、主体的に活動する生徒の姿が見られた。



学び合い学習の様子

第2学年A組 国語科学習指導案

日 時：平成22年2月23日（火）第4限
場 所：2年A組教室
指導者：湯浅 有紀

1 単元名 生きる姿（教材名 書く 視点を変えて書こう 新たな自分を発見する）

2 教材の目標

- ・さまざまな文体に興味をもち、文章を書くことを楽しむ態度を養う。（関心・意欲・態度）
- ・視点を定めて話題を整理し、表現や文体を工夫して書くことができる。（書く）
- ・書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料、活用の仕方について意見を述べたり助言をしたりして自分の考えを広める。（書く）

3 指導にあたって

(1) 教材観

自分を他者の視点で見つめ、自分について三人称で書く活動を行う。この教材では、さらに定めた視点にふさわしい文体を考えることとなる。文体は物語風・報道文風・脚本風・手紙風など文種の文例が挙げられており、特徴に容易に気づくことができ、生徒の興味を引くような構成になっている。国語の授業ではさまざまな文章を読んでいるが、文体について学習をする機会は今までになかった。本教材を通して、文体を意識して表現を工夫することと、相手意識・目的意識を持って何をどのように書くかという表現の力をつけることができると考えた。

(2) 生徒観

生徒たちは、「人物紹介パンフレットを作ろう」で、目的や読み手に応じて調べた事柄の中から必要な情報を整理し、レイアウトやタイトル・見出しによって効果的な紙面構成にすることを学習している。「根拠を明らかにして書こう」では、自分の立場を明確にして根拠を示し、分かりやすい構成を考えて意見を書く学習を行っている。それぞれの学習では、製作途中や完成後に自分たちが書いたものを互いに見合い、評価やアドバイスを行う交流の時間を持っている。そのため、交流活動には抵抗感が少ない。

出来事や感想を書くことには慣れ親しんでいる生徒たちである。この学習を通して、多様な表現方法を知り、表現力の向上を図りたい。

(3) 指導観

今年度は、課題設定・取材・記述・推敲など多くの段階で生徒同士の交流の時間を多く設定し、「書く」という行為に必要な相手意識を持たせるようにしてきた。本教材では、交流を行う場面ごとに、他の人の考えを知る・他の人の考えを参考に自分の考えを広げる・教え合うなどねらいを明確にし、課題を意識して活動に取り組めるようにしていきたい。また、一つの作品をグループで仕上げていく過程を通して学びが深まるという学び合いの場を設定し、意見を交換し合う中で表現力を伸ばす活動に重点を置いた。

4 指導・評価計画（総時数5時間）

	目標	主な学習活動	①関心・意欲・態度	②書く
二 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・書くための視点を広い範囲から考える。 ・書く視点を決め、それに関する内容を広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マッピングを利用し、自分を見る視点を探す。 ・視点を選び、自分との関係を整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・進んで視点を広げようとしている。 ・選んだテーマに関する事柄や思い出を広げよう 	<ul style="list-style-type: none"> ・視点を定めて話題を整理することができる。

<ul style="list-style-type: none"> ・教科書にある文例をもとに、文体について知る。 ・話し手の呼び方や文末によって印象が変わることをつかむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文例をもとに、文体の特徴を知る。 ・『吾輩は猫である』の一部を、文体を変えて書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文体に興味をもち、進んで呼び方や文末を変化させた文章を作っている。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・他者の視点から「自分の日常生活や努力を描き、励ましの言葉を贈る文章」を、表現や文体を工夫して書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文体や話し手の呼び方、文末表現を決める。 ・文章を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・呼称や文末表現を考え、表現を工夫した文章を書こうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の伝えたいことに合う文体を選んでいる。 ・視点となるものに合う言葉遣いを用い、テーマに合わせ書くことができる。
<ul style="list-style-type: none"> ・書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料、活用の仕方について意見を述べたり助言をしたりして自分の考えを広める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の書いた文章を見直す。 ・お互いの作品について意見や助言を述べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品を読んだの気づきや考えを進んで表している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料、活用の仕方について意見や助言をすることができる。
<ul style="list-style-type: none"> ・助言をもとに作品を仕上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品を完成させる。 ・完成した作品を相互評価 ・自己評価し、学習活動をふりかえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や友達の書いた文章から、表現の工夫の仕方の良さについて記入しようとしている。 	

5 本時の授業（第二次第4時）

(1) 教材名 書く 視点を変えて書こう 新たな自分を発見する

(2) 本時のねらい

- ・作品を読んでその作品の良さや、改善点・改善案など気付いたことを進んで書こうとしている。
(関心・意欲・態度)
- ・書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料、活用の仕方について意見を述べたり助言をしたりして自分の考えを広める。
(書く)

(3) 授業改善のための3つの視点

視点① 興味関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

- ・自分が書くうえで悩んだところや、書いたけれども自信がないところなどを事前にマークさせ、読み合いによって自分が知りたい助言を受けられるようにする。
- ・推敲のための視点を明確にする。

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・書いた文章を互いに読み合い、意見や助言を書きこんだものをもとに、作品をどのように完成させていくかを話し合う場を設定する。

視点③ 話し合いの論点を明確にした「学び合い」の場を作る。

- ・グループでの役割分担をし、スムーズな活動が行えるようにする。

(4) 準備・資料等

付箋紙(グループ内では全員が違う色になるようにする。・誰が書いたものかわかるように)、配時・役割分担を書いた掲示、ワークシート

(5) 本時の展開

配時	学習活動および形態	・：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点	◆：観点【方法】
5	・本時の課題をつかむ。 全体	・本時の学習のねらいと見通しを黒板に示す。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 本時の課題：自分の書いたものをもとに、よりよい作品を作り上げられるように推敲しよう。 </div>			
5	・自分の作品を読み返し、助言を得たい部分に傍線を付ける、助言を受けたいポイントを書き込む。 個人	◇助言を受けたい項目を具体的に表せるように語句や、文体、文章表現の長短などの例を示す。 視点1 ・迷ったり、悩んだりしたところ、納得できていないところをできるだけたくさんあげさせる。	
5	・グループでの推敲の視点の担当とグループ活動の役割分担を決める。 班	◇グループ活動を黒板に掲示をする。 視点3 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> リーダー 推敲時の係分担と回覧順の決定 タイムキーパー 時間の確認と調整 司会者 話し合いの進行 サポート 話し合いの記録(メモ)は作者が行うのでそれぞれの係が記録になった時の補佐 </div>	
15	・グループの作品を回覧板式で読み、各視点についての自分の考えを書き込む。 班	◇役割分担し、グループ活動を進める。 視点3 ◇どのような内容をチェックするのは、「推敲の視点」を記入したワークシートで示す。 視点1 ◇視点ごとのチェックは担当者が責任を持って行うよう強調する。 視点3 ・助言を受けたい箇所には、全員が付箋に書きこむ。	◆関心・意欲・態度 作品を読んでその作品の良さや、改善点・改善案など気付いたことを進んで書こうとしている。 【行動観察・ワークシート】
10	・それぞれの作品についての良い点や改善点・改善案を話し合う。 班	◇チェック項目の改善案だけでなく、残しておきたい表現や、さらに詳しく書くといい表現などより良い作品にするための話し合いができるようになる。 視点2	◆書く 互いに読み合い、文章の構成や材料活用の仕方について意見や助言をしようとしている。【行動観察】
5	・話し合いをもとに、自分の作品完成への方向性をワークシートにまとめる。 個人	・メモをもとに文章にする。	
5	・本時の振り返りをワークシートに記入し、発表する。 個人→全体 ・次時の予告をする。	・グループでの推敲が効果的に行われたかを振り返る。	

第3学年B組 国語科学習指導案

日 時：平成22年7月13日（火）第4限
場 所：3年B組教室
指導者：酢野 隆司

1 単元名 豊かな言葉（教材名 俳句の可能性）

2 教材の目標

- ・関心を持って俳句を読み、様々な人のものの見方や考え方を知ろうとする。
(関心・意欲・態度)
- ・俳句の基本的な形式や約束事を理解することができる。
(読む)
- ・俳句に表現された言葉を手がかりに情景や心情をイメージし、作品に対する自分の考えを持つことができる。
(読む)
- ・優れた表現に接し、言語感覚を磨き、語彙を豊かにすることができる。
(言語事項)

3 指導にあたって

(1) 教材観

本単元は、「俳句の可能性」「俳句十六句」の二つである。「俳句の可能性」は、明治以降5つの俳句作品を例に、俳句の形式や約束事をわかりやすく解説したものである。また、それぞれの句に簡単な鑑賞文が添えられている。そこでは、選び抜かれた言葉からイメージを広げたり、表現の深さを味わうことの楽しさが述べられている。「俳句十六句」は、「豊かな言葉」の学習をさらに充実させるための資料で、江戸時代の俳句4句、明治以降の俳句12句が載せられている。

俳句は、四季のはっきりした日本だからこそ生まれた伝統文化である。現在、外国でも高い評価を得、海外の俳人も増えている。俳句の学習を通して、自国の文化に誇りを持たせたい。また、十七音という短い言葉で表現される俳句には、凝縮した言葉が使われている。言葉を手がかりに、情景や心情を豊かに読み味わうことは、感性や語感を磨くことにつながると思われる。

(2) 生徒観

生徒は、第1学年で宮沢賢治の「詩」、第2学年で近代を代表する三人の「短歌」を学習している。2年次の「短歌」では、簡単な鑑賞文も作成している。また、1学年から「詩・短歌・俳句」のコンクールに応募するなど、俳句に親しみを感じている生徒も少なくはない。しかし、俳句について基礎から学ぶのは初めてであり、言葉からイメージを膨らませる学習に苦手意識を持つ生徒もいると思われる。「俳句の可能性」で俳句の基礎事項を押さえた上で、ウェビングマップ等を利用し、言葉から情景や心情を想像する楽しさを味わわせたい。生徒は、これまで課題に対して真面目に取り組んでいる。「俳句十六句」では、一人一人が担当する俳句を決め、作品の主題等を考えさせるとともに、それに対する自分の考えを持たせたい。

(3) 指導観

「俳句の可能性」では、言葉から情景や心情を想像するポイントとして、「作者がいる場所・作者の視点・時間帯」「作者が見ているけれど、俳句から省いたもの・聞こえてくる音・ただよってくるにおい・肌を感じる事等の5感」を提示したい。また、「俳句に句読点を打つ」「切れ字に注目」「ウェビングマップの活用」等、イメージを膨らませるポイントを丁寧に指導していきたい。一人では難しい場合、グループで話し合わせるなど、学び合いの活動を通して、情景や心情を想像する楽しさを味わわせたい。「俳句十六句」では、これまでの学習でつけた力を元に、

「作品の主題をつかむ」「作品に対する自分の考えを持つ」の2つを中心に俳句を鑑賞させたい。その際、一人2句、担当する俳句を決めることで、責任を持たせるとともに、鑑賞への意欲化を図りたい。この学習でも、同じ句を選んだ者同士で学び合い活動を行っていききたい。

本教材を通して俳句に対する興味を喚起させ、自ら創作する意欲をもたせるとともに、2学期の和歌の学習にもつなげていきたい。

4 指導・評価計画（総時数4時間）

次	目標	主な学習活動	①関心・意欲・態度	④読む	⑤言語事項
一 (2)	・「俳句の可能性」を読み、俳句の基本的な形式や約束事を知る。	・俳句の約束事や基礎的な用語を資料集などを使ってノートにまとめる。		・俳句の基本的な形式や約束事を理解できる。	
	・5つの俳句に表現された言葉を手がかりに情景や心情をイメージし、作品に対する自分の考えを持つことができる。	・筆者の鑑賞文を参考に、言葉からイメージを広げ、作品に対する自分の考えを持つ。	・関心を持って5つの俳句を読み、作者のものの方や考え方を知らうとする。	・俳句に表現された言葉を手がかりに情景や心情をイメージし、作品に対する自分の考えを持つことができる。	
二 (2)	・「俳句十六句」の前半から1句選び、言葉を手がかりに情景や心情をイメージし、作品に対する自分の考えを持つことができる。	・「俳句十六句」の前半から1句選び、言葉を手がかりに情景や心情をイメージし、作品に対する自分の考えを持つ。	・関心を持って俳句を読み、作者のものの方や考え方を知らうとする。	・「俳句十六句」の前半から1句選び、言葉を手がかりに情景や心情をイメージし、作品に対する自分の考えを持つことができる。	
	・「俳句十六句」の後半から1句選び、言葉を手がかりに情景や心情をイメージし、作品に対する自分の考えを持つことができる。	・「俳句十六句」の後半から1句選び、言葉を手がかりに情景や心情をイメージし、作品に対する自分の考えを持つ。		・「俳句十六句」の後半から1句選び、言葉を手がかりに情景や心情をイメージし、作品に対する自分の考えを持つことができる。	・優れた表現に接し、言語感覚を磨き、語彙を豊かにすることができる。

5 本時の授業（第二次第2時）

(1) 教材名 「俳句の可能性」

(2) 本時のねらい

- ・「俳句十六句」の後半から1句選び、言葉を手がかりに情景や心情をイメージし、作品に対する自分の考えを持つことができる。 (読む)
- ・優れた表現に接し、言語感覚を磨き、語彙を豊かにすることができる。 (言語事項)

(3) 授業改善のための3つの視点

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・俳句の言葉からイメージを広げ、その俳句に対する自分の考えを持つ。

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- ・同じ俳句を選んだグループが、自分のイメージなどを交流し、学び合う場を作る。
- ・各グループの考えを全体が共有する場を作る。

(4) 準備・資料等

最新国語資料集、ホワイトボード

(5) 本時の展開

配時	学習活動および形態	・：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点	◆：観点【方法】
10	<ul style="list-style-type: none"> ・前時を振り返る。 全体 ・本時の課題をつかむ。 全体 		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 本時の課題：俳句のイメージを広げ、その作品に対し自分の考えを話せるようになる。 </div>			
35	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が担当する俳句について、イメージを広げ、自分の考えを持つ。 個別 ・同じ俳句を担当した者で、自分のイメージを出し合い、作品の主題等を考える。 班 ・グループで話し合った結果を全体に発表する。 全体 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートや最新国語資料集の活用を促す。 ◇俳句の言葉からイメージを広げ、その俳句に対する自分の考えを持つ。 視点② ◇同じ俳句を選んだグループが、自分のイメージなどを交流し、学び合う場を作る。 視点③ ◇各グループの考えを全体が共有する場を作る。 視点③ 	<ul style="list-style-type: none"> ◆読む 言葉を手がかりに情景や心情をイメージし、作品に対する自分の考えを持つことができる。【発表】

5	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の振り返りをする。 ・次時の予告をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・俳句は、作者が感動した瞬間を選び抜かれた十七音で表現した1枚の写真のようなものであることを伝え、これまでの学習を参考に、夏休み中に俳句を創作することを伝える。 	<p>◆言語事項</p> <p>優れた表現に接し、言語感覚を磨き、語彙を豊かにすることができる。</p> <p>【夏休みの課題】</p>
---	--	--	--

4) 国語科の成果と課題

成果

- ・単元毎にシラバスを作成することで、生徒に見通しを持たせることができた。教師の方も、単元全体の中で学び合い活動をどの教材のどの場面で組み込むかなどの全体計画を立てることができた。また、指導の重点化を図ることもできた。
- ・言語活動の基盤となる「伝え合う力」の指導は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域で行うことができた。少しずつではあるが、国語科でつけた言語能力が「総合的な学習の時間」の発表などで生かされていることを感じた。
- ・学び合い活動を取り入れることで、生徒が生き生きと授業に取り組む姿が見られた。一問一答式の授業では発言のない生徒が、意欲的に自分の作品の説明をする姿、自分の考えを一生懸命グループの仲間に伝えている姿などである。また、授業の最初に本時の課題や流れを伝える大切さを再確認することができた。

課題

- ・国語科で培った言語能力を基本に、他教科での言語活動を行うことになる。国語科での言語活動などを通して、話し合いのルール、論理的な説明や論述の手順、討論の仕方など、学年の発達段階に応じて指導していく必要がある。
- ・年間計画を作成する際、「総合的な学習の時間」の学習活動との連携に配慮する必要がある。「総合的な学習の時間」では、どのような言語活動がどのような場面で行われるのか、そのために必要とされる言語能力はどのような内容であるのかを把握した上で、国語科の年間指導計画を作成することが必要である。
- ・「読むこと」の言語活動を充実させる必要がある。特に、物語や小説文では登場人物の心情を読み取ることで学習を終えることが多い。登場人物の生き方や表現の仕方を批評する言語活動を取り入れたい。また、教室だけの授業ではなく、図書館やパソコン教室を活用するなど、学習の場を広げたい。
- ・学び合い学習では、生徒の主体的な活動に時間を費やすことが多く、振り返りの場面を作ることが少なかった。活動だけで学びのない授業にならぬよう、自己評価や相互評価を取り入れたり、本時の課題に対する達成状況を確認する場面を設定するなど、事前の計画が大切である。

(3) 社会科の取り組み

1) 社会科授業改善プラン

<p>◆目指す授業の姿</p> <p>基本的な知識を確実に習得した上で、他との学び合いの中で、資料収集能力や読解力・課題解決能力を高め、自らの考えを他に発表していくことができる授業。</p>
<p>◆授業改善の3つの視点における重点目標</p> <p>視点①：授業のねらいを明確にし、興味・関心の持てる課題の設定を工夫する。</p> <p>視点②：資料や課題を明確に分析し、まとめの資料作成や社会的な言葉を使った表現ができるようにする。</p> <p>視点③：課題を明確にし、グループでの活動や話し合い・発表の場面でお互いに学び合いができるよ場づくりをする。</p>
<p>◆重点目標達成への具体的な方策</p> <p>視点①</p> <ul style="list-style-type: none">・パソコン（インターネット）などを活用し、適切な資料の収集や選択ができるようにする。・本時の課題の明確化と目標を授業の初めに提示する。・授業の初めに前時の復習を行い、本時へのつながりをもたせる。 <p>視点②</p> <ul style="list-style-type: none">・生徒へ調べたことや分かったこと、そのまとめについての発表の統一的な内容を提示し、誰にでも分かりやすい表現をできるような方策を設定する。・自分の意見や考え方をまとめたり、効果的な振り返りができるワークシートの工夫を行う。 <p>視点③</p> <ul style="list-style-type: none">・調べ学習や討論会を積極的に設定し、その中でわからないことを調べ方やまとめ方、発表方法などについて教え合ったり、意見を述べたりする場面の設定と適切な言葉がけを行う。・個人、グループ、全体の場面づくりを適切に行う。・一時間の授業の中で、達成感を感じられるような振り返りを行う。
<p>◎教科において考えられる基盤となる言語活動の場</p> <ul style="list-style-type: none">・学習活動の中で考えたことや分かったこと、感じたことなどを言葉や図、グラフなどを用いて表現する。・発表内容などについて、質問や意見などを交換できるような活動場面を設定する。・調べ学習や討論会の中で、自己の意見や他の意見について議論を深め、考えを発展させる。
<p>◆重点目標の評価</p> <p>視点①</p> <ul style="list-style-type: none">・意欲的にワークシートに取り組んだり、ワークシートの内容に基づき、他に向けて自分の考えを意欲的に伝えようとしている。 <p>視点②</p> <ul style="list-style-type: none">・積極的に調べ、考え、人に伝わりやすいように表現しようとしている。 <p>視点③</p> <ul style="list-style-type: none">・グループでの話し合いで自分の意見、考えを積極的に言おうとしている。

視点① 基礎的・基本的な知識・技能の定着と個に応じたきめ細やかな指導法の工夫

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

2) 社会科における授業づくりの重点

社会科はともすれば「暗記する教科」だと思われやすい教科である。当然、基礎的な用語や語句は身に付けさせていかなければならないが、それをふまえて、どのように課題を解決するための思考力・判断力や表現力の向上を図っていくかが重要になってくる。

今回の研究では、地理的・歴史的分野で学び合い活動の実践を行うことにした。生徒が共に一つの課題について解決へのポイントを教え合ったり、意見を出し合ったりする学び合いの機会を持つことで、言語活動の充実や思考力・判断力・表現力を育成していくことができると考えられる。この中では、身につけさせたい力を見据えた課題設定の工夫や教師の手立てをしっかりと考えることが重要である。その上で、一つの課題について学ぶことの意義をしっかりと生徒に伝え、生徒もそのことを理解した上で授業に臨み、一時間の授業の中で生徒が成就感を持って終わることが大切だと考えた。

このことをふまえ、次の点に留意し、授業づくりの目標とした。

- ① 授業の初めに生徒が学習する内容・課題や目標などの道筋を把握できるようにする。
- ② 個人で思考したことを班で話し合い、まとめたものをクラス全員に向けて発表することを取り入れることで、自分との違いや新しい発見をする喜びを持たせる授業構成をとった。このことにより、学び合い活動の充実を図り、考える力や表現力の向上を図る。
- ③ 課題の意味を理解しやすくするためや振り返りのためのワークシートを準備する。
- ④ 授業の最後には、一時間の授業の振り返りを必ず行い、こちらの意図する力が生徒に身についたか、生徒が満足できた一時間であったかを確認して終了する。

3) 社会科における授業づくりの実践

作業的な活動における学び合い

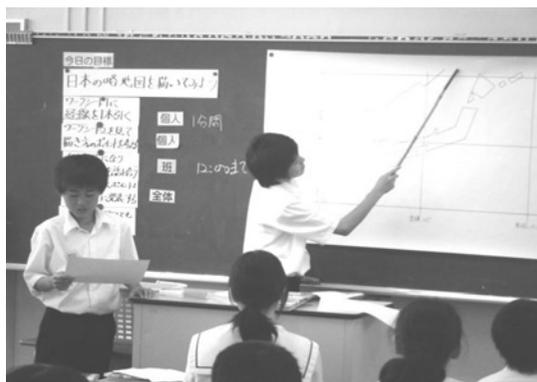
作業的な活動を取り入れる際に注意しなければならない点として、その活動の意義（これができることにより、どんな価値があるのか）を明確に示すことがある。そのために、シラバスの効果的な活用によってこの単元や教材でどのような力をつけるのかや何ができるようになるかを説明し、見通しを最初に提示するようにした。また、毎時間の授業でも課題の内容や目標を明確に示すようにした。

また、身につけさせたい能力として、課題を解決するための「ポイントに気づく力」、それで実際に「課題を解決する力」、相手に「伝えられるようになる力」や「学び合える力」を意識して実践を行った。特に「伝えられる力」は、言語活動の基本となるものである。少しずつではあるが、生徒の中に定着しつつあると思われる。

さらに、互いに評価し合うことで生徒の意欲化や授業の振り返りを行なうことができたが、今の方法より更によいものを研究していく必要がある。



学び合いの場



発表風景

第1学年A組 社会科学学習指導案

日 時：平成22年7月13日（火）第4限

場 所：1年A組教室

指導者：木田 靖之

1 単元名 日本のがたとさまざまな地域

2 単元の目標

- ・日本の国土と都道府県についてさまざまな点から関心を持ち、意欲的に調べたり考えをまとめ、発表しようとする。
(社会的な事象への関心・意欲・態度)
- ・さまざまな観点から日本の国土や都道府県をながめ、多くの地域区分の違いや略地図の書き方について他の意見も聞きながら考えることができる。
(社会的な思考・判断)
- ・資料集やインターネットなどから適切な資料を選択し、グラフや図表にまとめ、発表することができる。
(資料活用の技能・表現)
- ・日本の領域の範囲、北方領土問題、8地方区分、都道府県名や都道府県庁所在地名などについて理解し、その知識を身につけている。
(社会的な事象についての知識・理解)

3 指導にあたって

(1) 教材観

社会科の学習では、基礎・基本的な事項をしっかりと身につけた上で発展的な内容に取り組んでいく事が普通である。その過程の中で社会科に苦手意識を持つ生徒も多いのが実情である。しかし、白地図作業やグラフづくり・調べ学習については、他の生徒と教え合いながら意欲的に取り組む生徒が多い。

その点を意識し、より意欲的に学ぶために簡略化した日本地図を自分の力で描くにはどうすればよいかを経線・緯線、大陸との位置関係から発見し、自分の意見を元に、他にしっかりした言葉で伝える中で他の考えも参考にし、取り組んでいけると考えた。

(2) 生徒観

男子・女子とも活発に発言している生徒が多い中で、自分の考えや意見を積極的に他に対して示すことが苦手な者も若干見られる。

この単元では、日本の略地図を描くためにはどのような点に注目したらよいかを生徒自身や生徒同士で考え学び合っていく中で、自分で発見したり考えた事柄を自分なりの言葉で示したりすることで、生徒全員に学びの喜びを持たせたい。

(3) 指導観

以前の授業の中で、世界の略地図の描き方を経線や緯線のとの位置関係について学習を行った。今回は日本の国土の形について、経線や緯線、大陸との位置関係を読み取ることにより思考力・判断力の育成や自分で考えた事柄を、他者との言語活動を通して確認したりすることにより、自分の力で正しく日本の略地図を描けるようになることをねらいとした。これにより、日本の各地域や都市（例えば小松市）の位置を他者に言葉で説明することができる力をつけさせたい。課題に対して考えを高め、他と協力し合い、発表していく学習活動の中で、社会的な思考・判断力を育む一つの手段としたい。

4 単元の指導・評価計画

次	目 標	主な学習活動	①関心・意欲 ・態度	②思考・判断	③資料活用の 技能・表現	④知識・理解
一 (6)	・日本の国土の広がりや外国との位置関係と比較しながら、表現することができる。	・日本の位置を調べよう。			地球儀や世界地図を活用して方位や距離を求め、世界から見た日本の絶対的位置と相対的位置をとらえることができる。	大陸や海洋、近隣の国々と日本との絶対的・相対的位置関係、日本と同緯度、同経度の国々や都市を理解し、他に対して説明できる。
		・日本の広さを調べよう		領域とは何か、日本の領域や排他的経済水域はどうなっているかについて、世界的視野から考え、説明できる。		領域の定義、日本の領域の特色と変化、排他的経済水域と北方領土の現状について理解ができる。
	・多くの項目でいろいろな地域区分があることに気づかせ、地域区分図をつくること ・都道府県名と都道府県庁所在地について正しく判別できるようにする。	・日本をいくつかの地域に分けよう	いろいろな見方で日本が区分できることを知った上で自分でその他の区分調べる ことができる。		いくつかの指標をもとにして、日本のいろいろな地域区分図を描くことができる。	
		・都道府県を確かめてみよう	現在の日本を構成する都道府県の位置と名称に関心を持ち、意欲的に取り組むことができる。			都道府県の位置と名称・都道府県庁所在地名について理解ができています。
		・いろいろな視点から都道府県をながめよう	都道府県の成り立ちや人口の推移について、その歴史的な流れを調べることができる。			
・日本の略地図の描き方について自分や他人の考え方を基に描けるようになる。	・日本の略地図を描いてみよう		経線と緯線、大陸との位置関係に着目して日本の略地図の描き方を考え出し、他者に伝えようとしている。	日本を構成するおもな島々の大まかな形状や位置関係がわかる程度の略地図を描くことができる。		

5 本時の学習（第一次第6時）

(1) 教材名 「日本の略地図をえがいてみよう」

(2) 本時のねらい

- ・経線と緯線、大陸との位置関係に着目して日本の略地図の描き方を発見したり考えたりし、他にわかりやすい言葉で伝えようとしている。 (思考・判断)
- ・日本を構成するおもな島々の大まかな形状や位置関係がわかる程度の略地図を描くことができる。 (技能・表現)

(3) 授業改善のための3つの視点

視点② 言語活動の充実と思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・生徒へ調べたことや分かったこと、そのまとめ方についての発表の統一的な内容を提示し、誰にでもわかりやすい表現でできるような方策をとる。

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- ・設定された課題について個人や班で考え合ったり話し合ったりする場を積極的に持ち、その中で分からないことの調べ方やまとめ方、発表方法等について教え合ったり、意見を言ったりする場面の設定と言葉がけをする。

(4) 準備・資料等 ワークシート1・2

(5) 本時の展開

時	学習活動および形態	<ul style="list-style-type: none"> ・：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点 	◆：観点【方法】
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・以前、取り組んだ世界の略地図の描き方についてポイントを確認する。 全体 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれ経線と緯線との関わりから、何か所かのポイントを押さえれば描く事ができるのを思い出させる。 	
35分	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を提示する。 全体 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>本時の課題：経線・緯線や大陸との位置関係に着目しながら日本の略地図を描けるようにしよう</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート1を配布して白地図に経線を一本引くとすれば、何度の経線がよいかを考える。 個人 ・ワークシート2で描き方のポイントを考えてみる。 個人 ・机といすを移動させ、4人1班で自由に話し合いの活動をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の授業の方法や、めあてを確認する。 ・個別で考えさせた後、他者と自由に確認する。 ・個別でポイントを考え、ワークシートに記入する。 ・班員全員でそれぞれのワークシートを確認し、自分が気がつかなかったところやよいと思ったポイントをワークシ 	<ul style="list-style-type: none"> ◆思考・判断 経線と緯線、大陸との位置関係に着目して日本の略地図の描き方を考え出

	<p>・描き方を発表する。</p> <p>・描く練習をする。</p>	<p>【班】</p> <p>ート2に記入する。</p> <p>◇グループ全員でお互いの考えたことを言葉で確認する。</p> <p>【視点3】</p> <p>・班で「一押し」意見の発表者と、補助生徒を決めておく。</p> <p>・聞く側は、自分のグループに無い考えがあれば「なるほどサイン」を出して伝える。</p> <p>◇前に出て、黒板の図を使いわかりやすい言葉で発表する。</p> <p>【視点2】</p> <p>・わかったポイントを見ながらしてみる。</p> <p>・他の人に見せて意見を聞く</p> <p>・見なくてもできるようにする。</p> <p>・時間一杯、何度でも練習する。</p>	<p>し、他者に伝えようとしている。</p> <p>【行動観察・ワークシート】</p> <p>◆技能・表現</p> <p>日本を構成するおもな島々の大まかな形状や位置関係がわかる程度の略地図を描くことができる。</p> <p>【行動観察・略地図】</p>
10分	<p>・本時の振り返り</p> <p>・次時の予告</p>	<p>・今日の授業の確認のコメントと生徒の振り返りを行う。</p>	

4) 社会科の成果と課題

成果

- ・作図作業の中で、他の生徒やグループに向けて言語活動を生かした学び合いの場を持つことができ、自分の考えを学級全体に向けて発表する事ができた。
- ・学び合いの中で、生徒一人一人が課題に対して積極的に取り組んでいく姿勢が強まった。一斉授業では、本当に授業の内容をしっかり聞いているかどうかはわからなかったが、普段は発言の少ない生徒も作業に積極的に取り組み、自分の考えを班の人に説明している姿を見ることができた。また、班での発表もわかりやすい言葉で、他に説明することができた。
- ・授業の初めに今日の学習内容や目標をはっきりさせたり、最後に振り返りを行うことで、その一時間で何を学んだかやどんな力が付いたのかを生徒が認識することができた。

課題

- ・言語活動の場を生かした学び合いの場をいろいろな場面に応用していく必要がある。例えば、都道府県や世界の国の調査などでも調査の進み方の段階に応じて、それぞれに調べた内容について言語活動の充実を図る仕掛け作りを改善していく必要がある。
- ・学び合いの充実のために大切な事は、基礎・基本の充実であり、定着である。もう一度生徒の定着度の弱い部分を確認し、補充していくことが大切である。
- ・授業の進め方について、個人・集団の学びの場面設定や話し合い・発表の手順やルールなどについてももう一度検証を行い、より充実した学び合いができるように考えていかなければならない。

(4) 数学科の取り組み

1) 数学科授業改善プラン

<p>◆目指す授業の姿 意欲的に課題に取り組み、生徒達が多様かつ効率的な解決法を模索する授業</p>
<p>◆授業改善の3つの視点における重点目標 視点①：実生活に即した興味をひく題材の工夫をする。 視点②：解決に向けて話し合える課題の設定と、生徒が自ら活動できる的確な指示をする。 視点③：一人とグループを使い分けた学習の場の設定をする。</p>
<p>◆重点目標達成への具体的な方策 視点① ・レディネステスト等で生徒の学習程度や意欲の度合いを知り、身近で魅力的で解けそうな感覚の持てる学習課題を設定する。 視点② ・授業のねらいに迫るための身近で解決意欲のわいてくる課題を設定し、学び合いの場面を設けることにより生徒相互の学びの深まりを図る。 視点③ ・課題を一人でじっくり考える場面と、グループで相談し考えをまとめる場面を設定する。</p>
<p>◎教科において考えられる基盤となる言語活動の場 ○個での言語活動……意欲的に課題に取り組み、自分なりの答えを記す。 ○他者との言語活動……数式を用いて事象を説明する課題や、式・表・グラフなどの相互の関連を利用して解決する課題において、自分の考えや解き方を他者が理解できるように説明する。多様な解決法が存在する課題において、他者の解法を聞いたり、自分の解法を説明したりして交流する。</p>
<p>◆重点目標の評価 視点① ・意欲的に課題に取り組み、ワークシートに書き込んだり、人に伝えることを考えながら書きこ込んだりする。 視点② ・既習事項を活用して課題解決に結びつけようとしたり、グループでの相互説明活動において、他者に自分の考えを分かりやすく説明しようとしたりする。 視点③ ・学習活動を経て目標達成ができた度合いや、学び合いで役割を果たせたかを、授業の最後で振り返ろうとしている。</p>

視点① 興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

2) 数学科における授業づくりの重点

教育課程実施状況調査や国際的な学力調査によると、事柄や場면을数学的に解釈すること、数学的な見方や考え方を生かして問題を解釈すること、自分の考えを数学的に表現することなどに課題がみられた。

これらは、近年の日本の数学教育における大きな課題として、改善しきれないで存在しているものである。本校の数学科では、それらを改善していく第一歩として、生徒たちが数学を主体的に学ぶ意欲を高め、積極的に学習活動を実践できるようにすることが大切であると考えた。

その手だてとして、生徒たちがグループ内で、お互いに自分の意見を言い合ったり、教え合ったりする場面を増やしていくことにした。そのことが、「視点③」の学び合いのできる学習の場づくりになり、さらに自分の意見を他の人に説明するときには、数や図、式を使って分かりやすく、しかも内容を整理して相手に伝える必要があるので、「視点②」の言語活動の充実にもつながっていくと考えた。意見交換や教え合いの場面については、1対1の場面を設定したり、グループをつくり相談させたりと内容に応じて工夫した。また、グループも1種類にはこだわらず、内容によっては1時間の授業内に2種類のグループを併用することも考えた。



1年生の授業で教え合っている様子

各単元に入る前には、「レディネステスト」で生徒の学習レベルや意欲の度合いを知り、魅力的で取り組みやすそうな課題を設定した。また各単元の導入時には、「シラバス」を使い、学習内容を知らせるときに、興味関心を持ってそうな内容を前面に出し、「視点①」の意欲化の増進につなげた。

3) 数学科における授業づくりの実践

【例1】1時間の授業内に2種類のグループを活用する

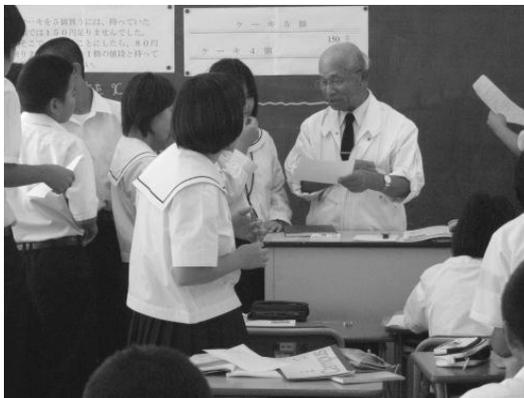
生徒一人ひとりが確実にグループ内で意見を発表することにより、言語活動の充実を図ろうとした。例えば3人グループをつくり、3人それぞれが違う種類の内容を分担し、それを責任を持ってグループ内の他の2人に説明し合う場面を設定しようとした。しかし、理解が伴わないと発表が出来ないという数学の特殊性を考えると、まず全員が内容を理解できるようになる必要があった。そこで、2段階のステップを踏んで説明できるようにした。まず第1段階では、同じ種類でグループを作り、話し合い活動をさせた。そうすれば理解が伴っていなかった生徒も、理解している生徒から習うことにより理解が伴うようになる。それから第2段階として、3種類の違った生徒でグループを組めば、全員が意見を発表することが出来るようになると考えた。最初は、教えてもらったことの受け売りの説明しかできない生徒も多かったが、徐々に自分の言葉で説明できる生徒が増えてきた。



第1段階での話し合い活動の様子

【例2】問題演習時における教え合い

計算が絡んだ教え合いの活動では、グループ活動より1対1の活動の方が有効であると考えた。そして、生徒たちが教え合うときには、より意欲的に学習活動を実施出来るために、ワークシートの最後に「教えてもらってありがとうのサイン」の欄を設けた。この欄を設けることにより、教える人はサインを沢山集めたいという気持ちからより積極的に教えようとし、教えてもらう人も教える人の方から寄ってきてくれるので、気軽に頼める学習のムードが生まれた。また活動時には、教師は机間指導を実施し、生徒がただ単に解き方だけを説明するのではなく、考え方の説明を重視するように指導した。



「方程式の利用」における声かけの様子

1年生では、「正の数・負の数」の簡単な計算活動ではじめたが、2学期になる頃には、「方程式の利用」のかなり難しい文章題でも、積極的に教え合い、意欲的に課題に取り組む姿が見られた。

【例3】ふり返りカードの活用

授業の内容を改めてふり返ることは、数学的な知識や技能といった内容的な面や、数学的な見方や考え方を生かして、どのように考え、どんな方法で課題の解決に至ったかといった方法的な面を、さらに豊かにしていくことになると考え、ふり返りカードをなどを使った「ふり返り」を実践した。

ふり返りカードの例 - 2年連立方程式の利用 -

	月 日	内 容	自己評価	反 省
1	月 日	<ul style="list-style-type: none"> 連立方程式を、自分から進んでつくって問題を解こうとしたか。 今日の文章題で連立方程式をつくれたか。 		
2	月 日	<ul style="list-style-type: none"> 今日の文章題で連立方程式をつくれたか。 つくった連立方程式を解けたか。 		
3	月 日	<ul style="list-style-type: none"> 今日の文章題で連立方程式をつくれたか。 距離・速さ・時間の関係をうまく式に表せたか。 		
4	月 日	<ul style="list-style-type: none"> 今日の文章題で連立方程式をつくれたか。 割合に関する問題で関係をうまく式に表せたか。 		

※自己評価は、◎・○・△・×で記入する。

第1学年A組 数学科学習指導案

日 時：平成21年9月17日（木）第4限
場 所：1年A組教室
指導者：越田 莊司（T1）、中西 一夫（T2）

1 単元名 方程式

2 単元の見どころ

- ・方程式やその解法に関心を持ち、等式の性質や移項を用いて解くことを考えたり、方程式を用いて具体的な問題を解決しようとする。
(数学科への関心・意欲・態度)
- ・等式の性質を利用して方程式の解き方を見いだしたり、問題の中の数量関係をとらえ方程式に表すことができる。
(数学的な見方や考え方)
- ・等式の性質を利用して方程式を解いたり、方程式を活用して具体的な問題解決ができる。
(数学的な表現・処理)
- ・方程式とその解の意味が理解でき、等式の性質の考えによる解法がわかる。また、文章題では解の吟味が必要であることを知る。
(数量、図形などについての知識・理解)

3 指導にあたって

(1) 教材観

小学校では、□、○を用いて数量の関係を式に表したり、それにあてはまる値を調べたりしている。しかしそこでは、逆算によって求めているので、等式という意識は弱い。この単元では、等式の性質を用いた解法から、移項という見方に発展させることにより、方程式が一定の手順によって解けるということのよさを感じさせたい。また、文章題もそのなかの数量の間の関係を方程式におきかえれば、それを解くことによって解決できるということのよさを感得させて、方程式を活用していく態度を育てたい。

(2) 生徒観

授業に真剣に取り組む、活発な意見を子どもらしくはきはきと発言する生徒が多い。しかし、負の数や文字式を十分に使いこなせていないため、数学への苦手意識が増加しはじめている生徒も出始めている。また、理解したことをすぐに忘れてしまう生徒も多いので、既習事項を機会を捉えて繰り返し学習していきたい。

(3) 指導観

方程式のよさを感得するのは、文章題で題意にあった方程式をつくり、それを解き、答が求められたときである。方程式は、文章中の未知の量を x とおき、数量の間の関係をそのまま式に表せばよいので、小学校で経験してきた解き方よりも考えやすいことに気づかせたり、自分が理解できたことをお互いに教え合うことにより喜びを感じたりすることで、積極的に方程式を活用していこうとする態度を育てていきたい。

4 単元の指導・評価計画（総時数6時間）

次	目標	主な学習活動	①関心・意欲・態度	②見方や考え方	③表現・処理	④知識・理解
1 次 方 程 式 の 利 用	・方程式を利用して問題を解決することができるようにする。	・数量の間の関係を方程式で表し、文章題を解くときの手順を理解する。	・問題解決に、方程式を活用しようとする。			・方程式を使って文章題を解くときの手順を理解している。
	・比の意味を理解し、比を簡単にしたり、比例式の性質を理解し比例式が解けるようにする。	・方程式を使って簡単な文章題を解く。			・簡単な文章題について、方程式をつくって答えを求めることができる。	
		・方程式を利用して身近な問題を解く。		・問題解決のために方程式をつくることができる。		
		・方程式の解が、問題にあっているかどうか調べる。		・方程式を解いて求めた解が、問題にあっているかどうかを調べることができる。		
		・比を簡単な自然数の比に直す。 ・比の値の意味と比の値を求める。	・大きな整数や分数、小数で表された比を、簡単な自然数の比に直す方法を考えようとする。		・比を簡単な自然数の比に直したり、比の値を求めたりすることができる。	・比の値の意味やその求め方を理解している。 ・比例式の性質を利用して値を求める方法を理解している。
		・比例式の性質を利用して方程式を作り、問題の答えを求める。	・問題解決に比例式の性質を活用しようとする。	・比が与えられた身近な問題を、いろいろな考え方で解くことができる。	・簡単な文章題について、比例式をつくって答えを求めることができる。	

5 本時の授業（第二次第3時）

(1) 教材名 「方程式の利用」

(2) 本時のねらい

- ・問題解決のために方程式をつくることができる。 (見方や考え方)

(3) 授業改善のための3つの視点

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- ・授業のねらいに迫るための、身近で解決意欲のわいてくる課題を設定し、教え合いの場面を設け、主体的に活動させることにより生徒相互の学びの深まりを図る。

(4) 準備

ワークシート

(5) 本時の展開

配時	学習活動および形態	・：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点		◆：観点【方法】
		T 1	T 2	
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・課題となる問題を読み 問題内容を理解する。 全体 	<ul style="list-style-type: none"> ・図を描いて確認する。 		
	<p>(問題) 折り紙を何人かの子どもに分けるのに、1人に4枚ずつ分けると9枚足りません。また、1人に3枚ずつ分けると15枚余ります。子ども的人数と折り紙の枚数を求めなさい。</p>			
40分	<ul style="list-style-type: none"> ・(問題)について、子ども的人数をx人とし、個人で考察する。 個人 	<ul style="list-style-type: none"> ・自力解決できた生徒の解答が正解かどうかをチェックする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自力解決できるよう声かけをして支援する。 	
	<p>本時の課題：みんなが、方程式をつくりその答を求められるようになろう。</p>			
	<ul style="list-style-type: none"> ・自力解決できた生徒がそうでない生徒を教える。 ペア ・(問題)の解答を確認する。 全体 ・類題を解く。 個人 ・解答を確認する。 全体 	<ul style="list-style-type: none"> ◇自力解決できた生徒が他の生徒に説明し、みんなが理解できるようになる。(理解できた生徒は教えてくれた生徒のワークシートにサインする。) 視点3 ・ほぼ全員が出来ているので、簡単に確認する。 ・自力解決できた生徒には、新たな問題を提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自力解決できるよう声かけをして支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆見方や考え方 問題解決のために方程式をつくることのできる。 【行動観察・ワークシート】
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・ふり返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな問題で方程式が活用できることを確認する。 		

1 次方程式の利用 (3)

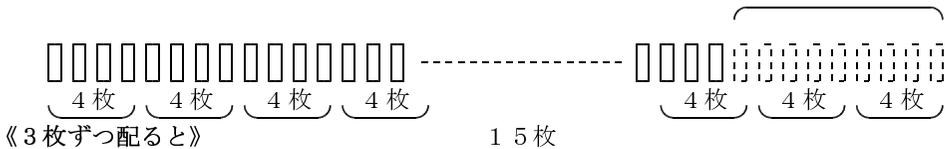
1年 組 番 氏名 _____

みんなが、方程式をつくりその答を求められるようになろう。

(課題) 折り紙を何人かの子どもに分けるのに、1人に4枚ずつ分けると9枚たりません。また、1人に3枚ずつ分けると15枚余ります。子どもの人数と折り紙の枚数を求めなさい。

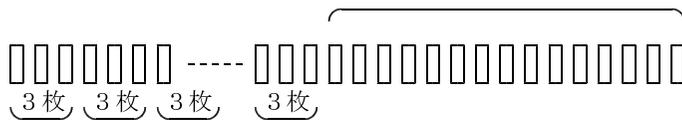
《4枚ずつ配ると》

9枚



《3枚ずつ配ると》

15枚



【子どもの人数を x 人として方程式を作り答を出してみよう】

上の問題が理解できたか	
できた ()	できない ()

ありがとうサイン



問題の解答を確認している様子

第2学年B組 数学科学習指導案

日 時：平成22年2月23日(火)第5限
指導者：田原 清悟
場 所：2年B組教室

1 単元名 確率

2 単元の目標

- ・ 事象の起こる割合に関心を持ち、観察や実験を通してその割合を数で表そうとしたり、その結果を用いて事象について調べたりできる。
(数学への関心・意欲・態度)
- ・ 多数回の試行を行って事象の起こりうる程度を割合で表すことに着目して考察したり、「同様に確からしい」ことを用いて考察したりできるようにする。また、起こりうる場合の数を正確かつ能率的に数え上げる方法を見だし活用できる。
(数学的な見方や考え方)
- ・ 樹形図や2次元の表を書くことによって、起こりうるすべての場合を求めることができる。また、簡単な事象の確率を求めたり、その求め方を説明したりできる。
(数学的な表現・処理)
- ・ 確率、同様に確からしい、樹形図や2次元の表の意味や利用の仕方を理解させ、簡単な場合について確率を求める方法を理解させる。
(数量、図形などについての知識・理解)

3 指導に当たって

(1) 教材観

不確定事象の起こる程度を確率という値で表現する。確率は自然現象や社会現象を究明したり経済活動や実生活へ活用したりと豊かに生きていく上で必要なものである。中学数学では、同様に確からしい事象を用いて計算によって起こりやすさを表す数学的確率と、多数回の試行に基づき、ある事象の起こる割合を考える統計的確率の2種類を学ぶ。また、確率が偶然に左右され必ず起きるかどうかわからないことであること、事象の起こりやすさを割合で表現できること、起こりうる事象を数えることで確率を計算で求めること、等も学習していく。確率と聞くと天気予報やくじや賭けばかりイメージしがちだが、身近なところにある不確定事象を単なる偶然と見なさず、確率的な見方や考え方で捉えることによって、効率的に活用できる姿勢を養うことができる。

(2) 生徒観

学習することに興味を持っている生徒が多く、授業は静かにまじめに受けることができる。しかし数学に関して相当な苦手意識を持っている生徒も数名おり、文字の入った四則計算に手間取ることもある。今年度は計算問題の反復と応用問題に力を入れ、なるべくたくさんの計算問題と活用力向上問題に取り組ませてきた。応用問題に取り組む際は、教え合いができるようにグループで活動させることが多いが、4人グループ内では自分の意見を持ち、課題について議論したり、教え合いをしたりできるようになった。今月初めにグループで議論しやすいように教室の座席を決めた。この環境を利用して学び合いの学習ができることを望んでいる。

(3) 指導観

授業では起こりうる事象を数えて数学的確率を求めたり、多数回の実験を行って統計的確率を求めたりして確率への興味を膨らませる。数学への興味を持っている生徒はもちろん、苦手意識を持っている生徒も、不確定な事象の起こりやすさをはっきりとした数値で表現できる気持ち良

さと、多数回の試行である割合に近づく不思議さを体験させ、数学への関心を更に高めさせたい。また、確率の考えは実生活への活用が比較的容易なところである。机上の理論だけでなく普段の身の回りの現象と数学を結びつけ、その有用性についても説いていきたい。

今年度は学び合い学習を積極的に進めている。グループを作り個々が分担する役割を遂行しながら実験をして統計的確率を求めたり、自分達のグループの実験で得た考察を他の人に説明させる機会を設けたりして、生徒自身で学びを深められるような授業づくりをしていきたい。

4 指導・評価計画（総時数8時間）

次	目標	主な学習活動	① 関心意欲態度	② 数学的な考え方	③ 数学的な表現処理	④ 数学的な知識理解
一 (8)	相対度数の考え方を深める。	割合を求める課題と打率から相対度数の考え方を導く課題を行う。	意欲的に事象の割合や相対度数を考えられる。			
	多数回の試行で統計的確率を求める。	実験でさいころの1の目が出る割合がある値に近づくことを確かめる。			さいころの1の目が出る確率を求められる。	
	統計的確率を考察する。	コインと画びょうを投げる実験を行い、場合の数と統計的確率の関係を考える。		2通りの出方がある事象の一方が出る確率が1/2とならないことを考察できる。		
	数学的確率の計算をする。	トランプでハートのカードをひく確率を求める。				数学的確率を計算で求める方法を理解する。
	樹形図を使ってすべての場合を正確に書き表す。	硬貨を2枚投げて一番出やすい組み合わせを見つける実験を行い、そうなる理由を樹形図を用いて考える。				樹形図で場合の数をすべて表す方法を理解する。
	いろいろな考え方ですべての場合の数を数える。	2つのさいころの目の数の和が5となる確率を求める 2次元の表を用いてすべての場合の数を求める。	意欲的に2次元の表を使って全ての場合の数を書き表そうとする。			
	樹形図や2次元の表を利用して確率	特殊な模様が描かれている2つのさいころの1番出や			2次元の表を使って場合の	

を求める。	すい目の組を考える。			数を整理し確率を求めることができる。
樹形図を使って事象を順序よく整理することの大切さを知る。	くじ引きの仕組みを樹形図を利用して探り、その確率を求める。		くじ引きの仕組みを樹形図を利用して探り、事象を順序よく整理することの大切さを知る。	

5 本時の学習（第一次第3時）

(1) 小単元名 「確率」

(2) 本時のねらい

2通りの出方がある事象の一方が出る確率が1/2とならない場合があることを考察する。

(数学的な考え方)

(3) 授業改善のための3つの視点

視点① 興味関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

- ・日常的に考えそうな事象を提示し、確率を予想させる。実験により思う通りだったかを確認し、その理由を考察させる。
- ・実験を通して世の中を支配する目に見えない確率の法則を実感させる。

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・実験によって得られた結果をペアに報告し合い、課題の解決に向けて話し合わせる。

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- ・グループ内で役割分担を行い、協力しながら実験できる場を設定する。

(4) 準備・資料等

ワークシート、コイン、画びょう、ストップウォッチ、ミニホワイトボード、電卓

(5) 本時の展開

配時	学習活動および形態	・：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点	◆：観点【方法】
3	・前時の統計的確率の求め方を復習する。 全体	・統計的確率は多数回の試行により求められることを確認する。	
32	・本時の課題をつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">本時の課題：出方が2通りの場合、確率はいつも1/2になるか実験で確かめる</div> 実験課題 コインの表が出る確率 画びょうの針が上を向く確率 ・確率が1/2になるか予想する。 個人 ・学習の見通しとグループ学習の場所を確認する。 ペア ・確率の実験を行う。 グループ	◇それぞれの事象について、予想させる。 視点① ◇グループ内のメンバーで役割を分担させ、個人の責任を明確にする。 視点③	

10	<ul style="list-style-type: none"> 各グループはコインか画びょうを100個投げ数える。3回行う。記録係は黒板にデータを書く。 コイン、画びょう各1200回分のデータを黒板上に集める。 (100個×3回×4グループ=1200) グループ内で相談しながら、数字のデータをグラフ化してまとめ、ワークシートに記入する。 ペアに戻り考察した課題で交流する。 ペア 2人の考察を合わせて分かったことをまとめる。 ミニホワイトボードに分かったことを書き込み、黒板に貼る。 	<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr><td></td><td>役割分担</td></tr> <tr><td>①</td><td>リーダー</td></tr> <tr><td>②</td><td>道具</td></tr> <tr><td>③</td><td>記録</td></tr> <tr><td>④</td><td>タイムキーパー</td></tr> </table> <p>◇事象の起こる割合(統計的確率)がある値になっていくことに気づかせる。 視点①</p> <p>◇5分以内で各実験結果と考察について発表し合い、ワークシートにまとめるよう指示する。 視点②</p> <p>・深い考察ができた数ペアにミニホワイトボードに分かったことを書き込ませ、発表させる。</p>		役割分担	①	リーダー	②	道具	③	記録	④	タイムキーパー	<p>◆数学的な考え方 2通りの事象でも場合によって確率が1/2にならないことに気づくことができる。 【ワークシート】</p>
	役割分担												
①	リーダー												
②	道具												
③	記録												
④	タイムキーパー												
5	<ul style="list-style-type: none"> まとめをする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>出方が2通りしかない事象でも、一方の起こる確率が1/2になるとは限らない。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ペアの説明を評価し、良かった点を交流し合う。 本時の学習を振り返る。 												

4) 数学科の成果と課題

成果

- ・単元の導入時には、「シラバス」を使って単元のねらいを明確にし、興味が増しそうな導入の題材を選定したため、生徒たちの単元に対する「事前知識」「学習意欲」を増大させることができた。
- ・解決の方法が多い課題をより多く取り入れるようし、自分や他の人の意見交流がしやすい環境を作った。その際、生徒が考えた解決方法や表現をできるだけ多く提示することで、多様な解決方法を認識させ、より深い論理的思考へとつなげることができた。
- ・授業の最後に必ず「ふり返し」の時間を設けることにより、本時の学習内容の確認と次時へのつながり（意欲も含めて）がきちんとできるようになった。
- ・グループにおける話し合い活動を実施するときは、必ず各自の役割をはっきりさせた。例えば4人グループの時は、リーダー（司会）・道具係・記録係・タイムキーパー係など一人一役になるようにした。そして、係ごとに集めて活動内容と活動ポイントの確認を行い、各係に自覚と責任感を持たせた。その結果、活動中は生徒たちは自分の役割に自覚を持ち、主体的に活動出来るようになっていった。その際、教師はあまりアドバイスを与える必要もなく、見ているだけで十分になるようになった。
- ・「例2」で示したように、教え合いにより生徒相互の学びの深まりを図るために、課題はできるだけ身近で解決意欲のわきやすいものを選んだ。また、「ありがとうサイン」の欄をワークシートに設けることにより、教える側の積極性と、教えられる側が気軽に頼めるムードづくりができた。その結果、生徒たちは教室内を活発に動き回り、積極的な教え合い活動ができた。その際、無秩序な教室内の移動を避けるため、個人でじっくりと考える場面の時間と、教え合いの場面の時間の区別をはっきりさせた。

課題

- ・生徒へのシラバスの提示は単元毎であったので、年6回程度の提示になり、間隔が開きすぎてしまい、生徒たちの記憶に残りにくい状態であった。そのため今後は、「単元毎」ではなく「小単元毎」の実施の方が効果的かもしれない。
- ・ふり返し活動においては、「ふり返しカード」などをさらに工夫することにより、個人のふり返しだけではなく、各人のふり返しをお互いに共有することにより、さらに「学び合い」の活性化につなげていくことも可能かもしれない。
- ・グループ活動においては、1つのグループで同じ内容を考える際は、どうしても学習能力の高い生徒に他の生徒が頼り気味になってしまう傾向がみられるので、この点については今後さらに工夫をしていく必要がある。
- ・教え合いをしている場面では、教師は教えている生徒が、ただ単に「解き方の説明」をしているときは、「考え方の説明」するようにアドバイスして回った。しかし、考え方を説明することにあまり慣れていないため、安易に解き方を説明している生徒が多かった。そのため、今後「自分がどう考えたか」を、うまく伝えられるようにさせていく必要がある。

(5) 理科の取り組み

1) 理科授業改善プラン

◆目指す授業の姿

目的意識をもって観察・実験などを行い、学び合いの中で科学的に探求する力や科学的な見方や考え方を高めていく授業

◆授業改善の3つの視点における重点目標

視点①：課題を明確に示すことや視聴覚的效果によって関心を高めるようにする。また、プリントでの復習や小テストで生徒本人が弱点を見だし、解決意欲を高められるようにする。

視点②：言語活動の設定を計画的に行うとともに、個人が思考する場面と集団で思考する場面を展開することでそれぞれの生徒の思考力・判断力・表現力を高められるよう工夫する。

視点③：発表の手立ての工夫をするなどして、常に班で、教室全体で学び合うのだという雰囲気を作りだし、習慣化するように努める。

◆重点目標達成への具体的な方策

視点① ・前時の復習を導入時に行い、本時へのつながりをスムーズにさせる。

・生徒が課題を正確に把握できるように、ねらいや見通しを示す。

・板書では、項目ごとに箇条書きで表すことや色チョークでの要点の表示をするなどしてメリハリをつける。

・モデルや図、プロジェクターを用いて視聴覚的效果を求める。

・まとめプリントでの振り返りや小テストとワークの連動により、短い範囲での復習と見直しを図れるようにする。

視点② ・言語活動を展開するための補助となるワークシートを作成する。

・予想や課題解決のための方法を考える時間や、結果と考察を発表する時間を確保する。

・生徒に必ず発表があることを確認させるとともに、発表の手立ての多様化と手順の統一を図る。

・個人の予想や考察を班全体で話し合い、再考し、発表するための文章を作成する場面と発表の場面の設定をする。

視点③ ・観察や実験における共同作業や協力への言葉がけをするとともに、ルールを明確にし、教室全体で学び合うのだという雰囲気をつくり出す。

・観察や実験における班員による作業分担や仕事分担により、1つの観察や実験に班員同士の手順や操作等を教え合う場面を設ける。

◎教科において考えられる基盤となる言語活動の場

・日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や絵、コンセプトマップなどを用いて表現する。

・身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述し、報告する。

・学習した法則や事象の概念やグラフ、表などの意図をとらえ、それらを考えたり説明したりする。

・文章やグラフ、図・写真・動画などの資料について、これまでの学習などで得た自然事象や動植物についての知識や経験に照らし合わせて、自分なりの考えをまとめる。

・根拠のある仮説を立て、観察・実験を計画することや、実験での結果を整理し、考察し、まとめ、表現する場を設ける。

・グループ内やグループ間などで、自らの考えを表現することで、お互いの考えを伝え合い、論議を深め、自らの考えや集団の考えを発展させる。

◆重点目標の評価

視点① ・まとめプリント、ワークシートなどの課題に意欲的に取り組む。

・課題提示の場面や話し合いの場面で、意欲を持って活動に取り組む。

視点② ・話し合いや発表の場で人に伝わるように、考察や意見を述べようとしている。

視点③ ・協力して班での話し合いや観察・実験に取り組む。

視点① 興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

2) 理科における授業づくりの重点

今回の学習指導要領の改訂で強調されていることがらとして、自然の事物・現象に進んで関わり「目的意識をもって観察、実験を主体的に行うこと」、その結果を「分析して解釈する能力」や導き出したことがらを「表現する能力」の育成に重点を置くこと、また、「科学的な概念を使用して考えたり説明したり」する学習が充実するよう配慮することがあげられている。このことを念頭に本校では以下の3点を生徒に示しながら、目指す授業づくりを進めてきている。

① 見通しを持って臨むこと

単元の内容を知り意欲を高めるために、作成したシラバスや教科書の「ねらい」を用い、単元の学習を進めることでどのような事物・現象について解明し、理解していくのか見通しを持たせる。授業の導入時に課題を明示し、1時間のゴールをつかませる。また「学び合い」の場面向け、活動内容、時間配分、役割分担、発表の手順などを明示する。

② 責任を持って参加すること

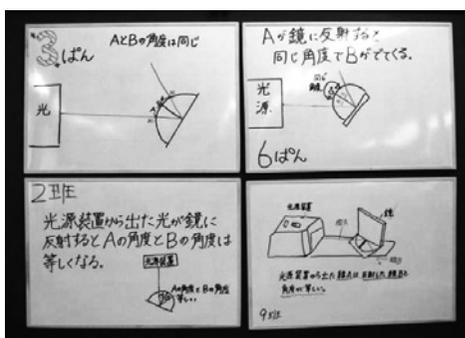
実験・観察の際の器具の準備や操作、結果の記録や考察のための話し合いなど、理科では班で協力して1つのことを行っていく場面が数多くある。本校では理科室の班内の座席によってA～Dの生徒を決めておき、役割を指示しながら進めている。生徒には責任をもって役割に取り組み、班の活動に参加し寄与するよう求めている。

③ 個人の思考を持ちより、集団で考えを深めること

課題に対して予想を立てたり、課題を解決するための方策を考えたり、実験・観察を通して得られた結果について考察したりする場面では、すぐに班内で話し合いをするのではなく、個人の考えを出せるための時間を確保し、その後、班内で互いの考えを伝え合い論議することで思考を深めるようにした。また、その結果を班全体の考えとしてホワイトボード等に記載して他へ発信していくようにもした。22年度には更に、班の考えを他の班に伝え、論議し、その結果を持ち帰って再び班の考えを検証するようにして思考を深めるようにもした。



班で相談



黒板で発表

3) 理科における授業づくりの実践

① 見通しを持って臨むこと

導入は、「今日の目標」を黒板に明示し、生徒が1時間の課題をきちんと把握するとともに、興味関心を持って臨めるよう丁寧に行うようにした。その際の手法の一つとしてデジタルコンテンツを用いて視聴覚的な効果を図ったり（2年：「動物」「人体のしくみ」など）、製作したアニメーションを用いて前時までの内容を確認し、本時の課題を把握させる試みも行った（1年「光の現象」）。また、「個人の観察結果を持ちより班の考えをまとめる（〇分）」、「班から2名が他の班に説明に行く（〇分）」、「持ち帰って班の考えを修正する（〇分）」…のように、授業の流れを明示して進めるようにした（2年「細胞とはどのようなものか」指導案参照）。

② 責任を持って参加すること

1年生「密度の測定」の実験では、教師からの説明を段階的に区切り、各班のA～Dの生徒に説明し、その生徒が班に持ち帰って内容を伝え合うことで実験を進めるようにした。

Aの生徒：メスシリンダーの使用法 Bの生徒：電子天秤の使用法
 Cの生徒：データ処理の仕方 Dの生徒：片付けの仕方
 ＊班でそれぞれの生徒が一人1回、別の物体の密度の測定を行った。

この手法では、自分の分担部分に対して責任を持ち、的確に班全体に説明することが求められる。同時に、聞く側の生徒も正しく理解しようとすることで、教師の全体への説明が進める場合より個の集中力が高められ、班全体で主体的に取り組む姿勢ができる。実際、実験途中で生徒からの質問はほとんどなく、教師が説明し直す場面もほとんどなかったことから、効果があったとかがえる。

③ 個人の思考を持ちより、集団で考えを深めること

3年生「仕事の原理」の発展的な実験では、奇数班と偶数班に分け、それぞれの班で力が4分の1ですむ動滑車の実験、力が5分の1ですむ斜面の実験を行った。実験を進める際はA～Dの生徒の役割分担（実験係・道具係・記録係・リーダー）をし、責任を持って実験に参加させるようにした。各班に1枚の実験結果記入用ワークシート（資料参照）を準備し、仕事の量を計算させるようにした。

「実験の考察」と「班としての結論」を導き出す場面では、実験結果の数値には誤差があることですぐには正しい結論に結びつかない様子の生徒や班も見受けられたが、班内の話し合いが進む中、力が4分の1（5分の1）ですむ場合は距離が4倍（5倍）になっていることをどの班も見いだすことができはじめた。その後、同じ実験を行った班のリーダー同士が確認し合って結論を確かめ合うことができていた。さらに別の実験を行った班とも結論を紹介し合って「仕事の原理」を一般化することに結びついた。教師の全体への確認の後、やや難度の高い発展問題に取り組むことにより、教室全体で学び合っている姿が見られる授業となった。



役割分担して実験

今日の目標【全員が『仕事の原理』をマスターし、応用問題が解けるようになる】

5. 運動とエネルギー 第3章 力学的エネルギー ⑤ 2022年6月3日

3年 B組 5班 [A杉本・B各口・C辻・D高]

滑車 の実験

(奇数班は滑車の実験：偶数班は斜面の実験)

A：実験係 引く力、引く距離の正しい読み取り
 B：道具係 斜面、滑車の正しいセッティング
 C：記録係 班ワークシートに記録
 D：リーダー 全体を把握、司会、まとめ

	①そのまま引き上げる	②道具を使って引き上げる
引く力の大きさ [N]	1.29	0.31
糸を引く距離 [m]	0.1	0.42
仕事の量 [J]	0.129	0.1302

実験の考察

動滑車と定滑車を使うと、動滑車を使わない場合に比べて、物体を持ち上げるために糸を引く力は半ですが、変りません。糸を引く距離は2倍になります。

(発展：道具を使うとなぜ小さな力で済むようになるのだろうか)

班としての結論

滑車を使って引き上げると、物体を持ち上げるために必要な量は

班ごとの実験記入用ワークシート

第1学年C組 理科学習指導案

日 時：平成21年9月17日（木）第3限

場 所：理科室

指導者：東野 和彦

1 単元名 光による不思議な現象 <なぜ虫眼鏡で見える像が変わるのか>

2 単元の目標

- ・光の反射や屈折、また凸レンズによる不思議な現象に興味を持ち、進んで調べようとする。
(関心・意欲・態度)
- ・実験結果をもとに、反射の法則や入射角と屈折角の関係を科学的に考察することができる。
- ・凸レンズによる実像と虚像のできる条件を見いだすことができる。(科学的な思考)
- ・光に関するそれぞれの実験に正しく器具を操作し、測定・記録することができる。
- ・凸レンズを通る光の進み方とできる像を規則性に従って作図できる。(観察・実験の技能・表現)
- ・光の反射や屈折、凸レンズによる像のでき方の規則性を理解し、知識を身につけている。
(自然現象についての知識・理解)

3 指導にあたって

(1) 教材観

光の現象は、規則性を学ぶことによって、改めてその不思議さを感じる教材である。生徒にとっては、鏡に物が映っているという現象や、風呂などで水面から腕が曲がって見える現象などは不思議なことではあるが、身近すぎて当たり前と忘れてしまっていることが多く、その規則性に注目する生徒は少ない。導入時に、写真やビデオ、簡易実験での再確認により、光のいろいろな現象を「なぜ？」と問いかけることで、生徒は、実験には興味をもって取り組むことができ、反射や屈折の規則性を見だし、知識として得ることはできている。しかし、学習した規則性を基に、日常の現象や、器具や機器の中での現象を説明したり、作図することは大変苦手としており、テスト等の設問などでは、全体として理解度の低い単元である。

(2) 生徒観

全体的に落ち着いた状態で授業に臨むことができる生徒集団である。男子を中心に節度をもって活発に発言できており、指名での発言でもスムーズに行うことができる。また、意見発表の場はまだ多くはないものの、班での活動では誰もが協力して取り組もうという姿勢が見られる。

今回の授業では個々の作業（作図）をアドバイスし合うという場面があるが、これは、条件に合わせて正確に書き表すという点でグラフの制作につながっている。また、互いの思考を高め合うという点でも、今後の実験での作業や考察に活かされるはずである。他との学びの協同から、完成させるということと確かな知識を得るという達成感を得られる機会になればと考える。

(3) 指導観

現象に対する用語や規則を単語で表現することはできても、作図で表現したり、それを説明することは容易ではない。また、規則性を作図で表すことは経験が少ない。その達成には、しっかりした理解と作図の慣れが必要となってくる。

そのため、実験で確かめた規則性の一つ一つを丁寧に日常の現象等に当てはめて、イメージとして焼き付けることが必要であると考え。特に、凸レンズの現象は、屈折の応用であることをしっかりと認識させ、現象と条件の関係をイメージとして捉えることが必要である。ゆえに、ねらいを明確して、モデルや図、プロジェクターを用いた視覚的效果によって関心を持たせるとともに、段階を踏んでの丁寧な説明と実験、その後の確認と時間をかけての演習が不可欠と考える。また、本時のような作図から規則性を見いだす学習においては、個々が作成した作図を他と確かめ合い、学び合うことが確かな知識を得るためには効果的であると考えられる。

4 単元の指導・評価計画（総時数11時間）

次	目標	主な学習活動	①自然事象への関心・意欲・態度	②科学的な思考	③観察・実験の技能・表現	④自然事象についての知識・理解
一 (4)	・光が反射するときの反射の法則や、反射によって、鏡で像が見えることや、物体が見えることを理解させる。	・実験によって鏡ではね返る光の入射角と反射角の関係を見いだす。また、鏡に映って見えるしくみと像についてまとめる。	・写真やビデオでの光の進み方や鏡のものの映り方を見て、鏡に当たった光の進み方について進んで調べようとする。	・実験結果をもとに入射角と反射角の関係を科学的に考察し、説明することができる。	・光源装置、鏡や分度器を使って、入射角を変えたときの反射角を測定することができる。	・鏡に光がはね返るとききの規則性を理解し、知識を身につけている。
二 (3)	・光が屈折することを実験を通して見だし、その規則性を理解する。また、全反射が起こる条件を理解させる。	・実験によって2種類の物質を通る光が屈折する事を確認し、入射角と屈折角の関係を見いだす。	・見えなかったコインが水を入れることで見えてきた現象などに興味を持ち、進んで調べようとする。	・実験結果をもとに入射角と屈折角の関係を科学的に考察し、説明することができる。	・光源装置、鏡や分度器を使って、入射角を変えたときの屈折角を測定することができる。また、全反射を見いだすことができる。	・光が空気中からガラス中へ進むときの規則性や、全反射が起こる条件を理解し、知識を身につけている。
三 (4)	・凸レンズがつくる像の大きさや位置が、物体と凸レンズとの距離で決まることを見いださせる。 ・凸レンズで実像と虚像ができるしくみについて理解させる。	・凸レンズで見えるものに興味を持たせ、凸レンズを通った光の道すじを理解する。 ・物体と凸レンズとの距離による像の大きさの違うについて、実験で、その関係を調べる。 ・実験結果を確認し、物体と凸レンズとの距離による像の大きさの違うについてまとめる。	・凸レンズを使ってみると、逆さや、大きく見えたりする現象に興味を持ち、進んで調べようとする。	・実験結果をもとに、実像と虚像ができる条件を見だし、説明することができる。	・凸レンズによってできる像の形や大きさを調べる実験の基本操作ができ、記録できる。	・凸レンズが光の屈折を利用して作られ、凸レンズには焦点があることを理解し、知識を身につけている。 ・凸レンズによる像の大きさの規則性および、実像と虚像の意味を理解し、知識を身につけている。
		・凸レンズを通る光の進み方とそのときできる像の規則性を理解し、それに従って作図する。			・凸レンズを通る光の進み方とそのときできる像について、規則性に従って作図できる。	・凸レンズを通る光の進み方とそのときできる像の規則性を理解し、知識を身につけている。

5 本時の授業（第三次第4時）

(1) 単元名 「光による不思議な現象—なぜ虫眼鏡で見える像が変わるのか」

(2) 本時のねらい

- ・凸レンズを通る光の進み方とそのときできる像について、規則性に従って作図できる。
(技能・表現)
- ・凸レンズを通る光の進み方とそのときできる像の規則性を理解し、知識を身につけている。
(自然現象についての知識・理解)

(3) 授業改善のための3つの視点

視点① 興味関心を高め・参加への意欲化を促すための工夫

- ・導入時に前時の復習を行い、本時へのつながりをスムーズにさせるとともに、生徒に課題が正確に把握できるように、ねらいを明確にする。
- ・モデルや図、プロジェクターを用いて視覚的効果によって関心を持たせる。

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・言語活動に導きやすいワークシートを再考するとともに、予想や課題解決のための手だてを考える時間、考察の時間を確保する。
- ・個人が思考する場面と集団で思考する場を展開する。また、発表の手立ての工夫をするとともに、発表するための文章を作成する場面や発表の場面の設定を行う。
- ・必ず発表があることを確認させるとともに、発表の手だての統一を図る。

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- ・観察や実験における協同作業や協力の言葉かけを常に行うとともに、ルールを明確にし、教室全体で学び合うのだという雰囲気をつくり出し、習慣になるように努める。
- ・個人の予想や考察を班全体で話し合い、再考する場面や時間を設ける。

(4) 準備・資料等

ワークシート、パソコン、プロジェクター

(5) 本時の展開

配時 (分)	学習活動および形態	・：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点	◆：観点 【方法】
10分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習のねらいと見通しを確認する。 ・前時の復習として、「ア：軸に平行に入った光は、屈折した後、焦点を通る」「イ：凸レンズの中心に入った光はそのまま直進する」についてワークシートを用いて確認する。 全体 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習のねらいと見通しを黒板に示す。 ◇前時の学習で、どんなことを確かめたかを質問した後、回収していたワークシートを配布する。 視点1 ◇プロジェクターを用いて、アニメーションで例示する。 視点1 	
30分 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・凸レンズを通る光の進み方についてまとめる。 個人 ・物体のどの部分から光が出て、それらの光はレンズを通して一点に集まることを確認する。 個人 	<ul style="list-style-type: none"> ◇プロジェクターで提示し、アニメーションを利用して説明する。 視点1 ・2本の線での作図で、像の位置と大きさが決められることを説明する。 	

凸レンズによってできる像を、光の進み方の規則性に従って作図できるようになる。

・例題を、教師の指示に従って、ワークシートに作図する。 **個人**

・班員のそれぞれの作図を見て、確認し合う。 **班**

・設問を作図し、必要な事項は記入する。 **個人 班**

・各班の代表が作図について説明する。 **個人**

・補足として、「ウ：焦点を通って入った光は、屈折した後、軸に平行に進む」こと、凸レンズを通して光が一点に集まる場所が、ピントが合う場所であることを確認する。 **個人**

・授業の感想をワークシートに記入する。 **個人**

・次時についての確認をする。

◇例題（焦点の2倍の距離）をプロジェクターで提示、説明する。 **視点1**

◇像の位置と大きさがどうなっているかを説明して、班でそれぞれの図を確認させる。 **視点3**

◇各班に、設問で作図したものを提示し、解説してもらうことも説明する。また、作図で分からないところは相談しながら作図することを促す。 **視点2・3**

・頃合いをみて、虚像の作図について説明する。（ヒントに留める）

・生徒の説明で不足している部分については解説を行う。

・あくまで、補足なので、簡単に触れる程度にする。

・本時の授業で確認したこと、気づいたことなどについてふり返させせる。

◆技能・表現

凸レンズを通る光の進み方とそのときできる像について、規則性に従って作図できる。【ワークシート】

◆知識・理解

凸レンズを通る光の進み方とできる像の規則性を理解し、知識を身につけている。【ワークシート・テスト】



今日の課題の確認



互いの作図を確認

第2学年A組 理科学習指導案

日 時：平成22年7月13日（火）第5限

場 所：理科室

指導者：東野 和彦

- 1 単元名 細胞とはどのようなものか （5単元、1章「細胞と生物の成長」の1節）
※指導要領改訂により、3年生であつかう5単元、1章1節の部分が移動した。3単元「動物のくらしとなかま」、1章「いろいろな動物」の前にあつかう。
- 2 単元の目標（節の目標）
 - ・意欲的に細胞の観察を行い、動植物の細胞の共通点や相違点について見いだそうとする。
(自然事象への関心・意欲・態度)
 - ・いろいろな細胞の特徴をもとに、細胞の基本的なつくりを一般化することができる。
(科学的な思考)
 - ・最適な細胞像を顕微鏡の視野に表し、特徴をとらえたスケッチをすることができる。
(観察・実験の技能・表現)
 - ・植物と動物の細胞のつくりの共通点と相違点について理解する。
 - ・生物の基本単位は細胞であり、単細胞生物と多細胞生物がいることを理解する。
(自然事象についての知識・理解)

3 指導にあたって

(1) 教材観

植物の細胞については、1年生の時に「葉・茎・根のつくり」として顕微鏡で観察し、生物の体のつくりの基本単位が「細胞」であることや、細胞の中に「葉緑体」があることも学んでおり、細胞についてのおおよその概念をもって学習に臨むことができる。

顕微鏡で細胞を観察すること自体、興味あることで、まして自分の身体の細胞を観察することはたいへん希な体験である。多くの生徒がたいへん興味を持って取り組む題材である。また、細胞自体の不思議さや生命の不思議さを感じさせ、生命の不思議さの扉になる単元であり、以降に学習する「感覚器」「消化管」、及び3年時に学習する「生物の成長」にもつながっている。その基礎となる部分であるため、細胞を観察する時間や考察することの時間を十分に設ける必要があり、また、丁寧な指導が必要とされる単元である。

(2) 生徒観

2年生になり、中学校に慣れたことや昨年の27人クラスから40人クラスになり、教壇と生徒のテーブルとに距離が生まれたことなどで緊張感が低下してきており、やや落ち着きに欠ける場面も見られ、積極的な発言も少なくなってきた。一方、観察・実験などの班活動においては誰もが協力して積極的に取り組む姿勢が見られる。しかし、考察をワークシートに書くことが苦手で、班の他の生徒の意見に頼り、考察をあわせる生徒もいる。それらの生徒のためにも、自ら考えて表現する力をつける必要があり、そのための効果的な場の設定や工夫が必要と考えられる。

今回の観察では、植物や動物のそれぞれの細胞の特徴を表現することやその共通点や相違点を1つ2つ書き出すことは容易である。また、自分の意見を班の意見として反映しやすく、発表の際に充実感が得られると考えられる。班内で、そして他の班との意見交換を通じて「班でまとめた考察＝自分の考察」として捉え、同時に、人に意見を述べるという体験を持つことで、今後の観察や実験での言語活動につながればと考える。

(3) 指導観

今回の活動では、生徒一人ひとりの考察を班で意見をまとめ、異なる班と意見交換を行い、自分たちの考えを修正しながら確かなものとし、学び合いの中で一般化につなげていく。このように、自分たちが見つけ出した特徴や差異が言語として一般化されることのほうが、単に教師側から細胞の特徴を説明されたものを学ぶことより、知識として確立されると考える。さらに、このような経験を通して、自ら学ぶことの楽しさを知り、その姿勢がより高められると考える。

また、考えを上手に人に伝えることは難しい。今回の観察では、個人が植物や動物の細胞の特徴などを容易に表現できても、その表現は生徒により千差万別であり、自分にしか理解できない表現もある。小集団でしっかりとしたルールの中で学び合い、意見交換することで、知識の修正だけでなく人に伝える表現も学ぶことができると期待できる。さらに、小集団の中での発表しやすい環境で、自信をもって発表する機会でもあると考える。

4 単元の指導・評価計画（総時数5時間）

次	目標	主な学習活動	①自然事象への関心・意欲・態度	②科学的な思考	③観察・実験の技能・表現	④自然事象についての知識・理解
一 (1)	・生命の基本単位である細胞に興味を持ち、調べようとする。	・写真などをもとに、生命の基本単位は細胞であることを理解する。	・生命の基本単位である細胞に興味を持ち、調べようとする。			・写真などをもとに、生命の基本単位は細胞であることを理解する。
二 (4)	・観察を通して、生物の体は細胞できていることと、植物の細胞と動物の細胞の共通点と相違点を見いだし、理解する。 ・生物には、単細胞生物と多細胞生物があることを理解する。	・植物細胞の観察とスケッチを行って、共通点と相違点を見いだす。	・意欲的に細胞の観察を行い、動植物の細胞の共通点や相違点を見いだそうとする。		・最適な細胞像を顕微鏡の視野に表し、特徴をとらえたスケッチをすることができる。	
		・動物細胞の観察とスケッチを行い、植物細胞と動物細胞の共通点と相違点をまとめる。		・植物と動物の細胞のつくりの共通点と相違点を見いだすことができる。	・最適な細胞像を顕微鏡の視野に表し、特徴をとらえたスケッチをすることができる。	
		・植物細胞と動物細胞の共通点と相違点をまとめ、発表する。		・いろいろな細胞の特徴をもとに、細胞の基本的なつくりを一般化することができる。		・植物と動物の細胞のつくりの共通点と相違点について理解し、知識を身につけている。
		・生物には、単細胞生物と多細胞生物があることを理解する。				・生命の体の基本単位は細胞であり、単細胞生物と多細胞生物がいることを理解し、知識を身につけている。

5 本時の授業（第二次第3時）

(1) 単元名 「細胞とはどのようなものか」

(2) 本時のねらい

- ・いろいろな細胞の特徴をもとに、細胞の基本的なつくりを一般化することができる。
(科学的な思考)
- ・植物と動物の細胞のつくりの共通点と相違点について理解し、知識を身につけている。
(自然事象についての知識・理解)

(3) 授業改善のための3つの視点

視点① 興味関心を高め・参加への意欲化を促すための工夫

- ・導入時に前時の復習を行い、本時へのつながりをスムーズにさせるとともに、生徒に課題が正確に把握できるように、ねらいを明確にする。
- ・モデルや図、プロジェクターを用いて視覚的効果によって関心を持たせる。

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・言語活動に導くため、課題解決のための手だてを考える時間、考察の時間を確保するとともに、個人が思考する場面と集団で思考する場面を展開する。
- ・発表の手立ての工夫および、発表するための文章を作成する場面や発表の場面の設定を行う。

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- ・観察や実験における協同作業や協力の言葉がけを常に行うとともに、ルールを明確にし、教室全体で学び合う雰囲気をつくり出す。
- ・個人の予想や考察を班全体で話し合い、再考する場面や時間を設ける。

(4) 準備・資料等

ワークシート、パソコン、プロジェクター、ホワイトボードセット

(5) 本時の展開

配時	学習活動および形態	・：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点	◆：観点 【方法】
3分	<p>・本時の学習のねらいと見通しを確認する。 全体</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>前時までに植物と動物の細胞を観察、スケッチし、生徒各個人がそれぞれの細胞の共通点や相違点をワークシートに記入している。</p> </div>	<p>◇前時までの植物細胞と動物細胞のスケッチをプロジェクター投影し、前時までの流れを確認し、本時の学習のねらいと見通しを黒板に示す。視点1</p>	
42分	<p>本時の課題：植物の細胞と動物の細胞の共通点や相違点を確認する。</p>		
	<p>・班で、細胞に関する意見を集約し、班全体の意見として発表できるようにホワイトボードに記入する。 班</p>	<p>◇各班に、司会を指名し、スムーズに意見交換や相談ができる雰囲気をつくれるようにする。 視点2・3</p>	<p>◆科学的な思考 いろいろな細胞の特徴をもとに、細胞の基本的なつくりを一般化することができる。</p>

	<p>・各班で、指名した2名が司会・発表者となり、残り2名聞き役になる。司会・発表者が他の班で説明する。 ペア</p> <p>・班に戻り、意見交換で修正点があれば、班の意見を修正する。 班</p> <p>・前とは逆の役回りで、他の班と意見交換を行う。 ペア</p> <p>・班に戻り、意見交換で修正点があれば、班の意見を修正する。ワークシートにも記入する。 班</p> <p>・スクリーンに投影されたいろいろな細胞を見て、そこから植物と動物の細胞について一般的に言えることや新たに気付いたことをワークシートに書き出す。 個人</p> <p>・班で意見をまとめホワイトボードに記入する。 班</p> <p>・各班のホワイトボードを黒板に貼り付ける。</p> <p>・各班のホワイトボードの意見から考えられる教師の解説、説明を聞き、ワークシートに細胞のつくりについてまとめる。 全体</p>	<p>◇移動先や発表時間の設定、質問の時間を設けるなどの意見交換のルールを明確に指示する。 視点2・3</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p><予想される生徒の意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・カナダモの細胞は葉緑体があるが、タマネギにはない。 ・植物は1つ1つの細胞の区別がはっきりしている。 ・植物の細胞は形がはっきりしているが動物はそうでない。 ・植物も動物もはっきり染色される玉のようなものがある。 </div> <p>◇植物や動物のいろんな部分の細胞の写真を班に配布し、プロジェクターでも投影する。 視点1</p> <p>◇はじめとはちがう生徒が司会になるように指名する。 視点2・3</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・植物の細胞はどの部分の似ているが、動物の細胞は形はさまざま。 ・どの細胞も染色された玉のようなものが見られる。 </div> <p>・ホワイトボードの意見について、質問を交えながら、解説し、細胞のつくりについて説明する。</p>	<p style="text-align: right;">【ワークシート】</p> <p style="text-align: right;">◆知識・理解</p> <p style="text-align: right;">植物と動物の細胞のつくりの共通点と相違点について理解し、知識を身につけている。</p> <p style="text-align: right;">【ワークシート・テスト】</p>
5分	<p>・授業の感想をワークシートに記入する。 個人</p> <p>・次時についての確認をする。</p>	<p>・本時の授業で確認したこと、気づいたことなどについてふりかえさせる。</p> <p>・次時についての説明をする。</p>	

4) 理科の成果と課題 成果

- ・授業の導入を丁寧に行い、本時の課題と見通しを明示することは、生徒に興味関心を抱かせ、授業に向かうより意欲的な姿勢づくりに役立った。また、本時の課題をすべての生徒に明確に把握させるために、デジタルコンテンツ（画像・映像）を用いたり、本時に臨む

生徒のスタートラインをそろえるために既習事項を再確認することが、授業のつながりを産むためにも有効であった。

- ・班の中で、生徒をA～Dに分け、役割分担をさせてきた。回を重ねる内に生徒に定着が進み、違和感なく受け入れられてきた。
- ・個人の考えを持ちより班内での論議を進める際に、ホワイトボードを利用するようにした。ホワイトボードは簡単に書き換えが可能であること、考えを可視化できること、持ち運んで説明に使ったり黒板にはり付けることも可能であることなどの利点があり、有効に活用している。このホワイトボードを用いての発表については、生徒A～Dで発表者と聞き手を指定したり、場面によって入れ替えたりするなどして発表者が偏らないように配慮することで誰もが発表する、発表できるようにするという意識を持てるようになってきた。また、班全体での共同作業という雰囲気ができ、発表への準備を協力して行うようになってきた。
- ・「グラフの作成」や「光の屈折の作図」などでは、早く完成させた生徒は班内の生徒にアドバイスを与えるようにした。すると、早くできた生徒はアドバイスを求める班員に作図の要点を根気よく教える姿が見られた。また、「仕事の原理の発展問題」などでは教室を自由に移動できるようにした。このような場面でも生徒同士がうまく教え合う姿が見られた。
- ・指導案にある「凸レンズ」や「細胞とはどのようなものか」の授業では、作図のポイントを生徒が教える場面や、植物と動物細胞の共通点や相違点を確認し合う場面を設定し、他へ発表することができた。「密度」や「仕事の原理」の授業では、生徒が目的意識を持って主体的に実験に取り組み、実験を通して得られた結果からより深い理解へとつなげるための話し合い活動ができていた。具体的に「仕事の原理」の授業では、「力が半分ですんでも距離は2倍になる」という理解から「力が4分の1や5分の1の場合にも距離は4倍や5倍となり、必ず仕事の原理が成り立つ」ことを体感も通して理解し、「仕事の原理は奥が深い」といった感想を持てるようになった。

課題

- ・現在の導入の工夫も有効であるが、今後も更に導入の在り方については検討し、実践していかなければならない。
- ・班活動の際に生徒A～Dの内、担当生徒のみを集め指示をするための時間が、他の生徒にとって時間ももたないという指摘もあり、何もせずに手持ちぶさたで過ごしてしまうことがないような工夫が今後必要である。
- ・発表については、教室全体への発表を行うのに適切な課題か、複数の班でメンバーを入れ替えて説明し合うことが適切な課題なのかを場面設定も含めて検討を進めていきたい。
- ・「学び合い」による学習を進める中で、「目的意識をもって観察、実験を主体的に行うこと」、「分析して解釈する能力」や導き出したことがらを「表現する能力」を育むことを意識しての授業づくりをすすめてきているが、さらに「科学的な概念を使用して考えたり説明したり」する力を高める取り組みをさらに進めていく必要がある。



班での考えを隣の班に伝える様子

(6) 英語科の取り組み

1) 英語科授業改善プラン

<p>◆目指す授業の姿</p> <p>自ら考え、表現する力を育成する授業</p> <p>生徒が英語を用いた活動に慣れ親しみ、互いの思いや考えを伝え合おうと意欲的に取り組む授業</p>
<p>◆授業改善の3つの視点における重点目標</p> <p>視点①：生徒にとって身近で興味・関心のある導入を行い、活動一つ一つのねらいを明確に提示し、そのねらいの達成度を生徒自らも実感できる授業づくりを行う。</p> <p>視点②：基礎基本の定着から自己表現に至るまで段階に応じた言語活動をバランス良く取り入れる。</p> <p>視点③：活動内容に応じて学習形態を工夫し、生徒が主体的に学び合う場を意識して設定する。</p>
<p>◆重点目標達成への具体的な方策</p> <p>視点①</p> <ul style="list-style-type: none">・導入時に、生徒に興味・関心のある題材や視聴覚的な教材を用いる。・単語テストや熟語テストなどを定期的に行い、基礎基本の定着を図る。 <p>視点②</p> <ul style="list-style-type: none">・基礎から応用までの活動を関連させた授業を構築する。・スピーチや英作文などを校内掲示したり、相手に伝えるための言語活動場を設定する。・4技能を効果的に関連させた活動内容・場を設定する。 <p>視点③</p> <ul style="list-style-type: none">・ゲームやインタビュー等を取り入れながら仲間（相手）と協力する場を設定する。・個人思考からペア、グループでの「学び合い」の場を取り入れる。
<p>◎教科において考えられる基盤となる言語活動の場</p> <ul style="list-style-type: none">・導入時に教師の提示する内容やまとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取る。・書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読する。・学習した言語材料を用いて、互いの考えや気持ちを伝え合う。・ペアやグループ活動の中で自分から積極的に関わり、つなぎ言葉を用いるなどの工夫をして会話をつづける。・与えられたテーマについて簡単なスピーチをする。・学習した言語材料を用いて、身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちをまとめた文として書く。
<p>◆重点目標の評価</p> <p>視点①</p> <ul style="list-style-type: none">・単元（基本文）プリントやワークシート、課題英作文などに意欲的に取り組んでいる。 <p>視点②</p> <ul style="list-style-type: none">・学習した言語材料を用いて、自分の考えを表現しようとしている。 <p>視点③</p> <ul style="list-style-type: none">・互いの考えや気持ちを伝え合いながら、ペアやグループの話し合いの場で、積極的に活動に取り組んでいる。・全体の中で行う個人発表の場で、聞き手を意識して伝えようとしている。

視点① 興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

2) 英語科における授業づくりの重点

生徒が意欲的に授業に取り組むためには「楽しい」と感じることと「分かる」と感じる必要があると考える。「楽しい」ためには、生徒にとって興味関心のある導入と活動を展開することが必要で、「分かる」ためには、学習内容を明確に、段階を踏んで進めることが欠かせない。そこで学びへの関心、学ぶ意欲をもてるような授業の工夫、「分かる」と実感できる場の設定や個に応じた指導が大切となると考え実践を重ねた。

生徒が「知る」段階では、生徒にとって、より身近な話題の基本文で導入を図ることが大切である。次に言語材料を覚え、基礎基本を定着させ、最終的には自分の考えや思いを表現するための「使う」まで、段階を追って深めていくことが大切だと考える。思考力・判断力・表現力をつけるための活動として、特に「使う」段階で、必要感のあるスキットの提示や表現するものをイメージしやすい工夫を心がけ実践を重ねている。また、生徒の習熟に合せた教師からの支援の仕方も、生徒の意欲に大きく関わるので、ティームティーチングや少人数授業を生かして支援の方法を工夫し授業づくりをしている。

学習形態も非常に重要で、個から小集団、そして全体へと移行させ、個の考えをもとに学び合いを深めるように流れをもたせることは大変有効である。ペアやグループ活動をうまく取り入れて、学び合い、刺激しあえる場の設定をすることで生徒の意欲を高めていきたい。

3) 英語科における授業づくりの実践

【例1】学習形態を生かした学び合い

1年生ではティームティーチングのよさを生かしてスキットでは具体物を提示して導入するなど生徒の関心をひきつけることで授業に入っている。2、3年生でも視覚的教材を取り入れ、興味・関心を高める工夫をしている。生徒が英語で表現したい、伝えたいという思いをもって、「言いたいことをどう言うかを知る」ことが重要であり、そのなかで基本的な語や表現を習得し、それをを用いる活動を行うことで、英語を実際に「使う」場面を設定している。

3年生のスキット作りでは、ドラえもんキャラクターを使って、「やってみたい」という意欲やアイデアがわくように、いくつかの具体例を示した。まずは個人で基本文をもとに短文を作り、前後・左右などのペアで作品を見せ合った。他と自己を比較し、他との違いに気づくことで学びが深まり、最初は何も書けなかった生徒も友達の例を見て参考にしていた。その後、5人で班になり、提示した文のあとに続くオリジナルスキットを作成した。

生徒同士がグループの中で話し合うことで、基本文が使われる場面をさまざまに変化させてスキットを作成することができた。

授業の中でお互いの表現を紹介し合い、共有することで、より良い表現を求めたり、どのような場面でその表現が使えるかを考える生徒が増えてきているように感じる。



3年生のオリジナルスキット作成の様子

【例2】「話すこと」、「聞くこと」をリンクした活動

前述のように、グループで協力して、ひとつのスキットを作り上げたりした場合は、つなぎ表現も含めて、十分な練習時間を確保したあとで、グループごとに教室の前に出て発表させる。

発表を聞く場面では、思考力・判断力の育成のために、聞きとりのための課題を設定している。例えば、1年生の「How many～？」の構文を使った活動では、友達の発表を聞いて、品物の合計がいくらになったかをメモさせることで、会話の内容をきちんとつかませた。同時に、グループごとに発表の良い点を評価させることで、発表を通して、学び合いの機会も設定している。発表者は聞き手がいることを意識して、声の大きさ・目線・態度に留意して自分の伝えたいことを表現する。聞き手は、聞くポイントにもとづいて、発表内容を聞き取る。その際に、「発表の内容を正確に聞き取ること」と「発表の態度の良さを見ること」の二点をポイントとしたことで集中して発表を聞くことができた。聞き手は、発表者の内容を正確に聞き取る過程で、興味ある視点から、発表者に分からないことを質問したりすることができた。質問文を考える際にも「その質問は、この単語を使って英語で言えないかな」と既習単語や表現を投げかけることで、「聞くこと」から「話すこと」に自然な流れで進むことができていた。

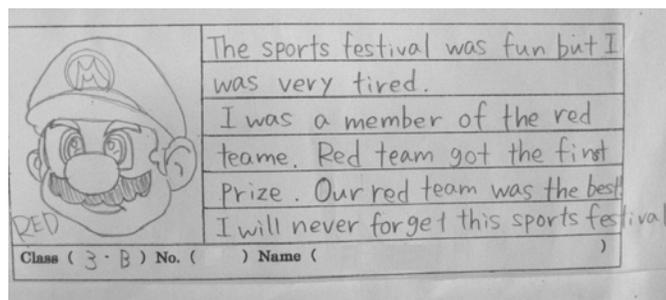
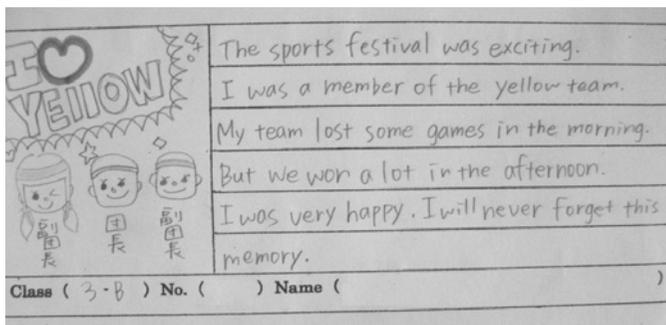


1年生の授業での発表の様子

また、発表の態度の良さを伝え合うことが生徒同士の相互評価となり、発表者の自己表現への達成感につながっていたようだ。「話すこと」と「聞くこと」をリンクした活動を行うことで、内容に集中し、相手を意識して発表や聞き取りとする姿勢が見られた。

【例3】掲示の活用

小さな達成感を持たせる工夫の一つとして、語彙力・文法力向上のために単語テストや基本文テストを年間を通じて行っている。学習した言語材料を用いて、テーマにもとづいた英文を作成した時は、生徒作品を掲示して自己評価だけでなく相互評価もできるようにした。友達の作品が良い見本となり、書くときの参考になっている様子うかがえた。また学習の手立てを示したシラバスを配布したり、生徒の良いノートの例を掲示することで、表現力を高めるための「学び方への手引き」を示している。



生徒の作品

第1学年B組 英語科学習指導案

日時：平成21年10月7日（水）第6限
場所：1年B組教室
指導者：齊藤 美希 (T1)・森本瑠美子 (T2)

1 単元名 Unit 5 ピクニックに行こう（東京書籍 NEW HORIZON English Course 1）

2 教材の目標

- ・名詞の複数形の形・意味・用法がわかり、How many の用法を用いて表現できる。
- ・買い物場面で、Excuse me? Sorry?など適切な表現を用いて、自然な会話の流れで注文のやりとりができる。
- ・「…しよう」と提案したり、「…してください」と申し出たり、「…しなさい」と指示できる。
- ・ペア、グループ活動に意欲的に参加できる。

3 指導にあたって

(1) 教材観

これまで、be動詞、一般動詞、whatを用いた疑問文を学習し、この単元では、名詞の複数形と数のたずね方を学習した。ここではハンバーガーショップで買い物をするのが主な活動になっている。生徒にとっても実際身近な題材で、想定しやすい場面での会話となる。正確に注文したり、その応答することが求められる。そしてまた、会話の流れで聞き取れなかった場合の表現の仕方、品物を渡したり、受け取る際に使いたい表現などもある。これらの表現は、買い物だけでなく、周囲の色々な場面でも用いられる自然な表現である。普段から教師が意識して用いてきた表現を、これを機会に生徒自身が気づける機会となってほしい。

TT指導による良さを出来るだけ多く活かせる授業作りを行っていきたい。

(2) 生徒観

全体的に明るく発言の多い元気なクラスである。学習に対する意欲もあり、普段のゲームやインタビュー活動でも、男女関係なく、積極的に取り組む。自分の考えを発表する場面でも、よく手が挙がる。教師によるリピート練習や音読練習をいろんなパターンでおこない、生徒は楽しく大きな声を出して取り組んでいる。ノート作りや活動プリント、ワークの取り組みもじっくり行える生徒が多い一方で、英語は聞いて分かる、だいたい言えるが、書けないという生徒が数名いる。発言が多い生徒ほど、書くことへの抵抗が多いのが気になるところでもある。「書くこと」が苦手なため、単語の定着にも欠ける。こつこつと取り組む習慣をつけさせるために単語・本文練習の宿題や単語テストを通して、四月から継続して練習を重ねている。宿題は出来るだけ、即時に評価し生徒へ返すようにしている。認められる感を出来るだけ多く与えていきたい。

小さなステップ一つ一つを段階的に活動を積み上げていきたい。学習隊形も、教師対生徒全体からペア、そしてグループなど変化を持たせて活動を行いたい。

(3) 指導観

授業一つ一つの中で生徒の活動場面を多くとるように心がけている。間違えても大丈夫な雰囲気もできてきたと思う。身近で面白い内容の基本文を意識して提示し、ペア活動やインタビュー活動を行い、ビンゴなどでも出来るだけ英語使用場面を取るよう心がけている。

TT指導が行えるので、本文の音読テストやペア活動でも教師の目やアドバイスがしっかり届く。生徒たちはわからない事柄や間違いを質問することができ、心強いようだ。

4 指導・評価計画（総時数6時間）

次	小単元名 及び目標	主な学習活動	① コミュニケーションへの関心 ・意欲・態度	② 表現の能力	③ 理解の能力	④ 言語や文化 についての 知識・理解
1 (2)	名詞の複数形 名詞の複数形 の形・意味・ 用法を理解	2つ以上の数の 形や意味を知る ----- 本文の音読練習 と内容理解	注文と応答（ペ ア活動）を積 極的に行う	Pleaseを用い る場面を理解 し、使う		複数形につい ての正しい知 識がある
2 (3)	How many…? の 疑問文とその 応答	“持ち物チャ ンピオン”（イ ンタビュー活 動） ----- 本文の音読 練習と内容理 解 Try shopping at Jusco Shin Komatsu	自分の持ち物 の数を正しく 伝えられる マイクと笑み になったつも りで楽しくペ アで読み合い が出来る	自分の持ち物 の数を正しく 伝えられる How many ? を 用いて必要な 数をたずねた り、またその 数を相手にき ちんと伝える ことができる	相手の持ち物 の数を聞いて 理解できる どんな話題で 話を深めてい るか、本文を 読み取れる	How many…? に ついての正し い知識がある
3 (1)	Let' s …/命令 文	「…しよう」 と提案したり 申し出たり指 示する 本文の音読練 習と内容理解			マイクとエミ になったつも りで本文を読 む	勧誘、申し出、 指示について 正しい知識が ある

5 本時の授業

(1) 教材名 Unit5 Part2

(2) 本時のねらい

- ・教師のデモンストレーションやグループ発表を聞いて内容を理解できる (L: 理解)
- ・グループ内で役割を決め、活動に積極的に参加している。
(コミュニケーションへの関心意欲態度)
- ・How many … ? を用いて必要な数をたずねたり、またその数を相手にきちんと伝えることができる。
(S: 表現)

(3) 授業改善のための3つの視点

視点① 興味関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

- ・導入時には具体物を用いての視覚的教材を用いる。
- ・TT指導のよさを生かし、本時の対話文（店員と客）を役割演技で生徒をひきつける。

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・ひとつの授業の中で、生徒の活動場面を多くとるように心がける。
- ・学習した用法を用いて自分の場合で考えられる機会を多く持たせる。

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- ・学習形態を工夫し、集団からグループ活動へ移行し、できるだけ多く生徒同士が会話する機会を持つように設定する。
- ・全体から個へステップを踏んで学習内容を深める。

(4) 準備

野菜や飲料などの品物、ショッピングリスト、プリント (soar)

(5) 本時の展開

配時	学習活動および形態	・：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点	◆：観点【方法】
1 5	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">Try shopping at JUSCO Shin Komatsu (買い物のデモンストレーション)</p> <p>[場面設定] 教師二人が「店員」と「客」の役をし、パーベキューの材料として必要なものを買う。ところが品物がどこにあるのか分からない</p> <ul style="list-style-type: none"> よく聞いて、何を探していて、それがいくつ必要か、そして代金はいくらかなどを聞き取る 内容の確認を行う さらに品物を取り上げながら、会話をしてみせる (会話の再確認) リピートして流れを確認する 	<p>◇生徒の関心をひきつけるように、店員さん呼び止めて尋ねるところから演技スタートする 視点1</p> <ul style="list-style-type: none"> 品物を見せながら、状況をたのしく、分かりやすく伝える 分かった生徒は挙手させる 発言した生徒の列に花丸チェックをつける 視点2 	<p>◆ [L:理解] 会話の内容を理解できているか ○発言し答えられる △→発表生徒の答えで確認させる</p> <p style="text-align: right;">【行動観察】</p>
1 5	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">Try shopping at JUSCO Shin Komatsu 自分たちで計画を立て買い物に行こう</p> <ul style="list-style-type: none"> グループでパーベキューに必要な材料、量を決める。 役割を分担する (メニューシートに記入) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ★ size of voice ★ manner of talking ★ talk smoothly </div> <ul style="list-style-type: none"> 早く完成したグループに対して、身振り手振りなどを強調し、さらに練習する その品物がない場合はなんと言うかなども入れて会話する 	<p>◇グループで協力してパーベキューを楽しむための企画を立てさせる 視点3</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ活動での練習の目標を伝える I'm sorry... I don't have --s. などを使ってやり取りする 教師二人でグループごとにアドバイスをする プリント (soar) を回収する。(次の授業でコメントとポイントを生徒一人一人に返す。) 	<p>◆関心・意欲・態度 グループで協力して練習に参加しているか ○一生懸命活動に参加している △→個別に声をかけアドバイスする</p> <p style="text-align: right;">【行動観察】</p> 
1 5	<p>【グループ発表】</p> <ul style="list-style-type: none"> クラスの生徒に自分たちの Try shoppingを発表する 	<p>◇グループで協力しオリジナルの買い物場面を演じる 視点3</p> <ul style="list-style-type: none"> しっかり伝えること、また聞いてよいところを見つけて参考にするよう指示する 教師二人で発表グループと聞くメンバーたちへの支持を分担する 	<p>◆ [S:表現] How many?の用法を正しく使って相手にしっかり伝えられたか、それに応答できたか ○正しく表現できる △→本日の基本文に当てはめるように支援</p> <p style="text-align: right;">【行動観察】</p>

第1学年B組 英語科学習指導案

日 時：平成22年7月13日（火）第4限
場 所：1年B組教室
指導者：齊藤 美希(T1)、為川亜希子(T2)

1 単元名 Multi Plus1 わたしの自己紹介 (東京書籍 NEW HORIZON English Course 1)

2 単元の目標

- 自己紹介発表のためのペア、グループ活動に意欲的に参加することができる。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- 自分自身のことについて「好きなこと」や「放課後すること」など話題をしばって表現することができる。聞き手を意識して、自己紹介する内容を表現できる。(表現の能力)
- 自己紹介モデル文の内容を理解することができる。(理解の能力)
- 自己紹介に使う表現や単語・文の書き方が理解できる。(言語・文化についての知識・理解)

3 指導にあたって

(1) 教材観

初めてのMulti Plusとなる。この単元までの学習の中で簡単な自己紹介をするために「話題」をもって表現するために必要な言語材料がかなり出そろった。Unit 3では、「スポーツ」、「楽器」、「通学手段」を扱い、Unit 4では、「教科」と「朝食」を扱った。文法的にはbe動詞、一般動詞やwhat疑問詞を用いた文などを学習した。

Multi Plusでは、自己紹介する題材を通し、まとまった文で自己表現できるよう指導する。文法的に見ても、be動詞と一般動詞を学習した直後であり、その総合的な運用や発展課題のよい機会である。自己紹介文を自分で作り他へ発信し、さらには今後聞いた内容について質問するなど、4技能を統合的に関連付けた活動を展開しくことも可能な単元なので、発展的な活動にすることができる。

(2) 生徒観

全体的にまじめで明るく落ち着いたクラスである。学習に対する意欲もあり、普段のゲームやインタビュー活動でも、男女関係なく、積極的に取り組むことができる。教師によるリピート練習や音読練習の時も、生徒はしっかり声を出して取り組んでいる。小学校では音声を中心に英語に慣れ親しみ、それを受けて中学校では文字を通した学習が始まり、発音と綴りを関連づけて指導することが大切である。多数の生徒が書くことにもしっかり取り組む中で、発音はできるが「書く」ことへの抵抗のある生徒が気にかかる。「書くこと」が苦手な生徒は、単語の定着に欠ける。こつこつと取り組む習慣をつけさせるために単語・本文練習の宿題や単語テストを行い、継続して練習を重ねている。

「知る」から「使う」までの活動を一つ一つ段階的に積み上げていきたい。学習形態も、教師対生徒全体からペア、そしてグループなど変化を持たせながら活動を行っていきたい。

(3) 指導観

授業一つ一つの中で生徒の活動場面を多くとるように心がけ、間違えても大丈夫な雰囲気が少しずつできてきた。身近で面白い内容の基本文を意識して提示し、ペア活動やインタビュー活動で英語使用場面をできるだけ多くとるように心がけている。

1年生には、TT指導が行えるので、本文の音読テストやペア活動でも教師の目やアドバイスがしっかり届く。生徒たちにはわからない事柄を質問することができるので、心強いようだ。

思考力・判断力・表現力を育成する場の設定として、「英語でどのように言えばよいのか」「ど

のようにすればより伝わるのか」という必要感を抱かせるように指導したい。生徒に表現したい課題を持たせ、それを「どんな場面で」「どう表現するか」について考える機会を設定し、活動全体に意味を持たせたい。全体でのパターン練習以外に、個人思考の時間を十分確保し、「どう表現すべきか」についてしっかり考えさせる場面を設定したい。すぐ答えとなる手立てを与えるのではなく、生徒の学びの姿勢を大切にしていきたい。そのために、ペアやグループ活動を工夫し、互いに学び合いのできる集団をつくっていきたい。

4 単元の指導・評価計画（総時数2時間）

次	小単元名 及び目標	主な学習活動	① コミュニケーションへの関心 ・意欲・態度	② 表現の能力	③ 理解の能力	④ 言語や文化 についての 知識・理解
1 (2)	自己紹介	自己紹介文をつくる		話題をしぼって表現することができる	モデル文を読み、理解できる	自己紹介に必要な文法がわかる
		自己紹介文を発表する	ペア、グループ活動に意欲的に取り組むことができる	聞き手を意識して自己紹介する内容を、表現できる		

5 本時の授業（第1次第2時）

(1) 単元名 Multi Plus1 わたしの自己紹介

(2) 本時のねらい

- 自己紹介発表のためのペアやグループ活動に意欲的に取り組むことができる。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- 聞き手を意識して自己紹介する内容を表現できる。
(表現の能力)

(3) 授業改善のための3つの視点

視点① 興味関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

- 聞き手を意識させるための工夫として、生徒の興味関心のある題材や視聴覚的な教材を用いて導入する。

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- 導入から本時のねらい到達に至るまで生徒の活動場面を多くとるように心がける。
- 学習した言語材料や表現を使って、自己表現する機会を設定する。

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- ペア練習やグループ活動を通して、自己を振り返り他から学ぶ機会を持たせる。
- 友達の発表を聞いて、表現の仕方を学ぶ場面を設定する。

(4) 準備・資料等

自己紹介カード、QAシート、写真、評価シート

(5) 本時の展開

配時	学習活動および形態	・：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点	◆：観点 【方法】
5	・ウォームアップとして「クイックQ&A」を行う ペア	<ul style="list-style-type: none"> 本時の後の活動につなげられるよう十分練習させる (T1) slow learnerへの支援を行う (T2) 	

15	<p>・教師の提示するモデル自己紹介文を聞く</p> <p>- 3パターン見る</p> <p>C-「原稿を読む」よくない例</p> <p>B-本時の「全員クリアー目標」例</p> <p>A-質問の入る「レベルアップ」例</p> <p>・本時の課題をつかむ 全体</p>	<p>◇スポーツ選手の自己紹介を例として取りあげる 視点①</p> <p>・自己紹介文を伝える (T1)</p> <p>・生徒に印象を尋ねる (T2) [CとBの違い/Aの印象]</p> <p>・よい発表の評価のポイントを伝える (T1)</p>	<p><u>1 Loud Voice</u></p> <p><u>2 Smile</u></p> <p><u>3 Eye contact</u></p> <p><u>4 Gesture</u></p> <p><u>5 Posture</u></p>
<p>本時の課題 自己紹介文を発表しよう</p>			
25	<p>・自己紹介の練習をする ペア</p> <p>・4人1グループになる</p> <p>・自己紹介者と聞き手に役割をわける</p> <p>・一人ずつ自己紹介を発表する</p> <p>・メンバーは発表を聞いて、発表内容をメモしたり評価シートに記入する</p> <p>・グループ内で互いのよい点について伝え合う</p> <p>・グループの代表生徒を選出する グループ</p> <p>・各グループの代表が発表する</p> <p>・発表者は、教師からの質問に答える 全体</p>	<p>◇伝えたいことを、英語で聞き手を意識して表現する場の設定を行う 視点②、③</p> <p>・相手に、よりわかりやすく伝えるために、気をつける5ポイントについて確認する (T1)</p> <p>・slow learner への支援として評価の <u>1 Loud Voice</u> に気をつけるよう、声かけする (T1&T2)</p> <p>・fast learner へは、Cパターンに挑戦できるように促す (T1)</p> <p>・発表のためのポイントを、黒板に提示する (T1)</p> <p>◇個々の考えを全体が共有する場をつくる 視点③</p> <p>・質問したい生徒を指名する (T1)</p>	<p>◆コミュニケーションへの関心・意欲・態度</p> <p>ペア、グループ活動に意欲的に取り組むことができる</p> <p>【行動観察】</p> <p>◆表現の能力</p> <p>聞き手を意識して自分の伝えたい内容を表現できる</p> <p>【発表、評価シート】</p>
5	<p>・本時の振り返りをする 個人</p>	<p>・自己評価させる</p>	

4) 英語科の成果と課題

成果

視点① 興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

- ・重要文法事項のポイントをワードカードで提示することで、生徒の助けになり基本文の導入からパターンプラクティスまでスムーズに移行できた。
- ・導入段階で、生徒の身近な題材を使ったり視覚的教材を使うことで、生きた基本文となり生徒の記憶に残りやすく、生徒が「伝えたい」という思いをもつので、主体的に学ぶ意欲を高めることができた。

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・小テストなどを活用して段階を追って課題設定したことが、生徒に「できる」「わかる」という成就感を持たせることにつながった。
- ・教科書を離れた活動として、既習の英語を用いて自己表現活動に取り組んだことは、生徒の興味・関心や学習意欲を高めることができ、効果的であった。

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- ・生徒同士の英語発話量を増やし、学び合いの場を意図的に設定したことで、生徒が主体的に活動できた。
- ・ペアやグループで活動では、これまでにルールを徹底して確認してきたので、いずれも話し合いや学び合いがスムーズにできるような集団づくりが確立されている。
- ・聞く姿勢も良く、指示が通りやすいので、学習形態を変えていく中で、他とのかかわりから多様な表現に気づき、英語が苦手な生徒も表現してみようとする意欲が見られた。

課題

視点① 興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

- ・生徒の興味・関心を高める導入の工夫をデジタル教材の活用などいろいろな方法を用いて行っていく必要がある。

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・学習到達速度の早い生徒とそうでない生徒との差異の調整を工夫し、生徒をあきさせないように、また英語への苦手意識を持たせないように、授業を組み立てなければならない。
- ・学習形態を工夫し、表現課題に取り組む時などは、全体→グループ→ペア→個へという流れで行い、最終的には自分の考えを発信できる力をつけさせたい。そのためには、「個」までの活動の中で、生徒に自信とやる気をもたせる活動を設定していく必要がある。

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- ・英語を「使える」場面を教師が意識して生徒に与えることは欠かせない。そこで誰かに英語で伝える機会を設定し、自分の英語が伝わったと感じられる場面を今後も考えていかなければならない。
- ・1年生中心に行ってきたティームティーチング指導や2年生での少人数指導では、そのよさを生かす授業を意識して組み立てることが大切である。普通の授業では、特に導入時や展開時で、その利点を取り入れた授業を組み立てていく必要がある。

(7) 音楽科の取り組み

1) 音楽科授業改善プラン

<p>◆目指す授業の姿 生徒が音楽的特徴（音色・リズム・速度・旋律・テクスチャ・強弱・形式・構成など）を感じ取り、それらを生かして表現・鑑賞できる授業</p>
<p>◆授業改善の3つの視点における重点目標</p> <p>視点①：各題材における音楽的特徴の中から学習すべき課題を1つ明確にし、それを生かした表現・鑑賞を学習する。 題材の目標を音楽的特徴が聴いていて分かる教材、中学生の年代として関心の持てる教材を選定する。</p> <p>視点②：音楽的特徴を表す言葉や音楽用語の意味を理解する学習活動を設定する。 題材において、教材の持つ音楽的特徴を感じ取る学習を設ける。</p> <p>視点③：各生徒が個人として感じ取った内容を学級全体に向けて発表させ、それを全体でまとめていくようにする。 パートなど表現するためのグループにおいて、よりよい表現につなげるために、どのようなことに気をつければよいかを個人で考え、グループや全体でその考えが生かされるように意見発表や話し合いの機会を設ける。</p>
<p>◆重点目標達成への具体的な方策</p> <p>視点① ・各題材において、指導事項との関連を考えながら、ねらいとする音楽的特徴をできる限り1つに絞り、明確にする。 ・教師側で特に音楽的特徴という観点での教材研究を行い、生徒が音楽的特徴を感じ取れる教材を教科書などから選定する。</p> <p>視点② ・音楽的特徴を表す言葉の意味を学習する活動を設ける。 ・各題材における音楽的特徴を生徒一人一人が感じ取る機会を設け、感じ取った内容をワークシートに書き、発表したりして、全体の意見としてまとめていく。</p> <p>視点③ ・よりよい表現につなげるために、学習過程の段階に応じて、個人から全体へ、個人からグループへ意見発表やグループによる話し合い、さらにグループ発表を聴いて良いところ・こうしてみたら良くなるなどのアドバイスができるような学習活動を設け、必要に応じて考えが深まるような支援を行う。</p>
<p>◎教科において考えられる基盤となる言語活動の場</p> <ul style="list-style-type: none">・書く → ・題材の最初に模範演奏を聴く活動を行い、音楽的特徴を感じ取る時間を設け、生徒一人一人が感じ取ったものをワークシートに書き込む。・話し合う → ・よりよい表現につなげるためにどうしたらよいかをグループで話し合う。・発表する → ・感じ取った内容を言葉でみんなに伝える。 ・表現作品（歌唱・器楽・創作）で工夫したことをみんなの前で発表する。
<p>◆重点目標の評価</p> <p>視点① ・音楽的特徴を感じ取る書き込みに様々な観点で書き込んでいる。</p> <p>視点② ・感じ取った内容を発表したり、話し合ったりしてよりよい表現のための工夫を考えている。</p> <p>視点③ ・個人で考えたり、グループで話し合ったり、全体の中で発表することによって課題解決しようとしている。</p>

視点① 興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

2) 音楽科における授業づくりの重点

① 各題材における音楽的特徴について

まず、題材を設定するに当たって、何を学習の目標とするのかが大切になる。しかし、楽曲はたくさんの音楽的特徴（音楽的諸要素）からできており、そのすべての音楽的特徴にふれながら学習を進めるのは膨大な時間がかかってしまい、学習のねらいがはっきりしなくなる。そこで、1つの題材においては音楽的特徴をできる限り1つに絞り、それについて学習を深めるようにねらいを定めることにした。そうすることによって生徒も教師もねらいとする音楽的特徴1つについて課題意識を持って、各題材に取り組むことができると考えた。

この感じ取る活動を、各題材における学習の始まりにおいて必ず行うようにした。つまり、教材となる楽曲を聞き、生徒が感じ取る時間を設けた。そうすることによって、各自が感じたことから授業が発せし、それを全体に発表することで共有し、音楽的特徴を理解することにつなげるとともに、それを生かした表現活動を行うことにつなげられると考えた。

② 言語活動の充実のために

言語活動の充実という点においては、音楽的特徴を表す言葉やその意味を各題材の学習を進めながら理解し、それらを活用することで学習を深めていくことを考えた。言語を使うためにはまず、その意味を分かった上で、それがこの曲ではどうなっているのかが感じられなければならない。そこで、感じ取るための観点（音色・リズムなど・・・）をヒントとして提示しながら学習を進められるようにした。そうすることで、課題となる音楽的特徴にポイントを絞って感じ取れるようにした。それを出発点として共通の課題としてとらえ、表現の活動につなげられるようにしようと考えた。

③ 「学び合い」のできる学習の場作りについて

学習の場づくりとしては、個人・グループ・全体が挙げられる。これらを学習過程それぞれの場面において効果的に設けることが大切だと考えた。それらを例示すると以下ようになる

◇個人→全体	・音楽的特徴を感じ取り、全体でまとめる場面
◇グループ（話し合い）	・表現活動において、各パートやグループで表現する時に、どうしたらより伝えられるかを音楽的特徴を生かして工夫する場面
（教え合い）	・表現活動において、各パートやグループで表現する時に、技能におけるポイントを指摘し合いながら高め合う場面
◇グループ→全体	・グループで話し合った部分を生かして、曲全体への表現につなげる場面

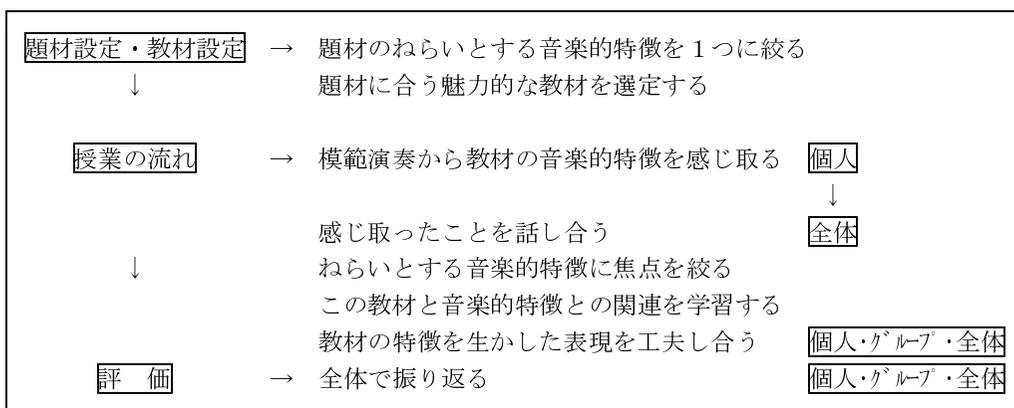
これらの場面において個人・グループ・全体の学習形態を工夫することで、学習が深まることにつなげようと考えた。

3) 音楽科における授業づくりの実践

実践例として表現の歌唱活動・表現の創作活動について述べる。

[実践例] 歌唱表現における学び合い

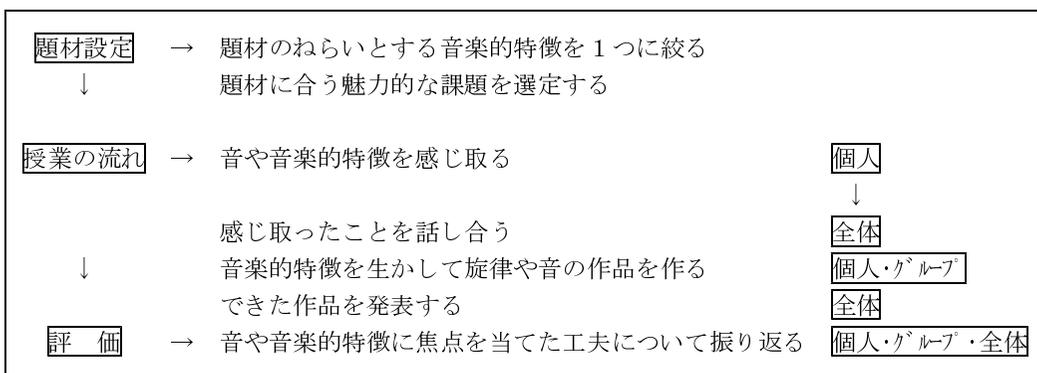
歌唱表現においては、題材設定やその目標について考え、教材を選定し、ねらいとする音楽的特徴を感じ取り、表現する工夫をするということが大きな授業の流れとなる。そこで、次のような流れを考え、学びを深められるように工夫した。



この流れで授業を作ることで明確にねらいが分かり、音楽的特徴についても理解できるとともに、その特徴を生かした表現の工夫を行うことができると考えた。また、各段階において、個人・班・全体にかかわる学びの場の設定を工夫することが必要となると考え実践した。

〔実践例〕創作活動における学び合い

創作活動においては、音楽的特徴を理解すること、その特徴を生かして旋律や音の作品を作りあげること、できあがった作品を発表し音や音楽的特徴に焦点を当てた工夫について全員で振り返ることの3つが流れとして大切になると考えた。これを授業づくりにおける大切な流れとして、それぞれに学びが深まるための個人活動・班活動・クラス全体の活動を入れることで個人としてあるいは集団として学び合いながら深めていく活動につなげられないかと考えた。



1年生において、創作活動における実践を行った。特に創作の場面においては、一人で考えを深めることも大切だが、それ以上にグループになり個々に考えを持ちながら、グループメンバーそれぞれの考えをまとめたり相談したりしながらアイデアを深めることにつなげられると考えた。

この実践では、「a. 各題材における音楽的特徴について」では、音の学習として自然音や環境音について考え、音にはいろいろな表情があること（この場合は、音の長さ・高さ・質・強さ）に着目させた。「b. 言語活動の充実のために」では、音の表情を生かして創作（この場合は、物語に合う効果音を作る）する活動を考えた。「c. 「学び合い」のできる学習の場作りについて」は、創作活動の段階や発表の段階においてお互いにアイデアを出し合ったり、協力して音の作品を作りあげたり、お互いの発表を聴き合うことでよりよい表現のためのアドバイスをする活動を場面として作るようにした。

第1学年A組 音楽科学習指導案

日 時：平成22年7月13日（火）5限

場 所：音楽室

指導者：中村 光貴

1 題材名 音で物語や情景を表現しよう

2 題材の目標

- ・音の持つ表情に関心を持ち、物語や情景に合った音を工夫し表現することに意欲的に取り組んでいる。
(音楽への関心・意欲・態度)
- ・音の持つ表情を感じ取り、物語や情景に合った音を表現するための工夫をしている
(音楽的な感受と表現の工夫)
- ・音の持つ表情を生かして、物語や情景に合った音を表現する技能を身につけている
(表現の技能)

3 指導にあたって

(1) 題材観

この題材では、「音の持つ表情」について学習し、それを生かした表現活動をするために、様々な音の表情と物語・情景を関連させた創作活動を行うことをめあてとした。新学習指導要領音楽科で音・音素材・自然音・環境音という音そのものについて考えを深める活動が、大切だとされている。ここでいう「音の持つ表情」とは、「音の長さ・音の高さ・音の質・音の強さ」の4つであり、(指導者の考え) 普段、人間は音を、基本的にそれら4つのことを通して知覚し、イメージし感じ取っている。それら4つの音の表情を学ぶことによって、音の諸要素について学習することを考えた。

ここでいう物語や情景は、例えば次のようなものである。「夏の夜」「お化け屋敷」「森の散歩」などである。これらは、教師側から提示するもので、生徒がこの題に沿って簡単な物語を作り、それに合う音をいろいろな音の出るものを使って、よりリアルに伝えるというものである。

また、創作活動の点では、新学習指導要領において1年創作(イ)の指導項目には、

「表現したいイメージをもち、音素材の特徴を感じ取り、反復、変化、対照などの構成を工夫しながら音楽をつくること」

とある。この題材では、生徒が物語や情景という具体的なイメージを持ちながら、創作活動を行うことをねらいとしている。実際の活動では、物語や情景と関連づけられた音や音の組み合わせについて、生徒のユニークなアイデアや工夫が展開されることになる。特に生徒は、「音の持つ表情」の4つを生かしながら物語や情景を伝える工夫をすることになる。

さらに、周りで聴く人はその音を聴くことを通して、その物語や情景をよりリアルに感じ取ることができる。また周りの生徒は、工夫された音を聴くことによって、イメージをより伝え易くするためにはこうしたらよいのではないかということ伝え合い、表現のさらなる工夫につなげることをねらいとして本題材を設定した。

(2) 生徒観

1年A組は、男女ともに活発に音楽の活動に取り組める生徒が多い。男女の仲もよく、協力的である。歌唱の活動では、特に男子の中に恥ずかしがらずに大きな声で歌える生徒がおり、その生徒たちが周りの生徒たちにいい影響を与え、充実した表現活動を行うことができている。創作活動という点では小学校では未経験である。

(3) 指導観

創作活動については未経験なので、最初は生徒たちの中で苦手意識や難しそうという思いを持つ生徒が多いことが予想される。そこで、音や音素材に少しでも関心が持てるようにするために、

- ① 自然音や人工音（指鞆の騒）、環境音などの音に関心を持ち、実際に聴いてみる。
- ② 物語や情景と音との関わりにおいて、特に歌舞伎で使われる効果音についての学習を取り入れる。
- ③ 効果音を通して、「音の持つ表情」に関心を持ち、4つのポイントを感じ取る。
- ④ 具体的にいろいろな音を出せる楽器を用意し、実際に音を鳴らしたり聴いたりして、「音の持つ表情」の4つのポイントを確認する。
- ⑤ 「音の持つ表情」を生かして、物語や情景に合う音を自分たちで工夫する。
- ⑥ 具体例を示しながら「音の持つ表情」について考え、それを生かしながら、創作への意欲やアイデアを出せる支援や雰囲気作りに努める。

などを考慮しながら、授業を展開していきたい。

「音の持つ表情」の4つをキーワードにして、個人やグループで意見を出し合いながら、音の工夫や音の組み合わせの工夫をしていくことができるようにしていきたい。

4 題材の指導計画・評価計画（総時数6時間）

次	学習活動	目標		
		①音楽への 関心・意欲・態度	②音楽的な感受と 表現の工夫	③表現の技能
1次 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・自然音や人工音や環境音についての理解する ・歌舞伎の効果音を例として、音の持つ表情（4つ）についての学習する ・それらを生かしているいろいろな音を組み合わせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・「音の持つ表情」に関心を持っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「音の持つ表情」を感じ取っている。 	
2次 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで5つの物語・情景を選ぶ ・グループ内で協力し、それに合う音を探し、鳴らしてみる ・「音の持つ表情」を考えながら、音を組み合わせ、いろいろな工夫ができるようにする 		<ul style="list-style-type: none"> ・「音の持つ表情」を感じながら、音を組み合わせるなどの工夫をしている。 	
3次 （本時） (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループごとに中間発表 ・発表の際に、工夫したところ（聴き所）を伝えながら発表 ・各グループの発表がどの程度伝わるかを考えながら聴く ・各グループにもっとこうしたらいいポイントを各自が考え、アドバイスする 	<ul style="list-style-type: none"> ・音の持つ表情に関心を持ち、物語や情景に合った音を表現することに意欲的に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音の持つ表情を生かして、物語や情景に合った音の表現の工夫をしている。 	

4次 (1)	<ul style="list-style-type: none"> 各グループで前時のアドバイスを確認する 各グループに分かれて、前時アドバイスを生かしてさらなる工夫を行い、次時の本発表につなげる 		<ul style="list-style-type: none"> 本発表に向け前時のアドバイスを生かしながら、物語や情景に合った音を表現するための工夫をしている。 	
5次 (1)	<ul style="list-style-type: none"> 各グループごとに発表する 伝わり度を考えながら各グループの発表を聴く 今回の学習で学んだことを振り返る 自己評価を行う 	<ul style="list-style-type: none"> 物語や情景に合った音を工夫し表現することに意欲的に取り組んでいる。 		<ul style="list-style-type: none"> 音の持つ表情を生かして、物語や情景に合った音を表現する技能を身につけている。

5 本時について（第3次第1時）

(1) 題材名 「音で物語や情景を表現しよう」中間発表)

(2) 本時のねらい

- 中間発表段階での音の持つ表情を生かして、物語や情景にあった音を表現し工夫する。

(3) 授業改善のための3つの視点

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- 「音の持つ表情」という音楽の諸要素にかかわる言語を使い、生徒が工夫をする。
- アドバイスという言葉のやりとりからよりよい表現を工夫できるようにする。

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- よりよい音を出すための工夫を行うためのアドバイスをみんなが伝えて、グループ全体の発表がより高められるようにする。
- 教師は生徒がよりよい意見をだせるように、意見を全体に求め、発言を促す。

(4) 準備・資料等

ワークシート・様々な音のでるもの（各グループごとに工夫）

(5) 本時の展開

配時	学習活動及び形態	<ul style="list-style-type: none"> ●：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点 	◆：観点【方法】
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 全員で今日の活動のねらいと大まかな段取りを確認する 「音の持つ表情」について確認する 中間発表での細かい段取りの確認を行う 全体 	<ul style="list-style-type: none"> 各グループで工夫した音を表現すること、各グループの発表を聴き、意見を伝えられるよう心構えを意識する。 4つのポイントを復習し、中間発表でのアドバイスができるようにする。 具体的に、題名・伝えるために工夫したことをみんなに伝えてから大きな声で発表するように確認する。 	
展開	<ul style="list-style-type: none"> 9グループに分かれて、楽器などを使って音の鳴らし方を練習し、確認する 班 	<ul style="list-style-type: none"> 音が混ざり合ってしまうが、自分たちのグループができるように楽器・音の鳴らし方などを確認し合う。 	

38分	<ul style="list-style-type: none"> 各グループが順番に中間発表する 	<ul style="list-style-type: none"> ◇「音の持つ表情」の4つのポイントを示しながら、よりよい音を出すための工夫を行うためのアドバイスをみんなが伝えて、グループ全体の発表が良くなるようにする。 視点②③ 	
本時の課題 音の持つ表情を生かして、物語や情景にあった音を表現し工夫しよう			
	<ul style="list-style-type: none"> 各グループ発表 題名：○○○○○ 伝えるための工夫： ○○○○○○○○○ 班 こうしたらよいという意見や工夫を各自が伝える 個人 (各グループの発表) 	<ul style="list-style-type: none"> ◇生徒がよりよい意見をだせるように、意見を全体に求め発言を促す。 視点②③ ◇必要に応じて、生徒の説明不足の発言に解説などを入れ、生徒がより分かるような説明をする。 視点③ 	<ul style="list-style-type: none"> ◆音楽への関心・意欲・態度 音の持つ表情に関心を持ち、物語や情景にあった音を表現することに意欲的に取り組んでいる。 【観・ワークシート】 ◆音楽的な感受と表現の工夫 音の持つ表情を生かして、物語や情景にあった音を工夫して表現しようとしている。 【観・ワカ】
まとめ 7分	<ul style="list-style-type: none"> アドバイスしてもらったことを各グループで確認し、次時に練習課題としてできるように工夫する 次時と最終発表に向けての段取りを確認する 	<ul style="list-style-type: none"> アドバイスをワークシートに書き込み、こうしたらよく表現できるという工夫をまとめるようにする。 各個人で、表現できたかどうかを振り返り、自分達のグループの実践の感想や気づいたことをまとめるようにする。 	

4) 音楽科の成果と課題

成果

- 話し合いの活動を入れることで、音楽的特徴を生かした表現につなげるための意見が多く出た。特に普段あまり意見を発表する機会の少ない生徒が、歌詞の内容と関連させた表現について発言することがあった。(以下のワークシートの例を参照)
- グループによるアイデアを出し合い、1つの作品を作るということは、一人だけで考えていてもなかなかできないことが、色々なアイデアから新しい発想や考えにつながっていき、考えの広がりにつながる。
- グループの発表を行うことで、お互いのアイデアを共有すると共に、アドバイスし合う活動を入れることで、グループ同士が高め合う活動につながられた。

翼をください

- 4分の4拍子の曲
- サビは音の響かなくなるので、ずいぶん
- 男声が主旋律のとき、女声が副旋律がよくかた
- サビの前はリフレンドして、もしよけた
- 最終はかたがたサビに動かし出さず完全な感じ

(工夫すること)

リフレ

- 主旋律のとき → A → mf だが、やさしく、でも隣にえるように、おたやかに歌う
- 副旋律のとき → B → mf だが、副旋律なので、サビの主旋律より、目立たないように、やさしく歌う

1小節に4分音符が4つある

歌詞の内容

悲しみのない 自由な空へ とびたつために 翼がほしい

戦争のない = 平和をよめる

旋律の役割

- 主となる旋律 → 主旋律
- 主旋律を装飾する旋律 → 副旋律 (リズムが違ふ)
- 主旋律を1モーションする旋律 → メモリの旋律 (リズムが同じ)

リフレ	A	B	C
リフレ	主	副	主
リフレ	主	副	ハ
リフレ	主	主	ハ

皆さんの願いがこめられている曲だと思いました。とても、キレイと思いました。

昔の夢と今の夢が同じだという所がすごくいいなと思いました。昔の子供のころの自分や思い出がすごく思い出せる曲だなと思いました。

やさしくおたやかに感じの曲だなと思いました。

4分の4拍子: 1小節に4分音符が4つある。

歌詞の内容

悲しみのない 自由な空へ とびたつために

戦争のない = 平和をよめる

旋律の役割

- 主となる旋律 → 主旋律
- 主旋律を装飾する旋律 → 副旋律 (リズムが違ふ)
- 主旋律を1モーションする旋律 → メモリの旋律 (リズムが同じ)

A	B	C
リフレ	主	副
リフレ	主	ハ
リフレ	主	ハ

(工夫すること)

- ① クレシェントやアフレシェント(さしかり)と表現する。
- ② 声のハートもしっかりと開いて、メロディーがハートを通り抜けるように、声の大きさを考える。
- ③ 音量は時(利)が、おたやかに

2年生の学習シートの書き込み例

課題

- 各学習過程における個人・グループ・全体による効果的な場面の設定には工夫が必要である。
- 話し合いの活動におけるルールを徹底させ、今は何のためのための活動を行っているのかや、クラスの生徒全員の課題意識が持っているか、全員で課題を解決するために様々なアイデアを出せる雰囲気のある場かということ考えた場面設定の必要性がある。その解決方法として相手意識(誰に向かって話しているか)を持たせることや、何のための発言なのかを理解した上で事前準備をしておくことが考えられる。
- 音楽用語が使いこなせるための学習を生徒の関心を引き出ししながら、理解できるようにしていく。
- 掲示物の工夫として、一目でどんなことがいいたいのかが分かるようなものを用意しておく。

(8) 美術科の取り組み

1) 美術科授業改善プラン

◆目指す授業の姿

生徒が達成感が持てるような題材設定や表現方法の工夫をし、生徒が「どう学び、何を身につけるか、どこを頑張ればいいのか」が明らかになり、生徒が学習活動に対して主体的に取り組める授業

◆授業改善の3つの視点における重点目標

視点①：生徒が興味を持ち、主体的に取り組みたい題材設定や提示の仕方を工夫する。

視点②：形や色彩、そこから生成されるイメージを言葉として扱いながら、思考したり表現したり、コミュニケーションを図ったりする力を育てる。

視点③：他者との交流により、見方や感じ方を広げたり、お互いが学んだことを共有化したりする。

◆重点目標達成への具体的な方策

視点① ・生徒が主体的に取り組みやすい課題づくりの工夫と共通課題の目標を明確化する。

・学年の特徴を組みこんだ主体的に取り組める指導過程の工夫をする。

・授業の記録カードに適切な助言を書き入れ、支援する。

視点② ・形や色彩、材料などのいわゆる造形の言語を豊かにとらえながら表現したり鑑賞したりする場をつくる。

視点③ ・自分の思いや工夫を伝え合ったり、学んだことや感じたことを共有化できるような場づくりを工夫する。

◎教科において考えられる基盤となる言語活動の場

○個での言語活動・・・ **書く**（主題の明確化、表現の構想の具体化、自分の思いや工夫等のふり返し）

○他者との言語活動・・・ **伝え合う・話し合う**（見方・感じ方・考え方の広がり、学んだことや感じたことの共有化、互いのよさの認め合い）

◆重点目標の評価

視点① ・作品制作の取り組みの状況や鑑賞活動の課題について自分で考えようとしている。

視点② ・表現の構想の具体化や主題の明確化を相手にわかりやすく表現したり、伝え合ったりしようとしている。

・鑑賞活動で造形言語を豊かにとらえながら書いたり、話し合ったりしようとしている。

視点③ ・自分のアイデアや工夫を意見交換することで、豊かな発想やイメージを深めようとしている。

・鑑賞活動で自分の考えや思いを話し合うことで、より豊かなイメージをつかもうとしている。

視点①興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

視点②言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

視点③「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

2) 美術科における授業づくりの重点

美術科は「表現」と「鑑賞」が一体となった教科である。確かな表現力を育てるためには、生徒がともに作品について鑑賞し合ったり、意見を述べ合ったりする活動を通して、作品の構想や表現の工夫、よさや美しさなどを理解したり、感受したりするような活動が必要だと考えられる。教科の内容がややもすると表現活動に偏りがちな傾向になるが、友達の作品や作家の作品を鑑賞することは、作品のよさの理解を深め、鑑賞活動で得られた表現技法や知識は、表現力に反映し、美術科の基礎的・基本的な知識・技能の習得にもつながると思われる。

21年度は、鑑賞活動を中心に学び合い活動を多く取り入れる試みをした。「鑑賞」については鑑賞時の発言の印象だけでなく鑑賞カードの使用、ワークシートの工夫など、見取りの機会を多様を持つ必要が考えられる。鑑賞カードに表現された言葉や文章が大切であることは言うまでもないが、生徒が何に興味を持ち、鑑賞活動が進む中でどのように変化したのか、自分の感じたこと、考えたことを積極的に意見を交換できる「場づくり」の工夫をした。

22年度は、これらのことを考え、授業づくりの実践目標として、次のことを掲げた。

- ① 生徒が主体的に授業に取り組み、深く考えとともに、それぞれの考え、思いを表現したくなるような手立てや課題の設定を工夫する。
- ② 自分の構想やアイデアを適切な言葉を使って書いたり、話したりする力を育成する。
- ③ グループ学習などの学習形態を取り入れながら、学び合い活動の充実を図ることで、学ぶ意欲を高め、一人ひとりの表現力を向上させる。
- ④ 自分の考えや思いをもとに、書いたり話したりする機会を持つとともに、自分と異なる考えや新たな情報とふれあうことによって学び合いの場づくりと学びを深める指導を工夫する。

3) 美術科における授業づくりの実践

〔実践例1〕鑑賞活動における学び合い

鑑賞指導のポイントとして、どんな力を身につけさせたいのか、どんな作品を見せるのか、どんな見せ方をするのか、どんな方法で味わわせるのかということが考えられる。

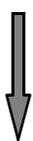
また、身に付けさせたい鑑賞の能力として、よさや美しさに気付き、感じ取る力、よさや美しさを選択する力、美術作品を味わう力（心情を感じ取る力）、表現の意図や方法の理解、日本や世界の美術の尊重と共感などが考えられる。

さらに、鑑賞作品の選定は、教師自身の感動が伴うもので、悩むところが非常に多い。生徒が親しみやすかったり、物語性があったり、時代や地域、材料、技法、主題など多様性のある作品から目的に応じて選定し、工夫している。実践例1では、鑑賞の学習活動の工夫として、学び合い活動を取り入れた。



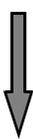
鑑賞における学び合い活動の学習過程の例

A 個人で作品を見る段階



- 直感的に 初発の思いを持つ。
全体的な印象や雰囲気をとらえる。
- 分析的に 何がどのように表現されているのかを観察する。
細かいところにこだわらず、生徒の感じたことを大事にする。

B 学び合いの段階（作品を分析、解釈する）



- a. 教師による説明
 - b. グループ、学級全体での意見交換
 - c. 調べ学習
- a b c を単独、あるいは複合した活動を行い、自分なりの解釈をしていく。

C 個人でまとめの段階

- (教師) 生徒の活動を補足し、生徒が気付かなかった情報を示したり、さらに関心を高めるための新しい資料を提示したりする。
- (生徒) 学習をふり返し、自己評価する。
学習したことによる変容を自己理解する。

【実践例2】表現活動における学び合い

デザインの学習では、表現したものを基に他者と交流し合うということが大切である。新学習指導要領においても、鑑賞会、発表会などでのそれぞれの表現のよさを味わい、認め合える場面の設定が重要視されている。自分の考えたアイデアスケッチの意見交換を通して、お互いのデザインのよさやおもしろさを話し合い、学び合う場づくりができれば、生徒主体の学びとなると考えている。

伝え合い、共有し、様々な考えや視野を深めることによって、意欲を高めるだけでなく、学ぶ意義についても理解を持たせ、学習課題に向けて高める手立てを工夫しようとした。

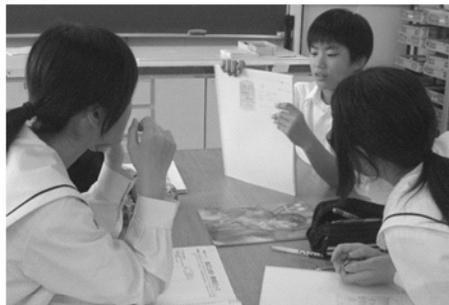
A 表現活動における言語活動の充実

- ①自分の考えや情報を、適切な言葉を使って書いたり話したりする力を育成する。
- ②自分の考えをもとに、書いたり話したりする機会を持つとともに、自分と異なる考えや新たな情報とふれあうことによって学びを深める指導を工夫する。

B 表現活動における「学び合い」の場づくり

- ①発想や言語によるイメージの広がり共有する。
- ②互いの経験や考え方を共有し、アイデアを深める。
- ③学び合いの効果により、自分の制作意図を明確にしていく。

これらは「学び合い」の場におけるコミュニケーションを介して深められる。また、グループ内で話し合うことに、批判的になることなく、建設的な意見交換をすることで豊かな発想やイメージが深まる。



班での学び合い（アイデアの共有）

第2学年B組 美術科学習指導案

日 時：平成21年7月8日（水）第4限

場 所：2年B組

指導者：長谷部 安子

1 題材名 発見！絵の魅力 伝えよう！絵の魅力

～浮世絵と西洋画（ロマン派・写実派）～

2 題材の目標

- ・美術文化に対する関心を持ち、積極的に鑑賞しようとする。また、作品の見方や味わい方を学び、よさや美しさを感じようとする。（美術への関心・意欲・態度）
- ・作品に対する思いや考えを説明し合い、見方や感じ方を広げようとする。また、感じとった考えを言葉で整理し、まとめ、表現しようとする。（鑑賞の能力）

3 指導にあたって

(1) 題材観

西洋の画法を真似て始まった江戸の風景版画は、北斎や広重らによって独自の芸術世界へと昇華した。のみならず、絵の主題や構図や色彩表現が、逆に印象派に多大な影響を与えることになる。これまでは、浮世絵版画が印象派に与えた影響（ジャポニスム）を通して、日本の美術の特徴に気付かせる題材として、この題材を指導することが多かった。

今回は、浮世絵とほぼ同時代に描かれたロマン派と写実派の作品を浮世絵と比較する鑑賞題材とした。同じテーマ「雨」、「波」でも表現方法が全く異なり、比較しやすい特徴がある。「雨」、「波」という同一テーマで作品を組合せ、提示することで、作品に対する関心を高め、鑑賞の視点を構図、色彩などについて絞ることで、作品への思いや考えを述べやすくできるものと考えた。

鑑賞対象作品

A 雨の絵	ウィリアム・ターナー 「雨・蒸気・速度」	1844	ロマン主義(イギリス)
	歌川広重「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」	1856	大判錦絵
B 波の絵	ギュスターブ・クールベ 「波」	1870	リアリズム(フランス)
	葛飾北斎 「神奈川沖浪裏」	1831	大判錦絵

(2) 生徒観

男女が仲良く、落ち着いた学習態度で授業に臨むことができる生徒集団である。意見の交流もできるが、美術の授業では意見発表する場面はこれまでほとんどなかった。

日本美術に授業でふれる機会も、今回が初めてであり、自分の思いを自分の言葉に表し、さらに人に伝え合う鑑賞活動は初めてである。鑑賞は感動であり、中学生の段階ではあまり深い知識や理解を期待する必要はないと思う。作品の大きさや、技術的な困難など、単純な驚きや好奇心の惹起から興味を持つということでもよいと思う。

視覚的情報に恵まれた時代であるが、じっくりと目の前の絵を鑑賞し、思いを深め、広める経験はそう多くはない。生徒にとって、鑑賞の楽しみを深められる機会となることをねらいとしている。

(3) 指導観

今回は2年生の鑑賞授業の導入として、言語活動を通して鑑賞することで、美術文化（特に日本美術）に対する関心を高めることをねらいとした。このねらいを達成するために言語活動が行

いやすい対象として、作品への自分の考えや思いをグループで話し合い、さらに全体で発表し合う中で、自分の考えを高め、言語活動の充実も図り、鑑賞の仕方を身に付けさせたいと考えた。

①日本と西洋の美術（鑑賞する対象：日本と西洋の美術作品）

→よさや美しさを感じ取り、日本美術に対する関心を高める。

②言語活動の充実（対象を捉えるための道具）→作品などに対する思いや考えを説明し合う。

③鑑賞する視点の選択（共通事項の選択）→（着眼点）色・形・構成の相違点・類似点

上記の3点を押さえ、題材設定を行った。

4 指導計画と評価計画

配時	過程	主な学習活動	①関心・意欲・態度	④鑑賞の能力
1 本時	課題 把握	・作品の全体鑑賞 ・本時の鑑賞授業のねらいを知る。		
	鑑賞	・個人鑑賞 ・プリントへ感想記入 ・話し合い活動（鑑賞を広げる） ・作品選び、発表原稿作り（鑑賞を深める）	作品のよさや美しさを感じ取り、自分の言葉で表現しようとしている。	作品に対する思いや考えを説明し合い、見方や感じ方を広げようとする。
1	課題 把握	・作品の全体鑑賞 ・本時の鑑賞授業のねらいを知る。		
	鑑賞	・グループごとの発表（鑑賞を広げる） ・相互評価 ・作品の説明を聞く（鑑賞を深める）		作品から感じとった考えを文章にまとめ、工夫して他者に伝えようとしている。
	まとめ	・個人鑑賞、感想記入	作品に関心を持ち、積極的にそのよさを味わおうとしている。	

※「②発想や構想の能力」「③創造的な技能」の評価は本題材では評価しない。

5 本時の学習

(1) 題材名 見つけよう！絵の魅力 ～浮世絵と西洋画（ロマン派・写実派）～

(2) 本時のねらい

- ・作品のよさや美しさを感じ取り、自分の言葉で表現しようとしている。（関心・意欲・態度）
- ・作品に対する思いや考えを説明し合い、見方や感じ方を広げようとする。（鑑賞の能力）

(3) 授業改善のための3つの視点

視点①興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

- ・学年の特徴を汲みこんだ課題設定の工夫をする。

視点②言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・鑑賞の場で造形言語による自分の感じたこと、考えたことを書いたり、積極的に意見を交換できる場を設定する。

視点③「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

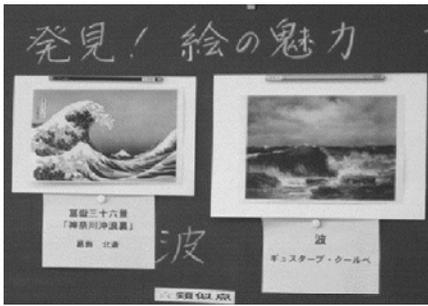
- ・個人思考の場、さらに班で思考する場でのワークシートの作成。
- ・話し合い、交流し合う学び合いのルールづくりの設定。

(4) 準備

鑑賞資料 鑑賞用作品（グループ） 鑑賞用ワークシート

(5) 本時の展開

配時	学 習 活 動	<ul style="list-style-type: none"> ・ : 指導上の留意点 ◇ : 授業改善の視点 	◆ : 観点【方法】
10	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作品をテーマ別に全体で鑑賞する。テーマを考える。 全体 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同一テーマの組合せで提示する。 ◇ 日本と西洋、同時代の作品の比較鑑賞することを知らせる。 視点① 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>課題 : 「発見！絵の魅力」</p> <p>絵の魅力をたくさん探して、言葉でまとめよう。</p> </div>			
35	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自由に作品に近づいて鑑賞し個人で作品のイメージをつかみ、ワークシートに書く。 個人 ・ グループの形になって各自の感想を発表し合う。 班 ・ グループ内の感想から、どちらの作品で発表するか話し合う。「雨の絵」か「波の絵」で選ぶ。 ・ グループの担当する絵を決める。 ・ プリントを使い、発表原稿作りをする。 ・ 発表に必要な質問を、グループの代表が聞きに行く。 ・ 発表原稿を完成し、役割分担を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 自分が感じたことを自分の言葉で表現することが大切であることを強調する。 視点② ・ 十分に見る時間と書く時間を確保する。 ・ 「どのようなところからそう感じたのか」という根拠を明らかにしていけるようにする。 ・ 発表したいという主体的な気持ちを大事にし、選ぶ絵はクラスで均等にならなくてもよいとする。 ◇ 作品の魅力の説明する際に相違点、類似点のポイントで説明できるようにする。 視点③ ・ 質問によってはもう一度グループで考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 作品のよさや美しさを感じ取り、自分の言葉で表現しようとしている。 【関 プリント 観察】 ◆ 作品に対する思いや考えを話し合い、見方や感じ方を広げようとする。 【鑑 プリント 観察】
5	<ul style="list-style-type: none"> ・ ふり返り 授業の感想をプリントに記入する。 個人 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の見方や感じ方、気づいたことについてふり返る。 	



鑑賞対象作品の比較

「発見！絵の魅力」		A組	番名前
共通のテーマ	感じたこと、気づいたこと	☆比較して相違点・類似点	
1	波や富士山が遠くまで描かれている。	相違点 波の描き方 輪郭がはっきりしている	類似点 波の描き方 遠くまで描かれている
2	雲や波の細い所まで描かれている。	相違点 油絵 輪郭がぼやけている	類似点 波の描き方 遠くまで描かれている
3	雨の線がたくさん書かれているから大雨でわかる。	相違点 油絵 雨の日はぼやけている	類似点 橋 雨の日
4	全体的に暗い絵の中に列車が写っていて列車が強張されている。	相違点 油絵 人がぼやけている	類似点 橋 雨の日

ワークシート

4) 美術科における成果と課題

成果

- ・美術科における「学び合い」は教科による特性もあり、「鑑賞」の場や作品の構想の意図や表現の工夫を話し合う場で取り入れることができた。
- ・鑑賞活動においては、鑑賞カードやワークシートを使って言語力を生かした鑑賞活動をおこなうことで、自分の考えたこと、感じたことなどを互いに伝え合うことができ、鑑賞の能力を高め合うことや言語活動の充実を図ることもできた。グループによる言語力を生かした学び合いの場面から、さらに学級全体で発表することもできた。
- ・表現活動では、参考作品や互いの構想の意図を発表し合うことで、作品の発想力や構成力に広がりを持たせ、制作の意欲につなげることができた。制作しようとする作品の主題や意図を文章で書き、人に伝え合うことで自分の作品の主題や意図が明確になり、さらに友達の表現意図を理解したり、アドバイスをを受けたりすることができている。

課題

- ・美術科における言語力を生かすためには、造形言語の習得が大切であり、くり返し日常的に造形言語を使える環境づくりをしなければならない。
- ・自分の思いを伝える力、他者の思いを聞く力を育むために、鑑賞活動の学び合いの場を設定した。「表現」と「鑑賞」は一体のものであり、「鑑賞」する力が「表現」する力に結びついているか検証するためにも、今後「表現」と「鑑賞」を一本化させた題材設定を工

夫する必要がある。

- ・鑑賞の領域では、話し合いをする中で、友達と自分の考えの共通点や相違点について考えさせ、その過程で自分ではわからなかった作品の視点に気付いたり、相違点を考える中で改めて自分の考えを明確にする場を「学び合い」の場として設定していくことが大切である。
- ・表現の構想の具体化、学んだことや感じたことの共有化、互いのよさの認め合いを大切にすると共に、自分の思いや工夫等の「ふり返りの場」をきちんと位置づける指導過程を充実させる必要がある。

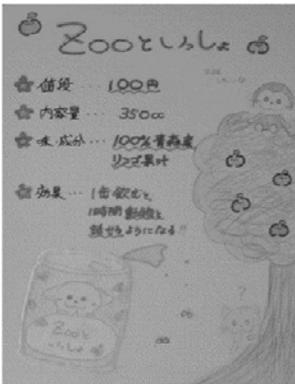
飲んだことのない夢のようなジュース（1年）



新商品ドリンク（缶の表面）



新商品ドリンク（缶の裏面）



新商品ドリンクアピールカード



新商品ドリンク発表 共有の場



班での意見交換

(9) 保健体育科の取り組み

1) 保健体育科授業改善プラン

<p>◆目指す授業の姿 生徒が各種の運動に意欲的に取り組み、技能の向上を目指して互いに学び合う授業</p>
<p>◆授業改善の3つの視点における重点目標</p> <p>視点①：オリエンテーションの充実と学習課題設定への支援。 記録カード及び学習カードを活用し、生徒の意欲を引き出す教師の適切な声かけ。</p> <p>視点②：めあての設定、活動のふりかえり、グループでの作戦の工夫。 課題解決を目指した活動の充実。</p> <p>視点③：グループ及びペア活動の充実、相互評価の有効な活用。</p>
<p>◆重点目標達成への具体的な方策</p> <p>視点①</p> <ul style="list-style-type: none">・オリエンテーションを通じて競技の特性や歴史、ルールを理解させると共に、個に応じた目標を持たせる。・記録カードを記入し、前年度からの記録の推移を観察させる。また、学習カードを適宜記入させ、技能向上の意識を高めさせる。・教師の観察を強化し、生徒が意欲を持って参加出来るような評価やアドバイスを工夫する。 <p>視点②</p> <ul style="list-style-type: none">・授業の始めと終わりにめあてとふりかえりを発表させ、それらに対する適切な批評を行う。・グループで作戦を工夫し反省する時間を確保する。・課題解決のための活動の場や時間を確保する。 <p>視点③</p> <ul style="list-style-type: none">・単元ごとに技能に秀でたリーダーを選出し、スキル向上を目指した生徒同士の学び合いの場を設定する。また、ペア活動を通してお互いの技を観察し、それに対する評価を発表し合う場を設定する。
<p>◎教科において考えられる基盤となる言語活動の場</p> <ul style="list-style-type: none">・リーダーを中心とした技能練習を行う際に、リーダーからの指示及びそれに対するメンバーとの質疑応答を行う。・グループごとに作戦を練ったり振り返りの場を設け、それぞれの課題や成果を発表する。・授業のまとめでは、感想や意見を発表する。
<p>◆重点目標の評価</p> <p>視点①</p> <ul style="list-style-type: none">・学習カード記入により、自己の目標や課題を意識して取り組もうとしている。 <p>視点②</p> <ul style="list-style-type: none">・練習方法や攻撃方法を工夫し、お互いに表現したり伝え合ったりする。 <p>視点③</p> <ul style="list-style-type: none">・学習カードを使って自己の目標や振り返りを行わせる。グループでの相互評価時でお互いの良さや課題を伝え合う。

視点① 興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を工夫する場の設定と指導法の工夫

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

2) 保健体育科における授業づくりの重点

本校では1～3年生の保健体育の授業は専任の教諭が1人で担当しているため、各領域の年間計画は全学年同じ形態をとっている。そのことは評価の上でも、生徒の発達段階に応じた成長の変化が記録を通して比較しやすいという利点にも繋がっている。また、1年次から授業のルールや各単元の基礎・基本が徹底された中で、2年次、3年次へと発展することで生徒たちも目標を掲げ意欲的に参加しやすいのではないかと見える。更に、多岐にわたった種目を3年間系統立てて取り組むことは、生涯にわたってスポーツに触れるための習慣化に繋がってくるものと思われる。生徒は、各単元によって好き嫌いが別れるが、発達段階においては多くの種目に触れることがバランスのとれた体づくりに繋がり、将来的には広い視野でスポーツを捉えて関わって欲しいと考える。

授業評価アンケートによると、84%の生徒が「意欲的に活動できて楽しい」、また、89%の生徒が「真剣に取り組んでいる」と答えていることから、ほとんどの生徒が意欲的に参加していることが伺え、逆に、やる気を失わせたくない工夫や手だてが更に求められている。逆に、「努力を認めてもらえる」という項目では74%とやや低い結果であったことは、教師側の関わりが不十分であったと反省が求められる。そこで、オリエンテーションの充実を図り単元の特性や歴史、ルールを理解させ、めあてを明確に持たせたい。また、生徒の観察をより充実し、適切な評価や声かけで生徒のやる気を引き出していきたい。そのためには、個人カードを活用し記録の推移を生徒と共に考察するシステムを作り上げていきたい。さらに、教師の積極的な関わりによって生徒への刺激も促していきたい。

21年度から指導をいただいている中京大の杉江教授から、授業の最初に本時のめあてと内容を生徒に明確に示し、最後には必ず生徒にふりかえりをさせるよう助言を受け、実践している。また、学び合いの場の設定では、単元ごとに種目が合致する部活動の生徒をグループ活動のリーダーとして、技能の向上へとつなげている。

3) 保健体育科における授業づくりの実践

【例1】運動の系統性を図るために

本校では3年間を通して同じ流れで単元を履修させていることは上記でも述べたが、1年次は特にオリエンテーションの徹底を意識して指導している。シラバスを活用し、授業に参加する心構えやルールやマナー、保健体育の目的や年間計画などを理解させることが系統的な学習を実践する上で欠かせないといえる。また、実技では基礎・基本の徹底及び定着を大きな目的に掲げている。そのため、反復練習が増え、やや各種目本来の楽しさを味わうまでには到達できないこともあるが、2、3年時で発展的な取り組み（ゲーム形式）に移行するためにはどうしても欠かせない技能であるということを理解させ取り組んでいる。

【例2】各単元、該当種目の部活動部員をリーダーに据えたグループ活動（学び合い）

本校の男子の3割がサッカー部（地域クラブ）に所属しているが、なかなか彼らの取り組みが学校活動に還元されないのが一つの課題であった。一昨年に本校野球部員をリーダーとして活かしたソフトボールでの成果を、サッカーでも是非取り入れて授業の充実を図りたいと考えた。

昨年の2年A組の場合、男子16人中7人がサッカー部員であったので、6グループを作りそれぞれに別れてリーダーを担わせた。男女混ざった1グループ5人での取り組みで、リフティング、ドリブル、トラップ、パスなどのスキル練習の講師役として練習を進めた。当初は恥ずかしがっていたが、次第に適切なアドバイスや秀でたテクニックを披露するなど存在感を示すようになった。女子生徒も積極的に質問したりスキル練習に取り組む姿が見られ有意義な活動となった。



2年：サッカーでの生徒の手本

第1学年A組 保健体育科学習指導案

日 時：平成22年6月3日（木）第5限

場 所：体育館

指導者：石橋 利一

1 単元名 バレーボール

2 単元の目標

- ・正しい服装で参加し、意欲を持って機敏に行動する。フェアプレーやコミュニケーションを大切にし、健康・安全に留意することができる。 （関心・意欲・態度）
- ・練習やゲームの仕方を工夫することができる。 （思考・判断）
- ・基本に準じた技能を駆使し、仲間と連携したゲームが展開できる。 （技能）
- ・技術の名称や行い方、ルールなどを理解し、課題に応じた取り組みができる。 （知識・理解）

3 指導にあたって

(1) 教材観

バレーボールはネットをはさみ、自陣でボールをコントロールしながら相手コートに落とすという競技である。サーブ、レシーブ、トス、スパイク、ブロック等、それぞれのプレーの連携によってゲームが成り立つので、正確な技能と選手同士のチームワークが求められる。

(2) 生徒観

非常に活発で意欲的に取り組むクラスである。どの生徒も無邪気で男女の隔てなく仲がよい。女子はグループごとに偏るムードもなく、誰とでも協力できる良い雰囲気で取り組んでいる。

生徒は、小学校時にボール運動の中でバレーボールを教材化し、ネット型のゲームに取り組んでいる。その際、ルールを工夫したり、チームの特徴に応じた作戦を立てたりして攻防を展開できるようにすることをねらいとした学習をしている。

(3) 指導観

中学校では、ボールを落とさないという大原則のもと、正確なパスやレシーブの徹底を図っていききたい。地味なプレーであるが、「ラリーを楽しむことが出来るゲーム」に発展させるには大変重要な技能であることを理解させ、技能習得に時間をかけていきたい。一般的に取りかかりに遠慮しがちな女子については、反復練習を多く取り入れることでボールへの恐怖心や嫌悪感を払拭させると共にボールへの執着心を持たせ、皆でボールを追う一体感を味わわせたい。

これまでに経験のない競技であるため、グループを基盤とする活動を中心に行い、お互い「励まし合い」、「高め合う」場面を多く設け、技能の習得を目指していきたい。

4 指導及び評価計画（総時数8時間）

次	学習内容	評 価				評価方法	
		関	思	技	知		
1	オリエンテーション① ・特性やルールの理解 ・学習の進め方・グループ分け	◎				・特性や歴史に興味を持ち、進んで学習しようとしている	行動観察
2 本時	・ランニング、補強運動など ・基礎的な技能の練習① ・正しいフォームの習得	◎		◎		・意欲をもって機敏に行動しようとしている ・正しいフォームを身につけようとしている	行動観察

3	・ランニング、補強運動など ・基礎的な技能の練習② ・正しいフォームとパス練習		◎	◎	・前時で学んだフォームを思い出し、実際にパスやレシーブを行うことができる	行動観察
4	・ランニング、補強運動など ・基礎的な技能の練習③ ・パスとレシーブの連続		◎	◎	・これまでに習得した技能を活かし、正確なパスやレシーブを続けることができる	行動観察 記録
5	・ランニング、補強運動など ・基礎的な技能の練習④ ・レシーブだけのゲーム		◎	◎	・試合やゲームの仕方について言葉で伝えて いる ・習得した技能を活かしてできる。	行動観察
6	・ランニング、補強運動など ・基礎的な技能の練習⑤ ・サーブとサーブレシーブ		◎	◎	・既習の技能練習を工夫して行うことができる ・サーブを相手コートに届かせることができる ・サーブを正面でレシーブすることができる	行動観察
7	・ランニング、補強運動など ・基礎的な技能の練習⑥ ・サーブとサーブレシーブ		◎	◎	・既習の技能練習を工夫して行うことができる ・サーブを相手コートに届かせることができる ・サーブを正面でレシーブすることができる	行動観察
8	・ランニング、補強運動など ・基礎的な技能の練習⑦ ・アタック練習 ・ミニゲームを行う		◎	◎	・既習の技能練習を工夫して行うことができる ・基本的なアタックのやり方を習得する ・これまでに習得した技能を駆使しゲームに参加 できる	行動観察

5 本時の学習

(1) 題材名 バレーボールの基礎的な技能の練習をしよう

(2) 本時のねらい

- ・意欲的をもって機敏に行動しようとしている。 (関心・意欲・態度)
- ・正しいフォームを身につけようとしている。 (技能)

(3) 授業改善のための3つの視点

視点① 興味関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

- ・きめの細かい指導を心がけ、積極的に生徒を使ったデモンストレーションを行う。
- ・簡単な技能のテストを行い、成就感を味わわす。

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・グループごとに、技能習熟度の相互評価を行う。

視点③ 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫

- ・ペアやグループ活動を通じて、お互いの良いところや課題について意見交換させる。
- ・振り返りで仲間の意見を聞き、次時の参考にさせる。

(4) 準備・資料など ボール

(5) 本時の展開

配時	学習活動および形態	・：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点	◆：観点【方法】
10	・あいさつ ・本時の確認 ・ランニング・体操 ・補強運動	全体	・本時の目標を確認させ、積極的な参加を促す

35	ボールに慣れる ・様々なボール遊び	個人 ・指先や手首のしなやかな感覚を身につけさせる。 ◇生徒にデモンストレーションを行わせ、意欲の向上を図る。 視点①	◆関心・意欲・態度 意欲をもって機敏に行動しようとしている 【観察】
本時の課題 パスとレシーブの正しいフォームを身につけよう			
正しいフォームの師範 全体 ・パスとレシーブのフォームを真似る ・ペアに分かれ練習 ペア ・グループごとに練習の成果を発表する グループ		◇きめの細かい指導を徹底。 視点① ・技能定着のポイントを分かりやすく説明する ◇各グループの発表を観察する。 視点③	◆技能 正しいフォームを身につけようとしている 【観察】
5	・振り返り 全体 ・次時の予告・あいさつ	・本時の反省を各グループ代表が発表する。 ◇自分たちだけでなく他のグループの成果についても感想を述べさせる。 視点②、③	



1年：バレーボールでのレシーブの基本練習

4) 保健体育科の成果と課題

成果

- ・22年度は「各種の運動に意欲的に取り組み、技能の向上を目指して互いに学び合う生徒」を目指し、授業に臨んでいる。21年度の総括を踏まえると同時に新学習指導要領の改訂に合わせて授業改善プランを立て、更なる質の向上を目指した。
- ・オリエンテーションの中で競技の特性や歴史、ルールを学習し、さらに徹底させるため、学期末テストの問題として取り入れることで生徒の認識を深めることができた。また、前年度の記録を参考に個々の目標を持たせることで生徒たちは具体的な記録を目標として技能の向上に取り組むことができた。
- ・陸上競技では雨天が多くほとんどが器械体操に振り替えられたのだが、生徒はそれぞれに目標を掲げ真面目に取り組んでいた。壁倒立やロープ登りでは毎時間記録をカードに書き、記録向上を目指し、少しずつであるが全体的に向上が見られた。
- ・マット運動ではグループ活動を中心に技能練習を進め、技のできばえを批評し合い、さらにはお互いに補助などをして技の完成を目指して取り組むなど「学び合い」の場面が多くもたれた。
- ・バレーボールでは2、3年生は男子部員が中心となってグループ練習を進めた。さすがに男子は技能習得が早く、2年生では9人制のゲームが成立しラリーが続いた。更に3年生では6人制のゲームが行われ、強いサーブが打たれ、さらにスパイクやブロックなどラリーが繰り広げられ、かなりハイレベルな試合となった。バレー部を中心に攻撃パターンや守備位置が話しあわれ、課題解決に向けて真剣に意見を發表し合う姿が見られた。
- ・一昨年はサッカー部（地域クラブ）、昨年からは野球部、今年度からはバレー部をリーダーとした学び合いを進めてきた。その結果、生徒相互の学び合いやコミュニケーションの場が確実に増え、活発な生徒中心の活動が見られるようになった。

課題

- ・近年は特に女子の中での意欲や能力の格差が目立つようになり、授業でもその差の埋め合わせに苦勞することがあった。陸上競技や器械体操など個人の取り組みが主な種目はあまり弊害はないが、バレーボールのようなチームワークや連係プレーが求められる種目では、目立った。1年生は未熟ながら純粋に一生懸命取り組むのであるが、2年生になるとボールを痛がって意欲的にボールを追わない生徒が増えてきた。周囲を気にする雰囲気が目立ち、教師が意図する一方、前述したバレーボール像に逆行するかたちとなった。3年生になるとそれはさらに増幅していた。今回の研究目標とは離れた「技能差」、「能力差」、「意欲差」をどう克服するかが新たな課題として浮上している。このように女子の格差をどのように埋めていくかが、今後の体育授業をより充実させる重大な鍵となっている。

(10) 特別支援教育 知的障害特別支援学級の取り組み

1) 知的障害学級における授業づくりの重点

在籍生徒は2年女子1名である。誰にでも気軽に話しかける明るい元気な生徒である。2技能教科と総合等を交流授業で行っている。交流で仲間と共に活動する中で、中学校生活や対人関係のあり方を学び、将来に向けて自立した生活を送る力や社会生活に適応できる力の育成を目指す。学習面では、生徒の能力に応じて、繰り返しやスモールステップで社会生活に必要な基礎学力の定着を目指す。そのために、学習への意欲化を図り、未経験のことや少し面倒な課題にも挑戦する気持ちと個々の課題をやり通す力を育成する。

2) 授業改善の視点と具体的な方策

生徒の特性から、具体的な方策として、まず学校生活や授業のルール、対人関係の在り方の指導に重点を置いた。また、自分の感情をコントロールできるよう、持続力を要する作品製作や活動を多く取り入れた。支援学級での授業では、「すべきこと」を先に取り組んでから「したいこと」にかかる、一つのことを終えて次に移る、ということを意識させ、集中できる時間を延ばした。また、「できること」は自力で行えるようにし、精神的自立を目指した。

交流授業や交流の場面では、周りの状況を見て、意欲的に取り組もうとするので、支援しながらできるだけ同じ活動を行い、達成感を得られるようにした。分からないことがあれば手を挙げて支援を求めさせた。また、相手の気持ちや周囲の状況に応じた態度や言葉づかいを実践的に指導する場とした。

視点①：興味関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

- ・生徒の興味と能力を知り、題材と活動方法を工夫する。
- ・授業の目当てと活動の見通しを持たせる。
- ・視覚に訴えるもの、ゲーム的要素、実生活と関連した形を取り入れる。

視点②：相手の言うことや思いを理解し、自分の意思を表現するための態度や語彙力を育成する。

- ・Q and A方式の対話、物語の聞き取り、友達の作文や手紙の鑑賞をする。
- ・詩、絵本、物語等の音読をする。
- ・手紙、ふり返り、一言日記等で「書く力」と「発表力」をつける。

視点③：生徒の学習における主体性や持続力を育成する。

- ・生徒が得意とする活動、自力でできる形式を取り入れる。
- ・生徒が自ら選択や決定する場面を入れ、最後までやり通すことができるよう支援する。
- ・小さな目標とふり返りで積み重ねていく。

第1学年やまなみ1学級 国語科学習指導案

日 時：平成21年9月17日（木）第4限

場 所：やまなみ1教室

指導者：宮川 澄子

1 単元名 報告書を作成して発表しよう

2. 単元の目標

- ・写真に興味を示し報告書作成や発表練習に意欲的に取り組む。 (関心・意欲・態度)
- ・教師の発問に答えることができる。 (話すこと・聞くこと)
- ・簡単な文をつくることや、正しく書き写すことができる。 (書くこと)
- ・単語や文節で区切って、聞き取りやすく読む。 (読むこと)

3. 指導にあたって

(1) 題材観

「総合的な学習」の一環である「ふれあい体験」で、興味ある職業について課題と質問を用意し、夏休みに、実際に出向いてインタビューを行っている。2学期は、そのインタビューの結果を新聞形式に仕上げる。生徒は、いしかわ動物園でのインタビューや施設見学を楽しく行えたので、見たことや気持ちは話せそうである。そこで、特別支援学級の交流発表会もあるので、発表形式の形として仕上げることも平行して行うことにした。構成や説明文作成は支援を要し、説明文を書き込む作業も根気を伴う。しかし、他の生徒と同じ活動であることや、「発表」を目標にすることで、比較的根気よく取り組めると考える。予行演習として、交流クラスでも発表することを目標にした。

(2) 生徒観

語彙は豊富ではないが、人との関わりを求めて誰にでも親しく話しかけていく。興味や関心が移りやすく取りかかりに時間がかかる。ひらがな、カタカナはほぼ読めるが、書く時にはスムーズに文字が浮かばないので、思いや書きたいことを文にするには困難を示す。しかし、一言日記や振り返りなどで少しずつ文を書けるようになってきている。写真という視覚的な情報を与えることで、生徒は興味を持ち、よく話してくれるのではないかと思われる。書くことには時間はかかるが、手紙や発表のような相手を意識できる目的があると生徒自身も意欲的に取り組めた。発表練習をしっかりと行くと、人前でも自信をもって発表でき、達成感を得ていた。

(3) 指導観

これまでも「春の野外観察」や「オタマジャクシの観察」「自主活動プラン」など、写真や絵を使って簡単な発表や観察記録の制作をやってきた。今回のように長い発表文を作るのは初めてであるが、写真をもとに、できるだけ生徒から言葉を引き出し、文をつくることや書くことを支援したい。毎時間最後にできたところまでを発表することを目標にして、1時間の中に、話すこと、書くこと、発表、と活動に変化を持たせ、最後まで取り組ませたい。

4 指導計画（総時数7時間）

一次	1時	単元目標や活動を見通す。	写真をもとに、報告書のながれ、発表の順番を考える。模造紙に発表順に タイトルを書く。写真をはる。
二次	4時 (本時2/4)	各写真の報告文をつくる。	各写真について、報告文をつくる。発表用原稿に書き写す。
三次	1時	報告文を読む。	発表練習をする
四次	1時	発表する。	交流クラスで発表する。

5 本時の授業（第二次第2時）

(1) 教材名 ふれあい体験の報告文を作ろう

(2) 本時のねらい

- ・ 個々の写真について教師の問いにいろいろ答えることができる。 (聞く・話す)
- ・ 説明などの文を、正しく書き写すことができる。 (書く)

(3) 授業の3つの視点

視点① 興味関心を高め、参加への意欲を引き出す工夫

- ・ 本時の活動の見通しやねらいを明確にする。
- ・ 写真という視覚的情報を活用する。

視点② 相手の言うことや思いを理解し、自分の意思を表現するための態度や語彙力を育成する。

- ・ いろいろな発問をして生徒から言葉を引き出す。
- ・ 板書されたことを正しく書き写させる。

視点③ 生徒の学習における主体性や持続力を育成する。

- ・ 復習を自分でできる形にする。
- ・ 生徒の得意とする発表形式を取り入れる。

(4) 準備・資料等

写真、模造紙、ワークシート

(5) 本時の展開

配時	学習活動および形態	・ : 指導上の留意点 ◇ : 授業改善の視点	◆ : 観点【方法】
5分	・ 挨拶と復習 漢字の絵カードを使って読みを自分で発表する。	・ 大きな声で挨拶する。 ◇好きなカードと枚数を選ばせる。 【視点3】 ・ 忘れたら関連ある語を教える。	
40分	・ 前時までの写真を貼った模造紙を見て今日の授業の目当てと流れを知る。 ・ 写真を見てその時の様子を思い出す。	・ 本時の最後に出来たところまでを発表することを伝える。 ・ 活動の流れを黒板に貼る。 話す→書く→読む・発表 ◇黒板に4枚の写真を掲示し見通しを持たせる。 【視点1】	
<p>本時の課題 それぞれの写真の報告文を作ろう。</p>			
	・ それぞれの写真について先生の発問に答える 【話す】 ・ 相手に伝わる文にすることを考える。	◇具体的なことや思ったことを生徒から引き出しながら板書する。 【視点2】 ・ 文にならない時は生徒の単語から文にして板書する。	◆聞く・話す 個々の写真について教師の問いにいろいろ答えることができる。 【観察】

	<ul style="list-style-type: none"> ・板書を見て、それぞれの写真の報告文をワークシートに書く。 書く ・できたところまでの報告文を読んで参観者に聞いてもらう。 読む 	<ul style="list-style-type: none"> ・書き写しが難しそうなら短い簡単な文にする。 ◇間違いをおそれず大きな声で読むことをすすめる。 視点3 	<ul style="list-style-type: none"> ◆書く 板書された文を正しく書き写すことができる。 【ワークシート】
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・ふり返りをする。 ・次時の活動を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・好きなキャラクター「ポニョ」の顔を使い、自己評価させる。 	

3) 成果と課題

交流授業での成果

生徒は、友達と同じ事をしたい気持ちから、難しい課題や長い時間を要する作品制作にも根気強く取り組んだ。また、みんながメモをとる場面では自分も一生懸命に何かを書き、気になる友達が勉強していると自分も勉強し始める、等の姿勢が見られた。友達のやっていることは未経験のことであり尻込みせず取り組むようになった。対人関係のトラブルも、その都度指導することで減り、少しずつ友達の気持ちが分かるようになってきた。また、担任が移動教室前で待ち、生徒自ら準備し一人で来るなど、自立的な行動が取れつつある。交流は生徒にとって不安や我慢しなければならないことも多いが、精神的成長につながったと言える。

特別支援学級での成果

生徒の「できること」「できないこと」を把握することによって、支援を考えた。生徒は、学級における自分の役割や仕事を毎日こなし、授業でも「すべきこと」ができるようになってきた。特に、学習の目標が実践的であると、意欲的に取り組む。またゲーム感覚や作業と組み合わせると、苦手な数学も積極的に行い後のプリントもよくできていた。生徒が自力でできる計算練習や漢字の読みはスムーズに取り組み、集中して自力で行える時間が少しずつ長くなった。毎日の一言日記と「ふり返り」で「書くこと」に少しずつ抵抗がなくなり、小さな字で学級日誌や予定を書き続けている。今は関心あることには自力で短い文を3～4文書けるようになり、生活面でも幼稚さが取れてきた。中でも、今年職場体験で2日間同じ仕事を根気よく行えた事は大きな成長である。

課題

2年になり、交流授業で徐々に難しい課題が増え、生徒自身が困難を多く抱えるようになってきた。友達と一緒に活動したいが、分からないことやできないことも増えてきて、達成感を得る機会が減ってきた。そのため、できることでも少し面倒だと、直ぐ諦めてしまう。今後、生徒の努力が他から認められる機会を設けたり、体験活動を通じた学習を多くするなどして、自信をつけ、学習への意欲化を図りたい。また、思春期に入り、情緒の揺れも出てきたので、対人関係においても適切な言動がとれるよう指導していきたい。



発表の様子

(11) 特別支援教育 自閉症・情緒障害特別支援学級の取り組み

1) 自閉症・情緒障害特別支援学級における授業づくりの重点

2年生の男子1名の学級である。性格は明るく活発で行動的であり、友人に対して寛容で思いやりの心がある。学習や部活動には意欲的に取り組んでいる。集団でも抵抗なく学習に入ることができること、高校への進学希望から可能な限り交流授業に入っている。適切な支援のもとで級友と学び合いができることを目標としている。不得意な分野や難しいと思われる内容は、やまなみ学級の教室で個別で指導する教育課程となっている。個別で指導する際には、自己有能感の促進による学習意欲の高まり、書いたり話したりするコミュニケーション能力の向上、規律ある学習態度を目指して以下のような重点目標を設定している。

2) 授業改善の視点と方策

視点①授業へ意欲的に取り組み、課題に対して自信が持てる工夫をする。

- ・写真・図・実物・視聴覚教材等を活用し、自然事象のイメージ化により学習内容の理解を進める。
- ・前時に学んだ重要用語の意味やその定義を復習する。
- ・課題や目当てを明確に示し、学習の見通しをもてるようにする。

視点②理解できたことを自分の言葉で説明することで、自分を表現する場をもつ。

- ・文を書く際には、文例、書き出し・結びなどをワークシートに用意し、生徒本人の言葉を引き出せるようにする。
- ・生徒から考えを聞き出し、発言を文にまとめる。

視点③規律を守る力の育成。

- ・授業の挨拶、服装、時間等の遵守に対する支援の声かけを行う。

3) 成果と課題

成果

やまなみ2では授業の半分は交流で行い、残りは個別の学習という形態で行っている。交流の授業もほとんどの教科で一緒に出て隣で支援している。本人の意欲的な姿勢や家庭からのあたたかい協力も大きな力となり、これまで大きな不安もなく学校生活を送ることができた。

課題

自分で言語化する課題には、理解していてもうまく言語化できなかつたり、決まったやり方にこだわって柔軟に別のやり方にいけなかつたりするという課題も見られる。自分の考えたことを言語化する学習や活動の中で、自信をさらに高めたい。

また、1日の中で担任と関わる時間が長いことで、教師が思い込みによってつい生徒のことをわかつたつもりになることがあるので、生徒の状態や気持ちを先入観なしでしっかり受けとめ、課題の提示や解決の過程での支援や配慮を吟味していきたい。

さらに、将来必要になってくるコミュニケーション能力を高めるためには、交流の授業や学校行事、他校の学級との関わりといった様々な場を利用することで、より多くの人と関わり、自分の思いをうまく表現できるように支援していきたい。その中で、どのようなタイミングで支援するか、教師が本人や他生徒と普段どのように関わるかが非常に重要となる。生徒の状態配慮し、支援の仕方や関わり方を振り返りながら、生徒の能力を高めていく実践が必要である。

第2学年やまなみ2学級 理科学習指導案

日 時：平成22年6月3日(木) 5限目
場 所：やまなみ2教室
指導者：西辻 英恵

1 単元名 電流の利用

2 単元の目標

- ・電気器具のはたらき、消費電力、磁石による現象、発電機のしくみに興味をもち、進んで調べようとする。
(自然事象への関心・意欲・態度)
- ・電気器具のW数による発熱の違い、磁石のまわりの磁界、電流がつくる磁界の規則性、コイル内の磁界、モーターのしくみ、発電機のしくみについて説明することができる。
(科学的な思考)
- ・電流が磁界から受ける力を調べる実験、コイルと棒磁石で電流を発生させる実験ができる。
- ・電力、電力量、熱量を正しく表現できる。
(観察・実験の技能・表現)
- ・電力や電力量、発生する熱量、電流がつくる磁界、コイルが受ける力、誘導電流について理解し、知識を身につけている。
(自然事象についての知識・理解)

3 指導にあたって

(1) 教材観

実際に実験を行って法則を見つけ出すのが主となっている単元である。前半では電力や電力量など計算が多いので、丁寧に計算練習をする必要がある。その際、オームの法則と混乱しないように比較・整理しながら計算練習をするよう注意する。本時もふくめた後半は、積極的に実験を行えば、実験結果や法則性を体感できる内容である。電流のはたらきによる科学事象への意欲を高め、実験への積極的参加ができるようになれば思考や理解が飛躍的に伸ばせる単元である。

(2) 生徒観

小学校で行った回路の実験は強く印象に残っている。電気実験への関心は高く、自主的に活動でき、自然事象の理解は高く、具体的数字から規則性を見いだすのは得意である。実験結果・考察の記録や表現では、視覚的にあきらかにとらえられた事実は記録できるが、自分の言葉で文を作るのは苦手とするところがある。文で実験結果・考察を書く場合は、文例を示したり書き出しを指定したりするという工夫があるとよい。

(3) 指導観

比較的安全な実験が多いので、実験器具を使って操作法や法則性を体感することを多くしていく。小單元ごとにいうと、電力や電力量の計算は中学校できちんとできるようにする。磁界の向き・強さについては、小学校で学んだ電磁石の基礎を復習しながら、知識を身につけられるようにする。そのあと、定性的な電流・磁界・力の関係の扱いに慣れられるよう導きたい。

4 単元の指導・評価計画(総時数10時間)

次	小単元名 及び目標	主な学習活動	①自然事象への 関心・意欲・態度	②科学的な思考	③観察・実験の技能 ・表現	④自然事象につ いての知識・理解
電 流 と そ の 利 用	電流のはたらきを調べてみよう(3)	電気器具のはたらきや電力、電力量の計算法を知る。	電気器具のはたらきや電力、電力量に興味をもち進んで発表できる。	W、Jについて説明し、使いこなすことができる。	電力、電力量、発熱量を正しく表現できる。	電力、電力量、発生する熱量を理解し、知識を身につけている。
	磁石のまわりにはたらく力(3)	磁石による現象や電流のまわりの磁界について調べる。	磁界に興味をもち、すすんで調べようとする。	磁石の磁界、電流がつくる磁界の規則性について説明することができる。	磁石や電流のまわりの磁界の向きを、方位磁針から調べることができる。	磁石や電流の磁界について理解し、知識を身につけている。
	なぜモーターは回るのか(2)	磁界の中で電流を流すと導線はどんな力を受けるか調べる。		実験結果から、電流が磁界から受ける力の向きや大きさの規則性を見いだせる。	回路を安全かつ能率的に組み立てることができる。	
		コイルの動く向きや大きさの規則性を理解する。		モーターが回転するしくみを説明できる。		コイルが受ける力は電流や磁界に関係することを理解している。
発電機のしくみはどうなっているのか(2)	発電機が電流を発生するしくみについて調べる。	発電機のしくみに興味をもち、進んで調べる。	実験結果から電磁誘導の規則性を見いだすことができる。		誘導電流は磁石やコイルの巻きに関係することを理解している。	

5 本時の授業(第3次第1時)

(1) 単元名 なぜモーターは回るのか

(2) 本時のねらい

- ・実験結果からコイルが受ける力の向きや大きさの規則性を見いだせる。 (科学的な思考)
- ・回路を安全かつ能率的に組み立てることができる。 (観察・実験の技能・表現)

(3) 授業改善のための3つの視点

視点① 興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫

- ・振り返りや実験方法の説明の際、写真・図・実物を提示する。
- ・課題を明確に示し、学習の見通しをもてるようにする。

視点② 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場の設定と指導法の工夫

- ・考えたことをことばとして表せるようワークシートの図や選択肢を工夫する。

視点③ 規律を守る力の育成

- ・始まりと終わりのあいさつをしっかり行い、授業への心の切りかえ、志気の高揚、学習した充実感をもてるようにする。

(4) 準備・資料等

U字型磁石、コイル、木の棒、電流計、電源装置、導線、抵抗器、スタンド、写真・図・課題等のカード、ワークシート

(5) 本時の展開

配時	学習活動	・：指導上の留意点 ◇：授業改善の視点	◆観点【方法】
導入 10	・始まりのあいさつを行う。 ・電流のまわりに磁界ができたことを振り返る。 ・モーターは磁石とコイルからできているという説明を聞き、動く向きや速さについて考える。	◇元気で規律ある態度であいさつし、授業への志気を上げる。 視点③ ・振り返りや仮説を進めやすいように、実験の写真・図等を見せる。 ◇仮説を言葉にしやすいような図や選択肢のあるワークシートを準備する。 視点②	
展開 課題把握	・今日の課題と学習内容を知る。	・「今日の課題」を書いた画用紙を黒板に掲示する。 ◇本時の課題を知り、見通しをもてるようにする。 視点①	
開 30	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> 磁界の中で電流が受ける力の向きや大きさを調べよう </div> ・「実験6 電流が磁界から受ける力を調べよう」の実験を行う。 ・実験結果をワークシートに記録する。	・実物や写真を交えながら実験方法を説明する。 ・はじめにやってみせて、実験の具体的操作を示す。 ◇視覚的に実験の流れを示し、首尾よく操作ができるようにする。 視点①	◆観察・実験の技能・表現 回路を安全かつ能率的に組み立てることができる。 【行動観察】
まとめ 10	・実験結果から、磁界の中の電流が受ける力の向き、大きさの規則性についてまとめる。 ・終わりのあいさつを行う。	・まとめ方に戸惑っていたら、簡潔にまとめるよう助言する。 ◇あいさつをすることで1時間がんばれたか振り返る機会とする。 視点③	◆科学的思考 実験結果から力の向きや大きさは何に関係するか考えることができる。 【ワークシート】

2. 人間関係づくり

(1) 学級づくりの取り組み

1) 学級づくりの目的

本校は生徒数214名、一小学校から一中学校という校区である。そのため、友人関係がともしれば固定化される傾向が見られた。それが学習集団の基礎である学級、学年の集団の人間関係へ影響を及ぼす場面も見受けられた。

しかしながら、中学校時代は生徒一人一人が自己を確立していく時期であり、小学校時代の人間関係とは大きく異なってくるはずである。思春期での発達段階を踏まえ、生徒相互の関わり合いや信頼関係が築かれ、安心して学習活動が展開できるような集団づくりを積極的につくっていかねばならない。教師が協働して学校生活の基盤となる学級集団づくりにおける実践力を高めることが重要であると考えた。

2) Q-Uの活用

集団の状況を把握する一つの手がかりとして、本校では20年度から「楽しい学校生活を送るアンケートQ-U」（以後Q-U）を年間2回（6月、11月）実施してきた。その実態からの分析を学級づくりの課題として活用してきた。

不登校や不適応を防ぎ、生徒一人一人の学級満足度を高めるための予防開発的な教育相談、学級経営のあり方について検討するため、下記のように取り組みを進めてきた。

- ① 学級の状況を客観的な視点で把握するためにQ-Uを行い、結果を学年会で分析する。また生徒指導部会（教育相談担当、養護教諭、スクールカウンセラーも含む）でも検討する。
- ② 分析をもとに担任を中心に学年会で検討し、各学級にとって効果的な方策を模索していく。（学級分析シート）各教科での支援については職員会で報告する。
- ③ さらに生徒のルールやリレーション作りに効果的であると考え「ソーシャルスキルトレーニング」「構成的グループエンカウンター」は各学級で共通に実施する方策とする。
- ④ 1度目（6月）の結果をもとに学級分析を行い、2度目（11月）の検査でその変容を確認する。

3) Q-Uの考察

本校の現状分析

- ・全般に落ち着いた生徒集団であり、学校行事、生徒会行事等にも積極的に参加することができる集団と言える。Q-Uの結果を分析すると、各学年、各学級の多少の差異はあるが、本校全体の特徴として、どの学級も非承認群の生徒が全国平均を上回る傾向である。

（平成20年6月～22年6月調査）

- ・学級生活不満足群にプロットされた生徒が、数ヶ月後に非承認群に移動する傾向も本校のデータから読み取ることができる。学級に嫌なことはないが、何となく楽しくない子どもたちが非承認群に含まれている。（平成20年6月～21年11月調査）

4) 学級づくりの課題

- ・現状分析から学級集団のリレーションづくりに今後も心がけることは必須である。また、個々の生徒にとって承認される「場づくり」を個別に配慮しながら、対応すべき課題である。それは授業や学級のみではなく、学年や学校行事、特別活動、部活動の学校教育活動全般に広く渡るものである。職員の情報の共有化と支援の具体化が今後も大切である。これが

不登校抑止につながることはいうまでもない。

- 学級の分析を学年で検討し、さらに教科担任と連携しながら、「学び」の意欲に結びつけていくには下記の学級分析シートを学年会で十分に協議する必要がある。学級担任の思いが教科担任へ伝わり、生徒の学びの意欲に結びつくように教師側の協同の意識の統一が望まれる。
- 学級での出番・役割を設定し、できたことに対して承認することを通して自己肯定感を高め、学級での活動の活性化を一層図りたい。

学級分析を「学び」の意欲に結びつけるために 年 組

①学級の問題と感じていること

②学級内で他の生徒に影響力（正負両面で）の大きい生徒（氏名と簡単な説明）

③態度や行動が気になる生徒（氏名と簡単な説明）

④特に学習意欲が低いと感じる生徒（氏名）

⑤話し合いや教え合いの場で消極的だと感じる生徒

⑥「満足群」以外に位置された生徒に共通する特徴と、向上への対策

「非承認群」：率先して行動をするタイプではない。

「侵害行為認知群」：自分の考えを表に出さない。

「不満足群」：クラスの中で自分を出し切れていない。

⑦ 担任としての方針

⑧各教科の取り組み（①話し合い活動 ②支援が必要な生徒への配慮）

○教科名

○教科名

学級分析シート

(2) ライフスキルの実践

1) ねらい

一昨年度より、人と人とのふれあいを大切に活動や、社会性を養う活動を積極的に取り入れた。それは生徒の中に、人とのつきあい方が分からない、人間関係に悩んでいる、などコミュニケーションに関する問題が多くなってきているからである。現代、情報メディアの発展と携帯端末によるコミュニケーションの変革により、地域や家庭の交流、ひいては社会そのもののコミュニケーションが変化してきている。人と人が直接ふれあう機会が減ってきた今、もはやコミュニケーション力を知識や技能として身につけていかなければならないのである。指導教材に「ライオンズクエスト『思春期のライフスキル教育』プログラム」を取り入れ、生徒全員が学習を深められる体制を整えた。

2) 主な実践

- 平21年7月30、31日 ライオンズクエスト
「思春期のライフスキル教育」プログラムワークショップを受講
(教頭・石橋・齊藤・石田・藤田)
- 平21年10月15日 1、2年総合的な学習において
「心の成長と感情のコントロール」の公開授業
(2年A組：湯浅 1年B組：齊藤 3年B組：石橋)
- 平22年4月21日 3年学活において
「目標設定し成長する」「20年後を夢見て」の公開授業
(3年A組：木田 3年B組：田原)

3) 授業記録 (授業指導計画 2年A組 指導：湯浅有紀)

- 単 元 名 心の成長と感情のコントロール
- 本時の学習 ある状況に出会ったとき、どうすればそれを肯定的に受け止め、対応できるかを学ぶ。
- 目指す学習成果 ・物事の受け止め方がいかに行動に表れるかを述べることができる。
・困難で否定的に受け止めがちな状況に対し肯定的に対処する方法を知る。

流れ	学 習 内 容
エネジヤイザー(5分)	<天気キャッチボール> 新聞紙を丸めたボールを投げる。もらった人は別のの人に投げる。5、6人回ったら、ボールを先生の所に戻す。ボールが回った順番に今の気持ちを天気で表現する。
導入(3分)	今日の言葉を掲示「できると考えるにせよ、できないと考えるにせよ、あなたはその通りの人になる。ヘンリー・フォード」 ・何を意味しているか考える。 ○物事を肯定的に受け止めることから始める(自分はきっとできると考えて始める)と、私達は熱心に取り組み、目標に到達できることが多い。 物事を否定的に受け止めることから始める(自分にはできないと考えて始める)と、私達は努力もしないでやめてしまうことが多い。
情報とスキル(15分)	状況例を考えることで、受け止め方によって行動が変わることを知る。 状況例 水泳にチャレンジしているが、なかなか泳げない

	<p>否定的に受け止めた場合</p> <p>例：練習しても泳げない。私はダメだ。 →落ち込んで練習をやめてしまった。</p> <p>肯定的に受け止めた場合</p> <p>例：練習すればもっと上手になるかもしれない。誰でも最初は泳げなかったのだから。 →得意な友達に教えてもらおう。そして練習を続けよう。</p> <p>○否定的な物事の受け止め方は消極的な行動を、肯定的な物事の受け止め方は積極的な行動を導くことを知る。</p>						
活動(22分)	<p>3人ずつのグループに分かれる(司会係、発表係、道具係)。 各グループに状況カードをもとに、否定的と肯定的な受け止め方、消極的と積極的な行動がどうなるかを話し合い、模造紙に書く。 司会係はグループの話し合いの司会をする。 道具係に模造紙とペンを取りに行く。 状況カード例：試合のチャンスに得点を決められなかったので負けてしまった。 大会当日レギュラーが欠席してしまい、全く自信のない補欠のあなたが出場することになった。 多くの友達が持っているゲーム機を買うことができない。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td>状況</td> <td>○○……</td> </tr> <tr> <td>否定的な受け止め方</td> <td>消極的な行動</td> </tr> <tr> <td>肯定的な受け止め方</td> <td>積極的な行動</td> </tr> </table> <p>模造紙の書き方→</p> <p>発表係が中心となり、グループごとに発表する。</p>	状況	○○……	否定的な受け止め方	消極的な行動	肯定的な受け止め方	積極的な行動
状況	○○……						
否定的な受け止め方	消極的な行動						
肯定的な受け止め方	積極的な行動						
まとめ(5分)	振り返りシートを書く						

4) ライフスキルの成果と課題

成果

授業での学習場面を通して生徒一人一人がクラスメイトと交流し、より深くコミュニケーションについて考えることができた。ライフスキル学習で学んだ手法は日常でも役立てることができるので、生徒には機会を見つけて活用してもらいたい。

職員は研修により学級で指導する力がつき、ソーシャルスキルの大切さや必要性を実感することができた。職員全員が研修を受けたことで学校としての指導の方向性が一致し一体感が生まれた。コミュニケーションを上手にとってもらいたいという思いが生徒へ伝わり、生徒会活動のいじめ防止活動に発展した。



ライフスキルでの学び合い

課題

ライフスキル学習や構成的グループエンカウンターやアサーショントレーニングは対象となる生徒や集団の性格によって取り組み方が変わってくる。実際の生徒の反応や変化がどのように出てくるか検証し、今後の取り組み内容や時期を精選していきたい。

(3) 道徳を中心とした心の教育の推進

1) 取り組みの内容

道徳教育は、学校の教育活動全体を通して行い、道徳的価値観に基づいた人間としての生き方を身につける大切な教育である。道徳の時間は、自分自身を見つめ、他を受け止め、自然や美しいもの、生命に対する畏敬の念をもち、人間としての生き方を深め、心を豊かにする時間である。人の生き方、人の感情のあり方は何年たっても変わらないものであり、副読本にはたくさんの感動資料が載せられている。ひとつでも多くのよい資料を通して、生徒たちとともに教師自身も考える時間を持つことは、大変貴重である。本校における道徳教育は、月ごとにテーマを設け、学校行事とのつながりを考えながら、それに応じた主題名を考慮し、各教科との関連を考えて年間指導計画が立てられている。学年ごとに生徒の実態に合わせて、学年会で情報を交換し、その時々に必要な話題を取り上げ生徒とともに考える機会をもってきた。

2) 校内研修会（年2回）

淑徳大学名誉教授の新宮弘識先生を講師にお招きし、8月に第1回目の道徳校内研修会を持った。新宮先生からは「自己の生き方についての考えを深める」をどのように教師が考えるかをはじめ、「道徳の授業の充実のために改善したい13の要点」について詳しくお話していただいた。この講演会で学んだことを日々の教育活動に生かし、深まりのある授業をつくるために、各学年で道徳の時間の授業実践を重ねてきた。

その成果を全教職員で研修するために、12月には新宮先生から指導助言をいただき、1年生で道徳の研究授業を行った。

3) 具体的な取り組みと生徒の様子

1年生の取り組みから

第1回目の道徳は福沢諭吉『心訓』を題材に、道徳オリエンテーションを行った。小学校のうちから道徳の時間を大事にしてきている生徒たちで、友人関係も良好で自他を認め合えるよい集団である。自分の意見をクラス全体の前でも、しっかり伝えることのできる生徒が多い。生徒がいきいきと自分の意見を言えるための大前提として、教師は自分の意見を安心して発表できる環境づくりに心がけることも必要である。

授業で扱う資料は、毎月の心のテーマに沿った資料を中心に、生徒の実態に合わせて選んできた。担任が自分の思いを寄せる資料を選び、自分のクラスで実践した後、他のクラスの担任に生徒の様子など伝えるなどして、資料を持ち寄り学年体制で共有することで毎週の道徳の時間を大切に扱ってきた。

12月の研究授業でも、学年体制で取り組んだ。先行授業により、予想される生徒からの発言や授業全体の流れなどを捉えることができた。授業整理会で指導案を見直し、次にさらに別のクラスで再度、先行授業をした。このように、学年で指導案検討会をもち、研究授業に臨んだ。



ネパールのビール授業から

第1学年B組 道徳科学習指導案

日時：平成21年12月3日（木）5限

場所：1年B組教室

指導：齊藤 美希

1 主題名 信頼感 内容項目 3－（3）（人間の強さと気高さ、生きる喜び）

2 資料名 「ネパールのビール」（出典「あかつき2 自分を考える」）

3 主題設定の理由

（1）ねらいとする価値について

内容項目3－（3）は「人間には弱さや醜さを克服する気高さがあることを信じて、人間として生きる喜びを見出すように努める」ことがねらいとされている。

人間は信頼できる相手に対してであっても、状況によっては疑いの気持ちを持ってしまうことがある。それは、気持ちの弱さともいえるが、よほど互いに知りつくしていない限り、仕方のないことでもある。人は相手に対する「正直」な心と疑ってしまう「うそ」の心の両方の心を併せ持っているものだが、「信頼」する心の方を多くして生きていくことが人として生きる喜びであることに気づかせたい。自分の予想を超える誠実さに触れることで、疑ってしまったことを後悔したり、相手が信頼できる相手であることを再認識したりするものもある。そのような経験を繰り返すことで、自分にも弱さがあることを認め、それを乗り越えることのできる可能性を持ち備えていることを信じられるようになり、そのことがやがて喜びをもって生きていくことにつながるように思う。自己の体験として学ぶ機会がまだそれほど多くはない中学生にとって、この機会に、自分が人間として持つ良さについて改めて気づくことが、今自分たちを取り巻く人間関係、これから出会う新しい人間関係を、よりよいものにしていけることを期待したい。

（2）生徒の実態

全体的に明るく発言の多い元気なクラスである。男女関係なく誰とでも一緒に活動を行える雰囲気がある。普段から隣同士でのペア活動、グループ活動においても、協力し意欲的に取り組んでいる。考えを発表する場面においても、落ち着いて自分の気持ちを伝えたり、またそれを話し合える学級集団である。

しかし、心の奥ではまだ遠慮があったり、相手を信頼しきれないことから、自分を出しきれない生徒もいる。時折、自分の思いだけを強く主張してしまいがちな場面も見られる。

そこで自分の心には弱さがあることを認め、また、それを乗り越えられる可能性も自分の心が持つことに気付かせたい。人間のもつ良さを知ること、さらに相手とよりよい信頼関係を作り、互いの絆を深めさせていきたい。

（3）資料について

ネパールの山岳地帯を舞台にした実話である。作者は、チェトリという少年に自分の利己的な欲求からネパールの子どもの大金とも思えるお金を渡し、ビールを買ってくることを頼んだ。しかし、少年はその後なかなか戻って来ない。作者は、初めは少年の身を案じて事故や怪我といった少年を気遣う心配から「不安」な気持ちでいっぱいとなるが、地元の村人や教師の言葉を聞いて、次第に少年への「不信感」の気持ちのほう募っていく。大金を渡してしまったことを後悔するばかりとなる。ところが、少年が出かけてから三日目の深夜、自分のために山を4つも越えてビールを買ってきてくれたという事実を作者は知る。

状況からしても作者にとっては少年を疑うのも無理のないものであったが、少年の行動の誠実さはそれをはるかに超えるものであり、感動させるものである。少年の真っ白な心を目の当たりにし、人間の良さに触れると同時に、またそれを疑った自分の弱い心をひどく後悔する。

少年の肩を抱きながら、これからの自分の行動に対する決意を新たにもつ作者の心情に迫るこの資料を通して、自分の弱さを克服することの大切さや喜びを持って生きることの素晴らしさに気付かせ、生徒たちが今持つ人間関係、これから出会う人間関係をより信頼できるものにしてほしい。

(4) 指導にあたって

資料の舞台となる場所や生活の状況を写真やカードで提示し、私達日本人の生活との大きな差異についても生徒に知らせる。

資料は、作者の心の揺れをとらえさせるために中盤で区切る。少年に対する身を案じる「不安」な気持ちから、少年を疑う「不信感」の気持ちに大きく揺れ動く気持ちの変化に気づかせたい。

資料後半を読み、作者の「反省」する気持ちや、少年の行動の誠実に触れることで、作者がこれからの自分の行動に対する新たな決意をしていくところに迫っていききたい。少年の行動を表面的に「えらい」や「立派」ということで終わらせないように、作者の立場に立って資料を読み進め、作者の心情に迫っていきけるような発問を生徒たちの意見から展開することで内容を深めていききたい。

5 本時の指導

- (1) ねらい 少年の誠実さに触れ、信じることでできなかった自分を人間として恥ずかしいと深く反省する作者を通して、人間らしい良さを信じ、信頼されることの喜びをもって生きる態度を育てる。
- (2) 準備 ネパールの生活に関する資料（国旗・地図・写真）、ワークシート
- (3) 展開

	学習内容と主な発問	生徒の予想される反応	指導上の留意点
導入 8	ネパールについて知る 資料の前段部分を範読 ・ネパールについてどんな印象を持ったか	<ul style="list-style-type: none"> ・三角や～・山の形 ・道路でない ・ライフラインがない ・急流の谷川 ・危険な場所で不便 ・凸凹の山道 ・岩から岩へ命がけで跳ぶ ・輸送は足 ・お天道さまに許される生活 ・不便な生活をしているので、都会に憧れている若者が多い ・小さい子どもが仕事 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパール国旗やそこの生活についての写真を提示する ・資料から読み取れることを確認する
展開 30	○チェトリ君が帰ってこないことについて作者はどう思ったでしょうか	<ul style="list-style-type: none"> ・どこかで怪我をして動けないのではないだろうか ・何か帰れないことが起きたのだろうか ・山賊に襲われたかも… ・お金を持ち出して逃げてしまったのではないだろうか 	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> 事故や怪我に対する「不安」 </div> ➤ <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block; margin-left: 20px;"> 逃げた！「不信感」 </div> <u>チェトリのことを気遣う</u> <u>気持ちのほうが強い</u>

	<p>○ 作者は歯ぎしりするほど後悔したのはなぜでしょう？</p> <p>資料の後半部分を範読『あんなに深く反省したこともない』から</p> <p>◎ 作者はどう反省したのでしょうか</p> <p>ワークシートに記入して発表する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 崖から落ちて死んでいるのでは… ・ 死んでいたのなら取り返しのつかないことをしてしまった… ・ あんなによい少年の一生を狂わせてしまったかもしれない ・ 故郷の親元へ帰ったか… ・ 無事でいてよかったけど、あんなに軽い気持ちで頼むんじゃなかった… ・ チェトリ君に本当にすまない ・ チェトリ君を最後まで信じてあげなかった自分が恥ずかしい ・ 今回のような軽はずみな行動は絶対しない ・ ほっとした気持より疑ったことへの後悔の気持ちが強いから何も言えない ・ チェトリ君の誠実さに自分がただ情けない。でも、これから自分もしっかり生きていこう 	<p>「不安」</p> <p>「不信感」</p> <p>逃げた！</p> <p>チェトリに対する疑いが大きい</p> <p>人間の弱さを痛感しひどく後悔するが、それを超えるチェトリの誠実さに感動し、自分の弱さを克服し信頼し前向きに生きようと決心する気持ちに気付かせる</p>
<p>終末12</p>	<p>・ 教師の話</p> <p>☆あなたが今日の授業から学んだことは何ですか？</p>		

<生徒の感想から>

- 「信じる」って大切なあとと思いました。チェトリ君をみんな疑っていて、自分一人だけでも信じてあげられたらいいなあとと思いました。自分にもそういう経験は大切だし、自分のことを信じてほしいと思います。逆に、チェトリ君はケガをして3本しか持ってこれなくてもあきらめずに頑張って持ってきて、本当にかっこいいと思いました。
- 今日の授業で、僕はネパールのドラカ村の人々の生活に驚きました。チェトリ君の行動にもすごく驚きました。今の時代、人をだます人が多いけど、相手の人のことを思ってくれる人はすばらしいと思いました。
- 今日の授業をして、人の心は優しいなあとと思いました。作者は一度疑いを持ったけれど、チェトリ君はずっと作者のことを考えていたと思うといい話だったなあとと思いました。チェトリ君のこの後が気になりました。

4) 今後の課題

道徳の時間の内容は、生徒の学校生活での体験とも非常に関わりが深い。毎月の心のテーマに沿って、生徒の心に響く資料を扱い、生徒と貴重な時間をこれからも持ちたい。日々、生徒たちは心の成長とともに会おう新しい人間関係やさまざまな困難の壁に悩みながらも生活している。今後も、生徒の実態を踏まえ、実践を積み重ねていきたい。そして本校の教育目標の「気づき・考え・実行する生徒の育成」に努めていきたい。

(4) 人権教育の取り組み

1) ねらい

学校教育全体の中で、生命を尊重する心・他者への思いやりや社会性・倫理観や正義感・自分らしい生き方、価値観・美しいものや自然に感動する心をよりいっそう培うことを目指す。

2) 取り組み

本校では、6月を人権月間として位置づけている。学活・道徳の時間を利用し、より効果的に生徒の心に響くような指導を重点的に取り組んでいる。

21・22年度は、社会科担当教諭が資料やビデオを用いて社会科の視点からの特設授業を行ったり、担任が学活・道徳の授業やウォーミングアップ週間を利用して、全員が人権作文に取り組み、人権の大切さを再認識することができた。

21年度の取り組み内容

特設授業

学級の仲間と身近な差別・いじめの問題、部落差別、障害者差別など、各学年の状況により実施した。11月には、人権についての考えを深めさせ、生徒会が中心となって行事の運営を行うことで主体性を養うことを目的として「国府中人権集会2009」を行った。

人権集会

第1部 人権コンサート 演奏者 寿[kotobuki]

第2部 生徒発表・生徒会いじめ撲滅ビデオ・生徒2名による人権作文の発表

生徒会役員による「人権週間」メッセージ朗読

22年度の取り組み内容

いじめ問題を中心として、各学年の状況に応じて特設授業を実施した。また、生徒会が中心となり、「いじめ撲滅」をめざした生徒への啓発活動を実施した。

3) 成果と課題

成果

特設授業を通して、身近な問題だけでなく、身近ではなくても部落差別問題など知っておかなくてはならない問題について考えることができた。H I V感染者・ハンセン病患者に対する差別についての授業では、当時起こっていた新型インフルエンザ感染者に対する誹謗中傷の問題などにも触れ、「差別する心の素」に考えを広げることができた。また、校内講師なので、その時実際に本校で起きていた問題を取り上げることができた。

また、生徒会が中心となって人権に関する取り組み（人権集会など）を行うことができた。近年は人権講演会を開き講師の話を聞く会を持つことが続いていた。そのため、生徒会役員がいじめ撲滅ビデオを製作したり、生徒の言葉によって語られる人権作文やメッセージは、全校生徒に強い印象を与えたようである。

人権集会にむけて出演者の紹介や人権との関わり、人権週間で考えてほしいことなど、事前に生徒会から全校生徒に伝えていけるよう計画していた。

課題

今後の課題として、より一層の効果が期待できるような仕掛けづくりやふり返りを十分に行っていくことで、人権意識を高め、よりよい人間関係づくりに努めていきたい。



人権作文の発表

3. 集団参加への意欲づくり

(1) 学校行事を通しての学び合いの実践

1) 運動会（平成21年度）

ねらい

運動会は、生徒たちが日頃から積み重ねた体育的な活動の発表の場である。また、地域や保護者あるいは周りの生徒に、自分の姿勢やエネルギーをアピールする絶好の機会ともいえる。

1年次、2年次と学年全体として活気づくムードを構築することができなかった3年生に自信と達成感を持たすこと、なるべく多くの生徒を前面に出し活躍の場をあたえることを全職員で確認した。

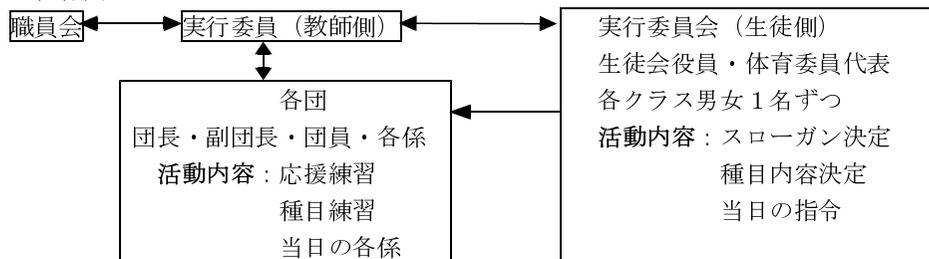
<職員会議で確認した目標>

- ① 日頃の体育学習や自治活動の成果を発表する場とする。
- ② 生徒が主体的に計画・運営に関わり、意見交換を行う。(学び合い)
- ③ リーダーを中心に生徒全員が一人一役を自覚し、協力して団活動を進める。(認め合い)
- ④ 競い合いながらも、お互いの良さを活かし達成感を味わう。(高め合い)
- ⑤ 生徒会の年間テーマ「優」を意識した取り組みを目指す。

取り組み

本校運動会は、体育部教員が方向性を職員会議で提案しそれに則って全職員で関わっていくという方法をとっている。それに準じて教師側の実行委員が生徒の実行委員を全面的にバックアップしながら進めていくという形であり、教師と生徒との密なコミュニケーションが求められる。

<組織図>



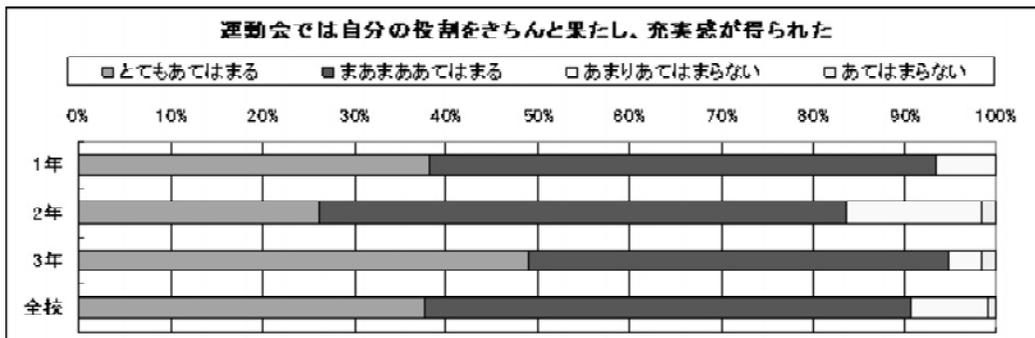
成果と課題

9月上旬での開催のため、ウォームアップ週間を含め慌ただしい中での準備や練習が強いられたが、生徒、職員が一丸となって取り組んだ。まとまりに課題を抱えていた3年生が、実行委員や団長・副団長を中心によく頑張ったと評価できる。

生徒アンケートによると、全体に肯定的にとらえていて、1年から3年までの縦割り活動に満足している意見が多かった。特に「先輩から指導されてとてもよかった。」という内容が多く、3年生は自己有用感を味わうと共に「学び合い」の貴重な機会を得たとも言える。内容に関してはこれまでの運動会と違って、今年度は総練習・応援合戦に校歌斉唱とエール交換・男子の騎馬戦の3つを新たに導入し、校歌は一部女子の中で賛否が分かれたがその他は好評を得た。「多くの生徒が前面に出る取り組みを」という校長の意向を受けて取り組んだが、普段どちらかというと表に立たない生徒が前面に出て活躍したことは大きな成功と言える。

参考資料

運動会生徒アンケートから一部抜粋
 <運動会全体を振り返って>



1年生では93%、2年生では84%、3年生では95%、の生徒がこの設問に対して肯定的な回答をしている。全校では91%だった。目標として掲げた「学び合い」「高め合い」「認め合い」の成果が表われたものと言える。

生徒アンケートより抜粋

3年生

- ・仲の良さや団結力はどこの団にも負けずに頑張ることができた。
- ・一瞬一瞬が自分自身の宝物になった。
- ・一生懸命頑張ってくれた団員全員に感謝したい。
- ・悔いのない充実した運動会だった。

1、2年生

- ・3年生がわかりやすく教えてくれた。
- ・色々な学年の人と協力するのがとてもいいと思った。
- ・みんなで声を出すところがよかった。
- ・3年生が元気いっぱいであつた。
- ・ダンスを考え、わかりやすく教えてくれた3年生に感謝したい。
- ・自分達の運動会もみんなと協力して良い運動会にしたい。



団での協力

2) 文化祭（平成21年度）

ねらい

実行委員会を中心として、全校生徒が一人一役で文化祭を作り上げている。この活動を通して、「気づき・考え・実行する生徒の育成」を目指している。生徒が主体的に活動する場で、「互いの考えを伝え合い、考えを発展させる」学び合い活動がおこなわれることをねらいとしている。

取り組み

参加への意欲化を促すために、課題発見の時間を最初に設けた。まず、自分にとって良い文化祭とはどのようなものか、学校全体でどのような文化祭を作り上げたいのかを考える。そのうえで、自分に何ができるのかを考え、個人の目標をたてさせた。

また、その目標が達成できたかを検証するふりかえりの時間を設け、事後に生かせるようにしている。

学習計画

学習段階	内 容	形 態
課題発見	個人の課題設定・スローガン作成・係希望調査	クラスで個人
課題追求	係活動（組織作り・顔合わせ・係分担）	係ごと
課題発見	係活動（係の目標設定・活動計画の作成）	↓
課題追求	係活動（課題達成のための係活動）	↓
評 価	振り返り（自己評価と次への課題発見）	クラスで個人

成果

生徒の主体的な活動となるよう、課題発見のための時間を設けた。生徒が理想とする文化祭の成功にむけて、個人が目標を持ち、活動するきっかけとなっている。昨年度までは、教師からの文化祭の目的や意義が伝えられたのち、各学級の文化祭実行委員が課題設定などを進めていたが、生徒の活動の更なる活発化を目指すためにも、実行委員会の活躍の場を増やしたいと考えた。例えば、事前に実行委員会で検討した目指す文化祭像を全校生徒に伝える場を設けるなど、実行委員会が運営を進めていく姿を多くの生徒に示すことにより、生徒一人ひとりに自身が文化祭を作り上げているという意識をもたせられると考えた。

課題

一人一役の成果として、それぞれの生徒が活動の場面で、自分の役割を果たし満足感が得られた。

お互いの活動を認め合い、高め合うという視点からも、学校行事に臨む心構えを十分に生徒が理解する必要がある。

文化祭は、生徒が主体的に活動し協力し合うことで、互いに学び合い、高め合うことを知る絶好の機会である。今年度の反省を生かし、来年度も生徒の成長の場を作っていきたい。



フリータイムのようす

(2) 生徒会活動の取り組み

生徒会活動活発化の取り組み

事業企画書、事業報告書の作成

- ・ねらい 生徒自身に誇りを持たせ、同時に学校への所属感を感じさせる。
各委員会が明確な目的意識と責任を持って事業に取り組む姿勢を作る。
活動への評価を与えることで、生徒にやりがいを感じさせる。
- ・方法 各委員会に事業ごとの企画書と報告書を書いてもらう。事業の目的や委員の責任を明確にし、成功したときのやりがいにつなげる。いずれも廊下掲示板に掲示し、全校生徒の目に触れるようにした。
- ・注意点 事業名は親しみやすいもの（意味や目的が連想しやすいものや、イメージしやすいものなど）とする。何のために行うのかを生徒に意識させ、誇りと責任を持って活動させるために目的を明記する。事業後には報告書に反省を書くようにする。

一大事業

本年度は委員会活動に、各委員会の目標に沿った中心的活動を設定することにした。名称を「一大事業」とし、前後期で各1回取り組むこととした。内容は委員会が一丸となって取り組むイベントか、半年間やり続ける取り組みとした。

委員長会議

年間計画を立てた後、他の委員会とタイアップして活動自体を活性化したり、拡大したり、効率化したりできる部分を話し合う。



生徒総会の様子

主な委員会活動（21年度の活動）

前期		後期	
4月	生徒総会（役員） 専門委員会①	10月	Good Eye Month（保健） 文化祭向け掲示（文化） 清掃活動（環境） 23日のイベント（図書）
5月	いじめアンケート調査（役員） ヘルメット調査（生活） 標語募集（保健） 23日（ふみの日）のイベント （図書）	11月	文化祭（役員・放送） 環境月間（環境） 歯ピカWeeks（保健）
6月	ベル着調べ（生活） 加賀地区大会激励会（役員） 歯ピカMonth（保健） 募金活動（赤十字） 環境月間（図書・環境） 給食残量調べ（給食） 23日のイベント（図書）	12月	23日のイベント（図書） クリスマスイベント（役員） 専門委員会④
7月	運動会団長選挙（選管） 専門委員会② 資源回収（役員） 1時間VS（赤十字） 赤十字入団式（赤十字） 保健ビデオ撮影（保健）	1月	牛乳パック回収（役員） インフルエンザ対策（保健） 23日（ふみの日）のイベント （図書）
8月	老人福祉施設訪問（役員）	2月	23日のイベント（図書） 生徒総会（役員） 専門委員会⑤
9月	運動会の放送（放送） 新人大会激励会（役員） 給食残量調べ（給食） 23日のイベント（図書） 後期生徒会役員選挙（選管） 専門委員会③	3月	卒業生を送る会（役員） 前期生徒会役員選挙（選管）

生徒会役員会資料

前期：資源回収

「モオーッとたくさん集めよう！！」牛乳パック集め&資源回収の取り組み

事業企画書

事業名	モオーッとたくさん集めよう！！
目的	今、私達と同じ年の子ども、世界ではキレイな水を飲んだり、学校に行けない子ども達がたくさんいます。そんな子ども達を1人でも多く助けたいと思います。そのために資源回収をして、貯まったお金をユニセフに送ります。
期日	6月5日～1学期末
内容 ・ 方法	生徒みんなにやってほしいこと 担当の人（ローテーションで分担された班）は、自分の牛乳パックの口を開いて、洗って、開いて、かごに入れる。 ・担当じゃない人も是非協力してほしい。保健委員歯ピカMonthと連携しています。 毎日の流れ ・給食時間後、担当の人は自分の牛乳パックを洗って開いてバケツに入れる。 ・生徒会役員は昼休みにバケツを回収し、技術室のテーブルで干す。 ・翌日、生徒会役員が朝のあいさつ運動後、技術室前に置いてあるバケツを元の場所に設置する。

事業報告書（反省部分のみ）

反省	1、2年生が積極的に協力してくれた。リサイクルの意識が高まったと思う。 たくさん集まったけど単価が昨年より下がっていたので、あまり収益は上がらなかった。
----	---



資源回収の様子

1) 生徒会役員会

ねらい

平成22年度の年間テーマを「輝」とした。生徒一人一人が勉強や部活動、あいさつなどに積極的に取り組んで、日々の学校生活を楽しく充実したものにし、輝く国中生を目指してほしいという思いからこのテーマに決定した。

「輝く国中生」になるための役員会目標『SHINE (シャイン)』を作成した。

内容は、S：生徒一人一人が H：奉仕の精神を持って I：いじめをなくし N：何事にも積極的に取り組んで E：Enjoy our school life!! である。

取り組み

一大事業 前期：一日一善

<目標> 「輝く国中生」を目指すための活動として、役員会では一日一善を実施した。普段の学校生活の中で、当たり前になり過ぎて目立たなくなっている人の思いや配慮に改めて気づこうとするとともに、たくさんの生徒が一日一善の活動に取り組むことで学校生活がさらに良くなることを目標とした。

<内容> 生徒玄関に善行BOXを設置し、書いた人の氏名・善いことを行った人の氏名・どんな内容を行ったかを具体的に書き込む用紙を作り、それを善行BOXに入れてもらう。後日役員会の定例会でBOXを開け、善行の内容について生徒会便りで全校生徒に知らせるようにする。また、善行の多い人は10月に表彰を行う。

その他の事業

- ・年間テーマを作成した。(4月)
- ・奉仕の坂の清掃活動やあいさつ運動を行った。(毎日)
- ・目安箱を生徒玄関に設置し、学校改善のアイデアを募集した。(随時)
- ・肢体が不自由な方々が自由に使える車椅子を寄贈しようという目標で、プルタブ回収を行う。この事業は、地域の方々からも協力をいただいている。(随時)
- ・生徒会主催行事以外に、生徒代表の励ましや感謝の思いを伝えるなどして、生徒代表が全校生徒に向けて話しをする機会を増やした。(随時)
- ・いじめに関するアンケート調査を行い、その結果から本校の実情に合うように、今年度の目標とするべき「No!いじめ宣言 改訂版」を作成した。(6月)
- ・VS (ボランティアサービス) 活動として全校で地域の清掃活動に取り組む。(7月)
- ・生徒会主催行事として、本校PTA、町内会などと協力をいただきながら、本校の校区内すべての町内で資源回収を行った。(7月)

成果と課題

生徒会役員会は、6人が一丸となり、課題を見つけ、アイデアを出し合い、各月ごとに出てくる行事や課題に誠実に取り組んでいた。主体的な活動では、毎週金曜日の放課後に定例会を持ち、役員全員で学校の問題点を話し合い、解決に向けてどのようなことをしていけばよいかという対策を協議した。また、目安箱に書かれた様々な問題点や要望についても話し合ってきた。その対策は、全校生徒に生徒会便りで伝えたり、全校集会の中で役員が話をすることで、問題解決への意識を啓発してきた。

生徒会担当としても、課題を提起したり、行事での様々な準備の支援を行うことで、課題に向けての対策や解決方法を役員なりに考え実行できるように配慮した。今後も、役員が主体的に動けるよう、支援していきたい。

2) 生活委員会

ねらい

生活委員会では、『生徒自らが生活の規範を守ることの注意を払うことに気付き、実行できる』ように、活動を通じて意識させることを21年度・22年度のねらいとした。また、そのための基盤として、生活委員各自が「国府中学校の生徒の模範となるような規則正しい生活をする」ことを日常活動として位置づけている。この基本となる意識を持って、毎日の活動と一大事業としての活動を行ってきた。

取り組み

月間生活目標の提示以外は、従来から行ってきた取り組みである。ただし、ヘルメット調査とベル着調査は、従来とは異なり、生徒に期間を告知せずに行っている。これは、生徒が調査であると身構えてしまうことと、結果の競争に終始することを避けるためである。また、抜き打ち的に行うことで、実態を示す結果となる。このことから、生徒各自の反省を促し、その後の規範遵守に期待したためである。

○玄関前あいさつ運動(毎日)

1月ごとに学年担当で、朝の7:45～7:55の時間帯に玄関先で「おはよう」の挨拶をかける。これは、生徒会役員とともにやる。

○ヘルメット調査(前期後期各1回)

学校近くの2カ所で3日間、ノーヘルメットや斜め横断等の調査を行う。チェックされた生徒は交通安全生徒指導担当まで出向く。

○ベル着調査(前期後期各2回)

各月の1週間に調査期間を設け、各クラスで毎週間、ベル着できなかった生徒の人数を調べた。結果は、各クラスの委員の感想も記したお知らせとして全生徒に配り、実態を知らせた。

○月間生活目標の提示(毎月)

生活委員会で1ヶ月ごとに生活目標を決め、各クラスの朝礼時などに内容を説明した後、掲示した。

成果と課題

この2年間の生活委員会の事業は、それぞれの取り組みの中の過程や結果から、生徒が自発的に規範を守れることを期待しているものである。そもそも現在の国府中学校は落ち着いた状態にあり、実際多くの生徒は規範に対する意識は高く、自転車の登校のルールを大きく逸脱することはなく、ベル着に関しても教師から大きく注意されることはないのが現状である。また、遅刻も少ない。生徒へのアンケートの結果でも「学校の規則を守ること」「交通安全に努めること」「挨拶をしっかりとすること」のできている割合は90%を超えており(22年度7月調査)、この2年間で大きく高まっている。また、保護者アンケートでの同項目のできている割合も年々高まっている。

生活委員会の活動は、学校生活をしっかりしているという啓発活動であり、アンケートの結果の一翼を担っていると考えられる。しかし、生徒間の挨拶などはまだまだという感もあり、生徒の意識の高揚と持続のために、これからも地道に活動をしていく必要がある。

生活委員会						
ベル着調査						
ある一週間の間、ベル着調査を行いました。 下の表は、その1日の中で、ベル着できなかった人の累計です。						
	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	合計
1A	34	8	8	19	13	82
1B	29	39	0	18	16	102
1C	29	5	10	5	2	51
2A	20	13	9	2	6	50
2B	20	11	5	11	13	60
3A	24	17	45	6	15	107
3B	9	3	9	4	0	25

各クラスの生活委員の感想・意見

- 1A 感 ベル着していないのは、ほとんど同じ人で、特に男子が多かった。
感 ベルが鳴ったら友達と話をやめてしっかり履けてほしい。
- 1B 感 みんなが、ベルがなくても気にしてなかった。
感 一人ひとりが自分の席に着けるように意識を持って次の授業の準備してほしい。
- 1C 感 同じ人が何度もベル着ができていなかった。でも、途中からしっかりできていた。
感 時刻を見て行動して移動教室のときは早めに移動してほしい。
- 2A 感 他のクラスに行っていてベル着出来ていない人が多かった。
感 休み時間の間に授業の準備しておく。
- 2B 感 ベル着ができていない人が決まっていて、特に2～5階できていない事が多かった。
感 気が振らないように一人ひとりが呼びかけてほしい。
- 3A 感 ベル着ができていないときとできていないときの差が大きかった。
感 毎日ベル着を意識して休み時間をすこしてほしい。
- 3B 感 毎日、他のクラスと比べてしっかりベル着ができていた。
感 これからも継続してベル着を履けてほしい。

生活委員会から
今回のベル着調査で、各クラスのベル着に対する意識が分かりました。ベル着は、授業に集中するための大切な事です。日頃ベル着ができていない人は、この機会に毎日ベル着してほしいと思います。そして、3B のようにクラス全体で、ベル着できない人の数を減らしていきたいです。



毎日の挨拶運動

3) 体育委員会

ねらい

体育委員会の日常活動は主に以下に示す6つである。

- ①授業の準備
- ②授業の最初と最後のあいさつの号令
- ③体操の号令
- ④授業中、教師の補助
- ⑤授業の後片付け
- ⑥昼休みの体育館使用状況の巡視及びボールの後片付け

その他には用具庫の掃除・整理整頓や体育館の使用割りを作るなど、円滑な体育活動の運営に大きく貢献している。

取り組み

生徒会執行部より提案された「各委員会一大事業」計画を受けて、体育委員会では運動会をメインテーマに掲げた。そこで確認されたことは、全員が運動会の各係に所属して運営に関わりましょうということになった。

<各委員が所属した係は以下の通り>

実行委員・用具係・審判係・召集係・記録係

成果と課題

「各委員会一大事業」として臨んだ運動会。9月初旬の早い開催だったため、1学期後半から夏休み及びウォームアップ週間にかけて計画や準備に追われ、大変慌ただしい中で生徒たちは頑張っていた。前述したように体育委員会では全員が必ずどこかの係に所属して運営に関わった。その結果、ほとんどの委員が高い意識で運動会に臨んでいる姿が見られた。平成21年度の体育委員長に代って、実行委員としての計画・運営だけでなく、団の演技指導（ダンスの振り付け）、更には当日の入場行進・準備体操の指令まで受け持ち、重責であったが見事その役割をやり遂げ、大きな自信を付けたと思われる。生徒によって責任の軽重の違いはあるが、それぞれが意欲を持って臨んだ一大事業であった。

<平成21年度体育委員長の感想文>

今年、私は赤団でした。応援責任者という大役もしました。中学最後の運動会の思い出のほとんどが応援の競技のことです。最初はどのようにいいかわからないことがたくさんあり悩みました。ダンスを考える機会は少なかったけど、私のアドバイスをみんなしっかり聞いてくれてとても嬉しかったです。

1、2年生に教えることは団活動の中で一番楽しいことでした。・・・本番では自然に笑顔が出、とても盛り上がった運動会だと思います。・・・実行委員の仕事もちゃんとできてよかったです。



緊張の入場行進指令

4) 文化委員会

ねらい

文化委員会では、国中生が明るく楽しい学校生活を送れるようにするために、掲示物を通して学校のムードを盛り上げることを心がけている。

具体的には、まず「季節の掲示物」。これは、階段の途中にある掲示板を利用し、季節にあった掲示物を作成する。次に「ポスター類の掲示」。これは、1階の掲示板を利用し、「写真ニュース」や「対外応募」等のポスターを掲示する。どちらの掲示物も、生徒たちがよく通り目立つ場所にあり、意識して見てくれる生徒の数も多い。

取り組み

文化委員会では、ねらいをさらに深めるために次の取り組みを実施した。まず「季節の掲示物」は、これまで年間4回の作成だったものを、名前を「毎月の掲示物」に改め、年12回（夏休みも生徒がたくさん登校するので8月も作成）実施することにした。この活動は学年単位で制作することにより、委員たちの負担を少し減らすことができ実現した。また文化祭前には、「文化祭カウントダウン掲示」と銘打って、毎日少しずつ掲示物を増やしていった。



文化祭カウントダウン掲示

さらに生徒会キーワード「輝く国中生を目指して」を受けて、「掲示物で校内ピカピカ輝く国中生を文化委員会のキーワードとして、活動をより活性化することにした。具体的には事業名を「輝くポスター製作」とし、ポスターを製作することにした。これは、各部活動で参加する「ブロック大会」、地域と協力して実施する「資源回収」、親子で取り組む「親子奉仕作業」、そして「運動会」、この4つの行事の中から、各委員が1つずつ選びポスターを描き、それを目立つ場所に掲示し参加者の意識を高め、行事をより盛り上げようとした。

成果と課題

「昨年度実施したから今年度も実施する。」という安易な発想のもとに今年度の実施を決めるのではなく、昨年度の反省を踏まえての話し合いをしっかりと行った上で、今年度の実施の決定をできるようになったことが、成果として第一にあげられる。さらにその結果、前年度の活動を話し合うことにより、今年度独自の活動をしたいという気持ちが委員の中に強くなり、委員会活動の積極性も増加した。



親子奉仕作業のポスター

これまで掲示物についてはいろいろな活動を実施したので、掲示物以外で文化的な何かを活動出来るよう拡大していくことがあげられる。

5) 図書委員会

ねらい

図書館の利用促進を図り、生徒が読書に親しむように努める。

取り組み

○日常活動

- ・図書当番、図書の貸し出し、図書の整理
- ・学級文庫の選定・管理
- ・図書委員会の掲示板作り

○その他の活動

- ・校誌の編集
- ・環境月間にかかわる取り組み

○一大事業「23をいろどる加賀国府」

- ・毎月23日（小松市読書の日）に合わせて、イベントを企画・運営する。

5月 4 択図書クイズ

（本を読めば答えられる問題を図書委員が作り、来館者が解く）

6月 うちわづくり（環境月間とのタイアップ）

9月 前期図書委員のお勧めの本を読もう および 感想コメント大賞を選ぶ

（図書委員は自分が推薦する本を選び、推薦文をポップにする。推薦された本を読んだ利用者は、3行程度の感想を書く。感想のコメントの優れたものにコメント大賞を与える。）

10月 本を借りて、くじをする。

（「プラス～冊借りられる券」や「禁帯出本の貸出し券」を商品とする。）

11月 後期図書委員のお勧めの本を読もう および 感想コメント大賞を選ぶ

12月 本を借りた人にクリスマスカード（しおり）プレゼント

1月 こまつかるた・百人一首大会



おすすめの本

成果と課題

毎月の活動を通して、学年を超えてアイディアを出し合い、実行の可能性や効果、全校生徒に伝える方法を検討している。毎月のイベント活動後の振り返りは、事後に生かされている。小集団の話し合いと発表を続けており、委員集団での活動がスムーズに行わるようになってきた。

「図書委員のおすすめ本を読もう感想コメント大賞」では、それぞれの本に対する思い入れあふれる推薦文を、委員は熱心を書くことができた。引用や要約、どんなタイプの人にお勧めかなど、魅力ある推薦文になった。多くの生徒が興味を持って本を手にとっていった。またコーナーに来た生徒に対して、本をじかに勧める委員の姿もみられ、積極的な活動を行うことができた。寄せられたコメントも、短いながら自分の気に入った箇所を書きだすなど工夫されていた。このイベントを通して委員が積極的に活動し、生徒の図書室の利用を促進することができた。

日常活動とイベント企画と多忙であるが、活動計画をはっきりさせ、当番活動中に手分けして作業するなど、部活動への支障が少なくなるよう活動時間を工夫している。

月1回の企画であるため、だんだんと目新しさがなくなってきた面も見られる。今年度は広報活動などを中心に工夫してきたが、今後は読み聞かせなど新しい企画を委員とともに作りだしていきたい。

6) 保健委員会

ねらい

保健委員会では「気づき・考え・実行する生徒」「委員会活動に意欲を持って取り組む生徒」を意識し委員会活動を行っている。

また、保健委員会が活発に運営され活動内容が全校生徒にアピールされることで、保健委員一人ひとりの活動に対する意欲や学校全体の保健に関する意識が高まるので、昨年度以上に生徒の話し合い活動を充実させ、生徒がより主体的に委員会を企画・運営していくことにねらいをおき活動している。

取り組み

上記のねらいを取り組みに活かす工夫として、昨年度の「保健委員会に向けて」と「保健委員会活動を振り返って」という2種類のプリントに加え、今年度は月ごとの保健委員会活動にも、一人ひとりが企画を考えるためのプリントを準備した。

「一大事業」の企画の内容を、各自が自由な発想でまず考えて書き、次にクラスごとで話し合い、その後委員会としての意見をまとめて「一大事業」の企画書を完成させている。

さらに保健委員会の「一大事業」を実施する際には、委員長・副委員長・書記・学級代表でプログラム委員会を行った後、学級におろして実施していく形をとっている。

○一大事業

・前期保健委員会（22年度）

5月 「健康川柳王は誰だ」

6月 「歯ピカ Month」

7月 「ビデオ撮り」

（学校保健委員会用の作品）

・後期保健委員会（21年度）

10月 「学校保健委員会」

「Good Eye Month」

11月 「歯ピカ Weeks」

1月～2月 「インフルと闘え・国府っ子！」



保健委員会掲示板

○日常活動

・健康観察（毎日）、壁新聞と健康クイズ(毎月)、シャボネット補充(不定期)

成果と課題

今年度、2年生・3年生の保健委員会に入った主な動機は「前年度、保健委員会を体験して楽しかったので、またやりたいと思った。」や「保健委員会の活動を見ていて、自分もやってみたくと思った。」というものであった。「最上級生でなくても、主体的に活動を行うことができた」あるいは「行っていたのを見聞きした」という体験が、「自分たちも何かをやりたい。何らかの形でやれる」という自己有用感の高まりに繋がっている。

保健委員会の「一大事業」は、一人ひとりがプリントに向かい自由な発想を思考することから始まっている。プリントにまとめた自分の考え → 小グループでの話し合い → 委員会としての企画書完成というプロセスにより、一人ひとりの意見が何らかの形で「一大事業」に反映されるため、活動に対しても主体的に意欲を持って取り組んでいる。

「一大事業の企画・運営」や「壁新聞・健康クイズの作成」など、一人ひとりが何らかの形で責任を持って活動に関わることができた体験や、保健委員会活動を全校生徒にアピールする機会が増えることは、保健委員としての達成感・充実感だけでなく、学校全体の保健に対する意識も高めている。

7) 赤十字委員会の取り組み

ねらい

本校の赤十字活動は昭和24年以来で、JRCの精神のもと活動を続け、今年度で62年目を迎えた。活動プログラムとして「気づき・考え・実行する」態度目標を設けており、本校の教育目標である「気づき・考え・実行する生徒の育成」そのものに繋がるものである。

赤十字委員会では、日常の清掃活動の他、V S（ボランティア・サービス）活動、ベルマーク収集、そして国内外の災害時における募金活動を主として行っている。

30年前、毎朝早く登校し、校門からの坂道を竹箒で掃き、冬期は除雪に精を出している生徒の姿を見て、当時の小松市長（竹内 伊知氏）が「奉仕の坂」と名付けられた。その生徒の姿は今日も続いており、保護者の方からも子ども達に思い出として語られている。

その時代に応じた地域貢献、奉仕活動が形を変えて取り込まれ「精神的な伝統」がしっかり受け継がれている。赤十字委員会の活動を、人と共に生きる中で、他の人や社会のために、自分を生かして自分のできることを、相手の立場に立って、自分から進んで行う活動と位置づけている。

取り組み

今年度、赤十字委員会の課題として「いつでもどこでも、全校生徒に赤十字の奉仕の精神を持ってもらい輝く国府中にしよう！」を掲げた。

平成21年度より、専門委員会の「一大事業」企画として、全校生徒による地域での自主美化活動を計画し、実践している。

平成22年7月16日（金）に実施された地域VS（ボランティアサービス）を紹介する。全校生徒212名が4グループに分かれ、河田南地下道、国府小前地下道、地区体育館内外、学校周辺の清掃活動を計画し、実践した。

日頃、登下校で使用している2カ所の地下道では、大がかりな除草、蛍光灯の蜘蛛の巣はらい等を含み、大規模な清掃活動となった。この地下道は小学生も利用している箇所である。国府地区体育館は日常の部活動や地域行事の際に利用する場所であり、駐車場を含む外回りと館内を隅々まで清掃することができた。中学校横に位置する学童施設は、多くの小学生が利用しており、学童の小学生との放課後の交流（学習や遊び）も計画中である。

成果と課題

上記の地域V Sの取り組みは、運動会の団の組織を利用した社会貢献活動となった。各リーダーが計画を立て、活動内容、道具を準備し、役割分担を決め、生徒の主体的な活動となった。団の団結を促すばかりでなく、地域の人間としての役割や責任も感じながら、大きな達成感を得られたようである。学年を超えて、学校全体が一体となり、地域のために、一つのことを成し遂げる「集団づくり」「場づくり」の実践になった。

生徒が自ら課題をつくり、主体的に課題解決していけるような道筋をつくることはまだまだ困難な面がある。その時代に応じた地域貢献、奉仕活動が生徒によって課題として見つけられ解決される経験が今後も大切である。その過程で、教職員がどう支援していくかが特別活動における重点である。



奉仕の坂 清掃活動

8) 放送委員会

ねらい

日常では、適切な時間に適切な放送を行うことで、生徒の心の安定を図る。行事では、その場の雰囲気に応じた放送を心がける。その中で、生徒自身が企画・立案し、実行に移していくことをねらいとした。また、運動会の放送などはその競技の状況に応じて生徒自らが考えた状況放送に力を注ぐことを基本とした、教師主導ではなく、生徒の活動が中心とした運営を心がけた。

取り組み

○給食時、清掃時の音楽放送（日常的な活動）

○集会時、行事での放送設備セッティング

○一大事業「状況に応じた運動会でのアナウンス」

4月 修学旅行出発前の3年生による沖縄の自然・歴史・産業・文化・戦争のようすなどを文にまとめ、給食時に放送を行った。

9月 運動会の放送（前述）

11月 文化祭での音響を担当（演劇・ステージ発表など）

成果と課題

前期・後期の最初の委員会では、特に入念に放送委員がしなければならないことと、仕事を怠った時にどんな影響が出るかということを確認した。結果として、いつまでも音楽が流れ続けるミスなどは、去年と比べて大幅に減少したと感じている。

一大事業の運動会の放送では、運動会練習で起きたミスや改善点を最後に確認することを毎日必ず行った。結果として運動会本番でのミスは、ほとんど見られなかった。また、アナウンスや入場・退場曲をかけるタイミングなどもうまく行うことができた。

しかし、短い時間の中で、司会原稿作りなどはどうしても教師サイドでしてしまいがちで、来年からは全面的に生徒の手によって原稿作りが行えないかを検討する必要がある。

また、運動会の後のふり返りが十分に行うことができなかった。来年度は何らかの形で、生徒がより強い充実感を持てるふり返りの時間を確保する必要がある。



運動会での放送係

9) 環境委員会

ねらい

平成16年度に、市民・事業所・行政の三者が協働して主体的な環境実践活動を目指す「こまつ環境パートナーシップ」が設立され、学校教育においても主体的に取り組む「こまつエコスクール宣言プロジェクト」が立ち上げられた。本校はその当初から、生徒会を中心に、環境教育、環境保全活動に取り組み、平成18年度に小松市学校版環境ISOの認定を受けた。

それ以後は、環境委員会を中心に、環境問題への啓発や環境実践活動の推進に取り組んできている。環境委員会は校舎内外の環境美化の他に、環境に関する生徒への働きかけの中心的役割を担っているので、委員自身が「気づき、考え、実行」することを目指して、考えや意見を出させる場を多くした。その中心的活動として、毎年行なっている環境月間（年2回）と一大事業の取り組みを取り上げた。

取り組み

○環境月間（6月）の取り組み

昨年度の反省を含め、今年度は何を具体的にを行うかを、委員会で話し合った。

- ①節電、節水、紙のリサイクルの働きかけ
 - ・昼休み消灯　・トイレ使用後の電気とファンを消し、窓を開ける
 - ・リサイクルBOXを使って、捨てる紙を減らす。裏紙の使用を促進する。
 - ・牛乳パックを開いて回収
- ②緑を増やそう　→　・緑の羽の募金活動
- ③その他　→　・全校生徒へのアンケートでエコな行動を意識させる
 - ・ポスターやエコクイズで全校生徒に訴える
- ④他の委員会の行事と協働　→　・給食委員会の残菜調べ
 - ・保健委員会の歯磨き月間で牛乳パックの使用
 - ・水の無駄遣い帽子
 - ・図書館から環境に関する図書の紹介
 - ・放送局による昼休み消灯の放送

委員たちの意見から、今年度は、環境委員会が主導で取り組んだ「牛乳パックを開こう」や、「緑の羽の募金」活動が新たに加わった。集まった牛乳パックの重さを随時掲示したり、募金の額を知らせることで、全校生徒も積極的に取り組み、委員達は達成感を感じたようであった。

○「一大事業」の取り組み

昨年行って好評だったためか、委員達から昨年同様「外掃除」が提案された。昨年の問題点を修正して実施した。

- ・毎週火曜日、雨天の場合は水曜日。放課後20分程。
- ・清掃場所と環境委員の学年ごとの割り当て、清掃方法を決める

昨年同様、委員長は昼に放送するなどし、委員たちが自ら協力、継続して行えた。中には、より汚い場所に気づき、清掃場所を変更する提案が委員から出た。

成果と課題

生徒の意見を元に、より具体的に実践方法や条件を考えさせることで、生徒の主体性が高まってくる。また、その実践の成果が目に見える物であれば、意欲も出てくる。全校生徒に働きかけて、生徒達の協力や反応が帰ってきたとき、委員達もやりがいを感じるようである。

今後、生徒の活動の検証方法を考えると共に、全校生徒とのつながりを感じる活動を更に考えていきたい。



緑の羽根の募金運動

10) 給食委員会

ねらい

給食委員会では、毎日の給食を衛生的に美味しく食べるために、日々の活動からコンクールなど、いろいろな取り組みを行っている。給食の時間は、生徒指導などさまざまな視点での指導が大切になる。よって、日常生活以上に大切に取り組みたいと考え、生徒一人一人が感謝の気持ちを持って 給食の時間を有意義に過ごせるように、委員会の活動を行っている。

取り組み

○日々の活動

- ・給食点検表の記入
- ・給食黒板の管理（その日の献立・栄養素などを掲示）

○一大事業

- ・給食コンクール（前後期・2回）

残量調べや後片づけの様子を給食委員が点検して、残菜がへるようクラスに呼びかけた。また、残菜をへらすためのポスターや、給食コンクールでの片付けの良い例を撮影したものを掲示することでクラスに報告し、残量がへるよう呼びかけた。

○試食会における活動報告

- ・日々の活動や給食の様子を保護者の人たちに報告

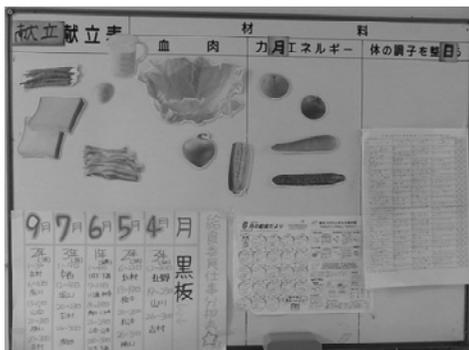


残菜を減らすポスター

成果と課題

給食の大切さを知ると同様、準備してくださる給食の人達に感謝の気持ちを持っていただくことを委員会でなげかけ、みんなが気持ちよく給食を食べることができるよう心がけてきた。特に今年は、生徒会キーワード「輝く国中生を目指して」を受けて、与えられたものをこなしていくのではなく、委員長を中心にし、委員が自ら考え活動していくことに重点をおき、給食コンクールに向けて、残菜をへらすためのポスターを各クラスで作成した。残量を調査するだけでなく、どうしたら残量がへるかという話し合いのもとでポスターを作成することができた。年間を通じて、こうした活動を委員が主体となって実行していきたいものである。

1学期はデザートについていたベルマークを、給食委員と赤十字委員が協力して集めるといった連携活動が見られたので、今後は、こうした他の委員会との連携活動を取り入れていくことができると考えている。



給食黒板

残飯の片づけ	9/4	9/5	9/6	9/7	9/8	9/9	9/10	9/11	9/12	9/13	9/14	9/15	9/16	9/17	9/18	順位
1A	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
1B	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
2A	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
2B	20	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
3A	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
3B	30	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5

給食コンクールの結果

4. その他

(1) 家庭・地域・社会との連携づくりについて

学校経営を進めていく上で、保護者・地域・関係諸機関等と良好な関係を持ち、連携を進めていくことは最も基盤となることである。保護者や地域からの情報がスムーズに収集でき、ニーズにあった学校経営を心がけていくことが、「信頼される学校づくり」の第一歩と考えている。さらに「小中連携」「家庭・地域の教育力を引き出し、生かした学校教育の推進」を特色ある学校づくりの一端として捉え、学校研究の推進の中にも位置づけている。

「信頼される学校づくり」を目指し、より充実させていくために21年度より新しく取り組んだり、これまで以上に充実させることができたのは、学校ホームページのリニューアルによる情報発信の充実、PTA活動のスローガンの決定と提示による意識の向上、外部人材の活用による講演・講座と普段の授業との関連づけ、家庭学習強化週間の取り組み、学校関係者評価中間評価の会合の開催等である。

年間を通して家庭・地域や外部人材・小中高とのつながりを深めていくことで、生徒達へ新鮮な刺激を与え続けることができた。以下に21年度の取り組みを中心に実践を紹介する。

1) 家庭・地域との連携

年間を通して取り組んできたことをまとめると下の表ようになる。

授業公開は昨年同様参観した保護者の方にアンケートを記入していただいた。また、10月の授業公開日には学校関係者評価の中間評価のため、評価委員の方には「授業・環境整備・その他」についてチェックシートを用意し記入していただいた。

4月の授業参観では全担任が道徳（4学級）または学活（5学級）を行い公開した。（22年度も同様に実施）10月の授業公開では、1～3年各1学級でライオンズクエスト「思春期のライフスキル教育」プログラムに基づく授業を公開し、北陸3県よりライオンズのメンバーの方が数多く参観に訪れていた。

1Bでは「肯定的に受け止め行動する」2Aでは「心の成長と感情のコントロール」3Bでは「相手を傷つける行為、励ます行為」のプログラムに基づいた授業を行った。



1年ライフスキルの授業

PTAでは活動のスローガンを「子供たちの笑顔のためにPTAの輪を強めよう」と決め、サブテーマとして「挑戦する子供たちの応援団として」とした。このスローガンを校内掲示をはじめ、PTA関連の配布物には必ず記入することとし広めていった。

家庭学習の習慣化を目指す取り組みは、2学期の定期テスト前の一週間を強化期間として、呼びかけの掲示、担任による働きかけを行い、各学級で班長や会長などが生徒全員の学習時間のトータルを日々校内掲示物に記入していった。結果の表は、授業公開日や個人懇談の機会に保護者の方にも見ていただいた。

月	保護者来校の機会	生徒が地域へ	P T A行事他	小中高連携
4	授業参観・学年懇談会			
5				小中連絡会
6	授業公開			中高連絡会
7	個人懇談	1時間V S 生徒会資源回収	家庭教育講座 広報発行	
8	学級・学年懇談会		親子奉仕作業	
9	運動会	梯川清掃 校下社会体育大会	グッドマナーキャン ペーン	
10	給食試食会・学校 保健委員会・授業 公開	国府まつり		
11	学校開放 文化祭・合唱コン クール 進路説明会		文化祭お茶会 「STOP携帯」講 演会	合唱コンクール小 6招待 中高連絡会
12	個人懇談		広報発行	
1				
2	新入生保護者説明 会・授業・部活公 開			小中連携授業
3	卒業式		広報発行	

2) 外部人材の活用

学校行事・教科・総合等で地域や外部人材等の教育力を活用していく取り組みをまとめると以下の表のようになる。

20年度の反省に基づき、例えば「思春期の性」の講座では、生徒にとってその講演だけが単発的に行われるのではなく、保健体育の保健の授業を充実させることで、授業と講座の内容が関連づけられより充実するようにした。

また、2年目も採択となったS P P (サイエンスパートナーシップ事業) の講座においても、これまでの3年生2学期の総合のテーマ「未来」を根幹に置き、こまつN P O代表理事の久保信二郎先生の環境出前講座、日本原子力開発機構敦賀本部の原幹夫先生の講演と授業により、各生徒が自分で調査研究するテーマを決め、2学期間をかけて追求していく取り組みにすることができた。



思春期性講座



S P P の授業の様子

月	1 年	2 年	3 年	全学年共通
5			修学旅行 津波古ヒサ氏	
6	インタビューの仕方 田井絵里子氏	職場体験学習 24事業所	「思春期の性」講座 佐竹紳一郎氏	
7	救急救命法講習会 消防署より8名 ふれあい体験学習 27事業所			お話宅配便
8			卒業生と語る会 高2生 9名	
9			環境出前講座 久保信二郎氏 第一回SPP 原子力開発機構	
10	「思春期の性」講座 石田 美幸氏		伝統工芸士に学ぶ 西盛友堂	学校保健委員会 廣谷 衣美氏
11	「食育」の授業 勇ノ上栄養士 障害を持った方との対話 中出 繁男氏	働く人に学ぶ会 10事業所より11名 薬物乱用防止教室 麻薬覚醒剤乱用防止 センター	第二回SPP 原子力開発機構 第三回SPP もんじゅ見学	人権集会コンサート「寿」
12		「思春期の性」講座 あねざきしょうこ氏		クリスマス会 潮津 真木子氏
1				
2	スキー教室 講師10名	立志式 小松 智子氏	保育実習	

3) 小中高の連携

小学校と中学校の教職員が、授業参観や情報交換など、いろいろな機会に小・中の枠を超えた交流を行うことで、9年間のスパンで児童・生徒をよりよく育てようという目的の下、以下の取り組みを行った。

① 授業参観と情報交換会

5月7日(木)、小学校の先生方(旧6年担当)に1年生の5限目の授業を公開した。その後、個々の生徒についての情報交換を行った。

3月23日(火)は、中学校側が小学校に赴き、新1年生について情報交換会を行った。この場では、特別支援担当や養護教諭の交流も行った。

② 中学教師の専門性を生かした交流(出前授業)

2月19日(金)、本校の英語の教員が中学校2年生各クラス4名の生徒を引率し、小学校6年生に外国語活動の出前授業を行った。授業では、2年生生徒が自分たちで用意した「中学校の紹介」を行い、小学生とのやりとりも活発に行い英語の楽しさを味わってもらうことができたと考えている。

22年度は9月に、国語と数学での出前授業を予定している。

③ 学校行事への招待

教職員の交流とあわせ、児童（6年生）・生徒の交流も計画した。特に、中学生の合唱コンクールは6年生に大きなインパクトを与えるものである。21年度も6年生を招待したが、新型インフルエンザの関係で中止になった。

21年度は、小松商業高等学校から校内研修の一環として、中高連携の働きかけをいただいた。お互いの授業の見学と教師間の交流を通して、中高のギャップを解消するとともに教師の視野を広げる目的で、2回の中高連絡会を行った。

① 第1回中高連絡会

6月30日（火）、小松商業高等学校の先生方が中学校の授業を参観し、その後、教科部会で情報交換を行った。高校から27名の先生方が来校し、国語・社会・数学・理科・保健体育・英語の6つの教科部会で情報交換会を行った。授業に関する情報交換が主で、校種は違っても、生徒にとってわかりやすい授業、達成感のある授業を目指す姿勢は同じだった。

② 第2回中高連絡会

11月18日（水）、本校教職員が高校へ赴き、6限目の授業を参観したあと、全体協議会を行った。全体協議会では、学習指導・生活指導・教育相談・推薦入試など多岐にわたる情報交換を行った。また、養護教諭、図書館司書も交流を行うなど、有意義な連絡会となった。

4) 成果と課題

6月の授業公開は保護者の参加が21年度は25名、22年度は28名であった。10月の給食試食会・学校保健員会と同時開催の授業公開の参加者は35名であった。また、9月からリニューアルなったホームページも、月の行事予定、校長便り、教頭徒然草など更新回数を増やしていくことで閲覧回数の画期的な増加が図られた。

外部人材や地域の教育力の活用の面でも、総合の時間の探究活動の充実が各学年ともこれまで以上に図られ、1、2年生は文化祭のステージ発表において成果発表会を持ち、3年生も学年内であったが成果発表会をもつことができた。総合の取り組みに限らず、校内や教室の掲示、学年便りなどに生徒たちの様々な取り組みや、取り組んだことで学べたことや感じたことなどが数多く掲示され記載されている。



小学校への出前授業（平和学習）

21年度2月の出前授業では生徒が前面に出て小学生への英語活動を行った。22年度の小中連携の取り組みとして8月6日に3年生の修学旅行での平和学習の一端を小学校の全校生徒に発表する取り組みを行った。

生徒アンケートの数値の上昇にも学校生活の充実ぶりがよく現れ、さまざまな取り組みの成果がよく出てきている。生徒や保護者は授業はもちろん部活動、学校や生徒会行事、人間関係など様々な面で学校に対して大きな期待を寄せてきている。心身ともに大きく成長していくこの時期の生徒とその保護者にとって「信頼される学校」となるよう、教師としての力量や教師集団としての高まりを目指していきたい。

(2) 生徒・保護者アンケートからの検証

4：よくあてはまる 3：まあまああてはまる 2：あまりあてはまらない 1：あてはまらない
(4と3の割合を%で表したもの)

生徒アンケート結果からの抜粋

No.	内 容	H 20年	H 21年	H 22年
2	学校生活は楽しいと思う。	58%	78%	87%
9	授業で習ったことをできるだけふだんの生活に結びつけて考えようとしている。	33%	54%	55%
10	挨拶をしっかりとるようにしている。	51%	87%	90%
11	道徳や学活の中で、人間関係づくりや生き方などについて考えるようになった。	55%	67%	65%
13	学校行事や学年行事の中で、自分の役割を充分果たすことができ充実感を感じることができた。	68%	73%	73%
14	生徒会活動や委員会活動が活発になるように、日々の活動や一大事業に積極的に参加・協力している。		65%	68%
19	学習しておもしろい、楽しいと思うことがある。	69%	74%	82%
20	自分の思いや考えをきちんと言葉にして相手に伝えられるようになってきた。	32%	75%	75%
21	興味をもったことは、自分から進んで学習している。	61%	75%	77%
24	わからないことはそのままにせず、先生や友達に聞いたりしてわかるまで努力しようとしている。	61%	71%	79%
25	自分で学習計画を立てて、ふだんからこつこつ学習している。	40%	57%	50%
29	将来の進路について、家庭で話している。	49%	59%	60%

生徒アンケートの研究テーマに関する項目を抜粋し、上記に示したが、「授業づくり」「人間関係づくり」「参加への意欲づくり」での実践が生徒にどう還元されたかを検証したい。

1) 授業づくりについて

○No. 20「自分の思いや考えをきちんと言葉にして相手に伝えられるようになってきた」は20年度比43%の上昇の75%となった。授業や特別活動での「学び合いの場」づくりで自分の考えや情報をもとに、書いたり話したりする機会を持つとともに、自分と異なる考えや新たな情報とふれあうことによって、生徒同士が自らの考えを発展させることができたり、表現する機会が増えたりしたことが自信につながった。

○No. 19「学習しておもしろい、楽しいと思うことがある」82%、No. 21「興味をもったことは、自分から進んで学習している」77%、No. 25「自分で学習計画を立てて、ふだんからこつこつ学習している」50%の結果から、授業改善の取り組みにより「教師主導の授業」から「生徒主体の授業」への転換が図られたと読み取れる。No. 24「わからないことはそのままにせず、先生や友達に聞いたりしてわかるまで努力しようとしている」79%は20年度から大きく上昇した。授業の学びを自分のものとしていく生徒の意識が十分受け取れる。

2) 人間関係づくりについて

- No. 2「学校生活は楽しい」87%となり、昨年度比9%上昇となった。喜びや楽しみにつながる学級づくりでの取り組みや学校全体での行事や生徒会活動に参加・協力したことの充実感等から学校への帰属意識も高まり、この数値に表れたと考えられる。生徒主体の「学び合い」を取り入れた生徒相互のかかわり合いも、学校生活への楽しさにつながるものである。
- No. 10「挨拶をしっかりとるようにしている」90%となっているが、21年度から始めたライフスキルプログラムの学習や構成的エンカウンターによるソーシャルスキルの実践が生徒の社会性への意識の変革に結びついたと考えられる。

3) 参加への意欲づくりについて

- 生徒の主体的な生徒会活動の運営により、No. 13「学校行事や学年行事の中で、自分の役割を充分果たすことができ充実感を感じることができた」73%、またNo. 14「生徒会活動や委員会活動が活発になるように、日々の活動や一大事業に積極的に参加・協力している」68%、と生徒の特別活動での主体的な参加への意欲が大きく表れた。

教職員アンケート結果からの抜粋

No.	内 容	H 2 0	H 2 1	H 2 2
6	生徒はよくあいさつできる。		61%	82%
1 5	生徒は学校行事や学年行事の中で、自分の役割を果たすことができ、集団の一員としての行動ができるようになってきている。	80%	100%	100%
1 7	生徒は社会のルールや学校の規則をよく守っており、規範意識が身につけてきている。	60%	94%	100%

上記の教職員アンケートからも学校生活での生徒の変容の一部が読み取れる。これからの社会の変化に対応できる生徒像を考えると、主体的・自律的な個人として自立するために、挨拶や社会のルールを遵守することが必要な資質であることが共通理解されている。

また、生徒が学校集団の一員として行動ができるようになっていることも、教職員からは確認されている。

Ⅲ. 学校研究全体の成果と課題

本校の「主体性・自律性の育成」に向けての研究実践は、「授業づくり」「人間関係づくり」「参加への意欲づくり」の3つの柱を中心として取り組んだ。「主体性・自律性の育成」の課題は、学校教育における不易のものであることを確認している。これまでに成就感や達成感を持たせるよう取り組んできた実践により、少しずつではあるが生徒に変容が見られるようになってきた。以下に研究の成果と課題を挙げたい。

1. 授業づくり

成果

◇生徒の学びの姿の変容

日々の授業の中で生徒が意見を述べたり、話し合ったりしている学び合いや発表している姿から、多くの生徒がいきいきとした様子を見せ、授業への充実感が感じられるようになった。また、家庭学習の時間も増え、授業での達成感が家庭学習の習慣化にも結びついたと言える。

本校 生徒アンケート（全学年）より

- ※ 興味をもったことは、自分から進んで学習している。
(生徒アンケート) 2008年7月 (61%) → 2010年7月 (77%)
- ※ わからないことはそのままにせず、先生や友達に聞いたりしてわかるまで努力しようとしている
(生徒アンケート) 2008年7月 (61%) → 2010年7月 (79%)
- ※ 自分で学習計画を立てて、ふだんからコツコツ学習している。
(生徒アンケート) 2008年7月 (40%) → 2010年7月 (50%)

◇「生徒主体の授業」への教職員の意識の改善

「学び合い」の実践により、一人一人の教職員が、生徒が意欲を持って授業に取り組むような課題設定の工夫や仕掛けづくり、生徒主体の学び合いのできる場づくりに取り組むことができた。その結果「教師主導型授業」から脱却し、「生徒主体の授業」への教師側の意識の改善が行われた。

本校 教職員アンケート・生徒アンケート（全学年）より

- ※ 指導では生徒が意欲を持って取り組み、力がつくように教材研究や指導法の工夫に努めている。
(教職員アンケート) 2008年7月 (86%) → 2010年7月 (100%)
- ※ 学習していて、おもしろい楽しいと思うことがある。
(生徒アンケート) 2008年7月 (69%) → 2010年7月 (82%)

◇学校ぐるみでの授業改善

授業改善プランの視点①、②、③

〈授業改善プランより〉

における重点目標を、全教科が横並びで設定したことで、日頃の指導のベースとすることができた。

また、各教科の特性や差異はあるが、右記のような具体策をそれぞれの教師が実践し、授業改善をすすめることができた。

単元や本時の見通しを持たせ、「本時の目標」を理解させ個人思考、グループ思考の時間を十分に取り、自らの学びを振り返ることは「協同学習」の理論に基づいて、本校なりの実践として、学校全体で共通実践することができた。

- 視点①** 興味・関心を高め、参加への意欲化を促すための工夫
 - ・「本時の目標」の表現と提示の仕方を工夫する。
 - ・電子黒板やプロジェクター等を利用した視覚的効果を図る。
- 視点②** 言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する
の設定と指導法の工夫
 - ・自分の意見や考えを大切に、書き込めるワークシートの工夫をする。
 - ・用語が使える環境づくりとして掲示の工夫をする。
 - ・自分の考えを言葉や絵、コンセプトマップ等で表現する場の設定をする。
- 視点③** 「学び合い」のできる学習の場づくりと教師の働きかけの工夫
 - ・互いに協力できる役割分担をする。(司会、計時、記録等)
 - ・解決方法や表現を提示するためのホワイトボード等の活用をする。
 - ・自分の考えを、比べ、考え、共通点や相違点を明らかにする。

◇学び合う力の向上

授業のみではなく学校生活全般の中で、自分の思いや考えをきちんと言葉にして相手の人に伝えられるようになってきた生徒が増加している。

また、今年度の全国学力・学習状況調査の国語科においても、伝えるべき内容を整理して書く、新聞記事を読んで自分の考えを書くなど「書くこと」の領域が優れていた。

本校 生徒アンケート（全学年）・教職員アンケートより

※ 自分の思いや考えをきちんと言葉にして相手に伝えられるようになってきた。

（生徒アンケート）2008年7月（32%）→2010年7月（75%）

※ 授業の中で言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を育成する場や学び合いができる授業づくりに取り組んでいる。

（教職員アンケート）2008年7月（79%）→2010年7月（93%）

課題

◇授業改善プランの見直しと活用

授業改善プランは日頃の指導のベースになるものであり、今後も授業改善を通して、各教科で検証し、改善、修正していく必要がある。特に実践の評価のあり方について、さらに検討していく必要がある。

◇学び合いの質の向上

「学び合い」の活動は各教科の特性はあるが、連携が大切である。班の構成や役割分担、課題の提示の仕方など、本校全体でさらに追求し、工夫していく必要がある。

また、個人思考が深まらない生徒への手立ては、教師がすぐ支援するのではなく、生徒同士で解決できるような集団づくりを考え、進めていく必要がある。

◇教科の力となるための言語活動の充実

「話す力」「書く力」を教科の力とするために、自分の考えをまとめ、発表したり、交流したりし、さらに自分の考えを深めていけるような言語活動の場を一層工夫する必要がある。

2. 人間関係づくり

成果

◇全教職員による生徒理解

本校が取り組んで3年目となったQ-Uの分析は常に学年会、職員会で話し合わせ、生徒理解に生かされた。これは、学級担任の学級づくりの指標となることはいうまでもなく、また、不登校傾向の抑止にも効果が見られた。

◇人間関係づくりの心の充実

職員全体でライフスキルの研修を受けたことで、ソーシャルスキルの必要性を学ぶことができ、指導の方向性が一致した。その結果、各学級で取り組んだことで学級づくりにも成果が見られた。さらには、生徒にもその思いが伝わり、生徒会活動のいじめ防止活動に発展した。

課題

◇アンケートや調査による分析結果の活用

Q-Uによる学級分析は、職員全体での共通理解が図られ、分析から個々の生徒に対し支援や配慮に生かすことができた。今後はさらに、その分析から方策を学級づくりや授業に生かせるなど学び合う集団づくりに生かすことが課題である。

3. 参加への意欲づくり

成果

◇主体性を高める生徒会活動

平成22年度は生徒会の大テーマ「輝く国中生」を目指して、各専門委員会ごと「一大事業企画」取り組み、生徒主体の活動になるよう見直しを図ることができた。それぞれの事業終了後に互いの評価で肯定的な面が多く得られ、次への取り組みの意欲につながった。

また、生徒が学校生活の様子をよく見つめ、自分たちが直面している問題を把握し、活動計画を立案することができた。(いじめ撲滅、エコ活動、一日一善運動、目安箱等)

◇主体性・自律性を育む学校行事

生徒が主体的に運動会、文化祭に取り組むことで、自己有用感や達成感、充実感を持ち、意欲化に大きくつながった。このことは、地域を巻き込む中で培われる社会性の育成、リーダー養成という点からも大切にしていきたい。

課題

◇学級での話し合い活動の実践

今後は学級での諸問題の解決に向け、学級会等での話し合い活動の充実を図る必要がある。言語を通して意思疎通、相互理解を促し、よりよい集団を形成していくための指導の工夫が必要である。

4. 今後に向けて

この2年間の取り組みを通して、「主体性・自律性を育む」ためには、授業だけではなく、学校生活全般に渡って生徒の意欲を揺さぶる「場づくり」の必要性を感じた。学習の主体は生徒であるが、指導の主体はあくまでも教師である。この中で、私たち教職員一人一人が方向性を同じくした協同による実践ができたことは大きな成果であった。

今後はさらに、生徒が主体的に取り組んで「成就感」「達成感」が得られるような指導の工夫を考えていきたい。

本物の教育実践研究の追求

中京大学 杉江 修治

1 学校文化を変える研究へ

教育現場での実践研究の事例数は決して少なくはない。行政などからの研究指定、研究依頼に応じた実践報告は毎年毎年積み重なってきているはずだ。しかし、それらの成果は日本の学校教育を改革する力としてどれほど機能してきているのだろうか。

1989年の学習指導要領の改訂で「新しい学力」が示された。学力観の転換は21世紀を目の前にして必要な作業であった。知識習得に重点を置いてきた教育からの転換は必然ともいえた。「新しい学力」達成のための実践研究は数え切れないほど行われた。しかし、授業をはじめとする教育の質はどれほど変わったのだろうか。子どもの学力の質も本当に変わったのだろうか。

教育研究は、テーマは現代的になっても、それを進めるためのイメージネーションが豊かではない。これまでの学校文化の範疇で対応するという水準の事例が多すぎるように思う。時代が求める課題が質を変えていくにしたがって、実際に行われる研究との間に乖離が起り、教育研究の形骸化はますます進んできているのではないだろうか。

みのりある研究がなされてこなかった責任は、個々の教師に帰せられるものではない。むしろ、学校が生み出してきている成果を認めず、教師の資質に対して一貫してマイナス評価をし、教師の自由な発想づくりを押さえ込んできた教育政策に大きな責任があると思う。しかし、その一方、そのような状況の下でも、教育のプロとしての教師の創造的な挑戦をもっと求めたい気持ちもあるのである。

新しい時代に対応できる力を子どもに身に付けさせなくてはいけない。さらには新しい時代の中で、人々の幸せにつながるような社会づくりに参加できる資質を子どもに付けなくてはならない。これは喫緊の課題である。また、そのような意欲を持ってはいても、さまざまな要因によって不適応状態にある子どもも多数いる。これもまた後に回せない課題である。

教育研究が、研究をして報告書を書くという教師の作業で終わるようなことがあってはならない。現代の課題を踏まえて、子どもたちを本当に変えるためにはどうするのかという実践追求として行われなくてはいけないし、その成果はその学校に「文化」として定着していくことが求められる。

そういった成果を得るためには、行政などから与えられた課題をこなすという発想ではなく、教師集団の構成員全員が、その学校の教育課題を共有化し、一人ひとり、そして集団全体として内発的に研究に取り組む体制が必要である。自分が所属する学校の課題をしっかりと議論し、教師一人ひとりも自分自身の教育観、教育論を変える勇気を持たねばならない。

愛知県のある中学校が取り組んだ研究事例を調査したことがある。1980年代、習熟度別指導の導入の妥当性を検証する研究指定が多くあったころのことである。この学校は県内でも有数の荒れた学校であったが、習熟度別指導の導入と同時にそれが一気に沈静化したのである。本来、習熟度別指導の有効性には大きな疑問があり、通常ではそれを導入することで子どもが落ち着くなどということはいえない話である。

当該校に出向き、管理職、研究主任などにインタビューを試みると、ひとつのことが浮かび上がった。それは、研究指定を受けるに当たって、教師集団の中で徹底した生徒理解に関する議論を行ったというのである。結論は「どの子も伸びたがっている」ことを前提とした指導を常に行うということであったという。校内で統一された健全な生徒観に基づいた授業設計が行われ、生徒への信頼から出発する授業過程をとることが成果をもたらしたのだった。

実践現場での教育研究の取り組みでは、これまでの教育文化をきちんと捉え返し、見直す必要がある。戦後65年を経た学校教育の歴史の中で、疑問の余地なく進められてきている教育の中に、知らぬ間に子どもの成長とはかかわりのない事柄、むしろそれを阻害する事柄が紛れ込んでいる可能性がある。教師という大人主導で進められてきた教育には、知らぬ間に子どもより大人に都合のよい論理が入り込んでいる可能性があ

る。

学校で教師にポジティブな評価をされる子どもはどんな子どもだろうか。「関心・意欲・態度」が評定の中に入る過程で、教師の意に沿った活動をするよい子が望ましい子だと捉えられているようなことはないだろうか。教師の発問に積極的に手を挙げる子どもは、学級の学習活動を高めるという意識で発言しているだろうか。むしろ自分の欲求を満たすという自己中心的な意欲の方が勝ってはいないだろうか。それを教師はどう評価しているのか。

子ども主体の「学び」中心の授業の大事さは今や常識になっている。しかし教師の「教え」からの図式の転換がなされている授業はむしろ少数である。学習は「教える」ことではなく「学ぶ」ことだ。しかし、子どもたちは、授業などを通して、学習は「教えてもらうこと」だと考えている。依然として、多くの子どもたちは、普通の授業の中で、学習とはそういうものだということと同時に学習してきている。

学ぶことは自分が「学び取ること」だという学びの態度を身に付けさせるためには、本当にそのことを学ばせるような学習機会を作らなくては不可能である。教師がことばで「自分で学べ」といってもそれは子どもには届かない。

ほとんどの子どもは日常生活の中ではきちんと意思を交わしている。それにもかかわらず、今の子どもはコミュニケーション能力が低いということばを、中学校の教師からも聞くことがある。実際は、子どもたちは、教師という大人の基準の中では、そして授業という何か枠付けられた場面では、どう話しているのか分からないということなのである。子どもが何を話せばいいのか、よくわかるように指示をすれば、彼らはいくらでも話す能力はあるという立場で授業を進めれば、授業の活性度も随分違ってくるはずである。

子どもにとっても、教師にとっても貴重な時間を費やして行われる実践研究は、みのりあるものにしたい。自校の教育課題は何か、教師集団がその共有化を図ることと合わせて、研究の方法面でもしっかりした枠組みを持ってほしい。

私は日常の実践は常に「研究的実践」であるべきだと考えている。それは、個々の子ども、学級の状況、教材の中身などを考慮して、最適の教育を進めるためにはどうしたらいいか、予想や仮説を立てて学習指導活動を進め、成果を検証するというサイクルの中で実践するということである。このことは学校単位での研究でも当然必要な視点である。この観点をきちんと踏まえることで、研究成果の積み上げが可能になる。そしてそれが学校の文化づくりの基盤となっていくと考えられるのである。

私は、教師たちが感じている発想の束縛をはずしたときに、実に豊かな実践を作り出すことができるという事例を数多く見てきている。教師たちは自信を持って教育の改善に取り組んでほしいと思う。

2 国府中学校の研究

(1) 国府中の研究テーマから

国府中学校の研究テーマは「自ら学び、心豊かで、たくましく生きる、実践力のある生徒の育成」である。ことばだけを追う限りでは、これまで全国で進められてきた実践研究のテーマと大きな違いはない。目新しさはないのである。気配りが十分に利いた「研究構想図」も多くの実践研究では図式に終わってきている。問題は、このテーマを教師一人ひとりが、そして教師集団がどう理解し、どう捉え、共通理解し、実現にしっかりと方向づけた実践の工夫をするかである。

教育基本法では、教育の目的として「人格の完成」と「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質」をあげている。公教育では、特に後者の目的を希薄化させてはならないだろう。しっかりとした資質を持って巣立つ子どものイメージを底に据えた教育を進めることが必要であり、テーマや研究構想図のことば一つひとつがこの目的と結びついている必要がある。

私は、国府中学校には、2009年2月を最初のきっかけとして、さらに4回、授業を伴う校内研修会に参加してきた。また、学校評価に関して関係委員として資料を拝見する機会を得た。限られた経験ではあるが、そういう経験から、2点、協同を基礎に置いた学びと学校評価という点から国府中学校の研究について触れたいと思う。

(2) 協同原理に基づく学びの導入

2009年2月にはじめて国府中学校にうかがったときは、私の専門とする協同学習の紹介がその内容だった。学校の研究テーマの実現につなぐ教育理論として協同学習に興味を持っていただいたのである。研究テーマの副題にある「学び合い・認め合い・高め合う・場づくり・集団づくり」は、協同ということばと近いものがある。

私が考える協同学習は、ある、決まりきった教育の進め方、技法ではない。協同を基本に置いてさまざまな学習指導活動を進めようという、教育の基本理論である。したがって、教師やその学校の個性に合わせたアレンジが必要であり、可能である。教師は、一つひとつの学習指導活動の設計に当たって、自分で責任を負い、判断していく意思決定者である。その意思決定に際して有力な視点が協同学習なのである。

協同学習は人間関係改善の手法ではない。何よりも学習成果を高める原理である。教科の習得を高めるには競争学習の方がよいという考えは実証研究でも間違いだということが明らかになっている。協同学習は教科の習得を高める学習指導原理である。そして、協同を踏まえた学習活動を通して、人間関係の持ち方、コミュニケーション能力、役割、個人の責任など、豊かな同時学習がなされていく。

協同学習でイメージされる学習指導過程は、子ども主体の活動である。個人思考、それに基づくグループ活動、さらには学級全体で高め合う全体交流など、教師の役割は子どもが積極的に活動できるようにする仕掛けづくりであり、学習は基本的には子どもに任される。自主、自律の学習態度の同時形成も、協同学習の効果である。

協同学習の効果の源泉は、共に学び育ち合うことの意義を理解し合った学習集団の力である。子どもは誰もが成長したがっている。仲間が持つ成長への願いを、自分のそれと同様に理解し合っている集団の中では、相互に信頼が生まれ、適切な交流が重ねられる。信頼に支えられた人間関係の中で、人は最も意欲づけられ、心理的にも安定する。そこでは、理解の遅い子どもは安心して自分の理解できなさを仲間にさらけ出すことができる。仲間を高めるために、妥協のない、厳しい話し合いも交わされるのである。

協同学習で求めている人間関係は、単なる仲よし関係ではない。人間関係トレーニングをすれば授業や特別活動がうまく進められるということはないという経験を多くの教師がしている。一般の人間関係トレーニングは、子ども相互の適応的な関係に関心があり、共に学びを作り上げ、共に高め合うという課題解決志向性まで踏み込んでいないということを承知しておくべきだろう。

課題解決志向集団では、互いの理解や感受性の育成にとどまらず、時に厳しい鍛え合いもなされていく。そのような集団は課題解決行動、すなわち授業や、きちんとしたねらいを持った特別活動などで養われるものである。部活動などは、課題解決志向集団の好例であるように思う。部活のようなクラス作りという発想も無稽とはいえないのである。

なお、協同の原理は教育をめぐる幅広い領域で求められるため、必然的に学級の枠、学校の枠も越えていく。アメリカで協同学習を提唱しているジョンソン兄弟は、教師が生徒に対してできる最大の貢献は「教師の協同」だと言っている。また、最近の教育課題である小・中連携などでは、小学校と中学校の教育原理の一貫性の意義が認められてきており、学校同士を結ぶ協同も有意義であることが分かってきている。さらに、地域と学校との協同、言い換えれば地域と学校との信頼関係の構築は、子どもの学習環境づくりのきわめて重要な条件となっており、そういった事例も積み上げられてきている。

協同学習による実践では、子どもを軸に学習を進めていく。教師はそのための仕掛けづくりが主要な仕事になる。しかし時には、学び合いに必要な情報提供のための講義をする場合もある。子どもの育ちを促すべく、柔軟で創造的な工夫が要求される。この教育観の転換は勇気のいることであり、困難を伴う。国府中学校の教師集団は勇気を持ってそこに足を踏み出した。学校の課題を実質的に解決するための大きな一歩を踏み出しているのである。

国府中学校では、子どもの学習活動への協同原理の積極的な導入に加え、より幅広い協同へのイメージを持っている。研修会での教師の協同の姿は大きな教育改善へのエネルギーになっている。地域との連携の事例としてどのような成果が出てくるかも興味深いところである。

(3) 学校評価について

国府中学校は学校評価を信頼性高く実施する努力を試みた先進的な学校でもある。学校評価は研究的実践を学校の文化として定着させるためには不可欠の手続きである。国府中学校で作られた緻密で実施可能なこの試みも、各学校で非常に参考になるものである。

私自身、学校関係者委員として、2009年度の実践にかかわる情報を拝見し、意見を述べさせていただいた。私などからの外部評価のデータそのものも、学校による自己評価の情報である。

次のコメントは、私が学校に提出したものである。2010年度に向けての教育改善のための資料としてふさわしかったかどうかは確かではないが、このような評価を踏まえた次年度の計画立案作業では、学校として目指す、より高い目標を作り出していく工夫がさらに必要である。子どもの育ちは予想を超えたものがある。驚きのある育ちを促したいものだ。しかし、教師が現状に満足したときに学校としての課題意識が弱まり、それはしばしば教育の低下につながっていく。「1」の言及はそれにかかわるものである。

また、1小学校、1中学校の比較的規模の小さい学校であることから生じる課題も存在している。規模が小さいことはメリットであると同時にデメリットでもある。地域の中で、保護者も含めて、イメージする教育が小さくまとまってしまわないための取り組みが必要になる。国府中学校の評価情報を点検することで、一委員としての私にも、随分多くの成果と課題が見えたのである。

小松市立国府中学校学校関係者委員としての意見

中京大学 杉江 修治

国府中学校が出された「学校評価に関する自己評価結果報告書」に関しての意見を次に述べます。なお、この意見は、2009年度、3回にわたって授業改善にかかわる校内研修会に参加した者としてのものです。

1 「達成度判断基準」に示された自己評価の水準は、実践を謙虚に捉えた構えが反映されており、次年度への実践の発展という含みから、妥当であると受け止めました。

なお、達成度は全般的に高いので、現状の評価基準を用い続けたならば、年度を重ねるにしがたい、常に天井に達する評価になってしまう可能性があります。すべて“A”評価になればそれがゴールだということではないと思います。難しいことではありますが、年度ごとに、より高い水準の設定を試みるが必要になってくると考えます。

2 学校が追求する学力についての不断の研究を期待します。「確かな学力」「豊かな心」「健やかな身体」といった柱立てを有機的に結びつけた学力というような、統合的な学力追求がすべての学習指導活動（特別活動なども含みこんだ）でなされていく学校態勢を期待します。どんな生徒を育てるのかについての共通理解のための議論が日常となる学校文化を持つ学校であることが大事だと考えます。

3 比較的規模の小さい、しかも1小学校1中学校という形の学校であるために、人間関係の固定が見られ、自信を持って生活できていない生徒も見られるという点について。中学生は青年期の入り口であり、それまでの狭い、自分中心の自己世界から他者との関係を洞察できるところに発達していく段階です。その間には自己発見、他者の発見などさまざまな内面の発達をしていきます。したがって、小学校時代から引きずっている関係をもう一度それぞれの生徒が自分自身で洗いなおす機会でもあるのです。クラスの仲間について、たくさんの発見があるような機会を、学校生活を通して設定することで、生徒は他者も自分と同様の成長意欲を持ち、生き生きとした生活を望んでいることを知るができます。人間

関係の固定を前提にするのではなく、中学校はそれを壊して、もう一度、互いを尊重し合うことができるようになるための経験をする場なのだと捉え、そのための仕掛けをしてほしいと思います。授業における仲間への貢献、個人の責任の達成などの工夫があるように思います。そのように他者の人間性を正しく理解することは、個が生きる力として非常に重要だと思います。

4 「努力」「成果」「満足度」という3次元の指標が用意されており、具体化した記述が表の中にあります。ただ、この3つが有機的に結びついた形にすべてなっているのでしょうか。まず具体的な項目を考え出し、それぞれに3つの指標のいずれかを当てはめるという操作をしていたのではないのでしょうか。この3つの指標は「努力」→「成果」→「満足度」というようなつながりが想定されていた方が、結果を理解しやすいように思うのですがいかがでしょうか。

5 教師がいじめなどへの対応を十分にしていないというような趣旨の回答を生徒のアンケートに見ることができます。ところがこの結果は教師や保護者の結果とは食い違っています。これをどう解釈したらいいのでしょうか。一つの仮説ですが、子どもが教師依存的になっている可能性はないのでしょうか。少々の問題は自分たちで解決すべきですが、それまで教師に依存しているということはないのでしょうか。自立的な活動を促すことが必要かもしれません。家庭学習時間の短さも問題として挙げられていますが、根っこはこの依存体質と通じるかもしれません。比較的小規模な学校ですから、教師の目が行き届き、先に手を添えてしまうことはないのでしょうか。自立、自治の力を付けるための生徒への意図的な働きかけについて検討が必要かもしれません。

6 保護者の授業に対する評価を高める必要がまだあるように感じます。授業参観などでは、保護者は自分の学校経験を元に参観するでしょう。言い換えれば、教えてもらう立場の経験しか持たないのです。参観時には、授業のポイントを知らせ、ある工夫を導入する場合はなぜそういう仕方をするのかについての解説をするなどして、教師の意図の共有化を図りながら授業を見てもらったらどうでしょうか。保護者自身に、授業は教えてもらう場だというような考えから脱却してもらう必要があります。また、授業などに関する研修会そのものに参加してもらうのもいいかもしれません。

7 生徒アンケートの経年変化について、なかなか解釈が難しいところがあります。1年生から3年生への数値の推移は、学年変化に伴うものなのか、それともその学年の固有の問題なのか分かりません。今年度の1年から3年までのデータを並べると同時に、前年、前々年の1年生のデータと今年度の1年生のデータ、2年生、3年生も同様に、という形で並べたデータも用意するといいかもかもしれません。

国府中学校の実践研究は、学校評価を軸として、課題を明確にし、教師集団のめざす方向性を定め、計画、実践、評価という研究的実践のサイクルの中で進められてきている。学校が抱える課題が、教師たち自身の課題になってきている。この研究的実践のサイクルに、それを上昇させる力を加えることで、子どもたちはより大きく変化すると考えられる。一貫した協同原理の導入が上昇へのエネルギーを生み出していく有力な仕掛けとなっている。

国府中学校の教師集団の挑戦の意欲は、学校文化を変える大きな力となると考えられる。こういう構えもった、こういうアプローチをとった実践研究が、今必要なのである。

あ と が き

平成21年度の学校研究の締めくくりとなる校内研修会を平成22年2月23日に行いました。国語科と数学科の2年生の研究授業を行い、中京大学杉江教授の御指導を頂きました。

国語科は「書く 視点を変えて書こう」、数学科は「確率」の教材でした。授業者が立てた指導案について職員が2グループに分かれ事前検討会を持ちました。教科を越えて指導案を検討することもこれまで幾度か回を重ね、授業者の後押しにとそれぞれの意見や感じたこと、疑問などを出し合い、授業者をときには戸惑わせながらも活発な話し合いが持たれました。

当日はどちらの授業も前時からのつながりの中、今日の目標、活動内容や時間の目安、班内の役割分担が示されスタートを切りました。これまでの「協同学習」の考え方を活かした授業として、生徒たちが随所で主体的に活動し、ねらいに迫っていくことができていました。

どちらの授業も班の活動をスムーズかつ有効に使うため、役割を生徒に分かりやすく把握させるための工夫、座席の移動の仕方、各自が記入するワークシートなどが十分念查され準備されていました。授業案ができ1時間のプランが確定したあとも、授業者が授業を実現していくには、様々な準備が必要であることをよく示していました。

授業後の分科会ではグループごとにKJ法による整理をし、内容を伝え合いました。その後、杉江教授からそれぞれの授業とこれまでの本校の研究の実践について、基本となる大枠から細部の工夫の仕方まで貴重な助言を頂くことができました。

平成22年度、新旧教職員の中で上述のようなこれまでの成果と課題の共有を進め、6月、7月の2回の校内研修会で全教職員が研究授業を行ってきました。研究発表会では3教科の授業、生徒活動として生徒議会を見ていただくこととなります。参加された方々からの忌憚のないご意見を頂き、今後の研究に活かしていきたいと考えております。

平成22年10月

小松市立国府中学校

教頭 八 田 洋 一

研 究 同 人

校 長	中村 茂	教 頭	八田 洋一	教 諭	酢野 隆司
教 諭	長谷部安子	教 諭	中村 光貴	教 諭	齊籐 美紀
教 諭	越田 荘司	教 諭	東野 和彦	教 諭	石橋 利一
教 諭	木下ひら子	教 諭	宮川 澄子	教 諭	西辻 英恵
教 諭	木田 靖之	教 諭	田原 清悟	養護教諭	坂上 千種
主任主事	中村さやか	講 師	北 泰明	講 師	小松 智子
英語講師	為川亜紀子	司 書	相本 法子		

旧 研 究 同 人

校 長	坂谷 敦子	教 諭	湯浅 有紀	教 諭	吉田 信子
講 師	石田 和重	講 師	藤田 智子	講 師	有馬ゆかり
講 師	田淵 友香	数学講師	中西 一夫	英語講師	森本瑠美子

監修者

杉江 修治 中京大学教授・博士（教育心理学）

自ら学び、心豊かで、たくましく生きる、実践力のある生徒の育成
学び合い、認め合い、高め合える場づくり・集団づくりを通して
(協同教育実践資料12)

2010年11月25日 第1刷発行

著者 小松市立国府中学校

監修者 杉江修治

発行 一粒書房(有限会社一粒社 出版部)

〒475-0837 愛知県半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

編集・印刷・製本（有）一粒社出版部(代表 都築延男)

〒475-0837 半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

ISBN978-4-86431-010-9 C1337